砂の星、響く声 外伝

理祭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
砂の星、響く声　外伝

【Ｎコード】
Ｎ８６７２Ｐ

【作者名】
理祭

【あらすじ】
『砂の星、響く声』本編に含まれないサイドストーリーの掲載をしていきます。

1（前書き）

本編以前のお話になります。

1

新しい年の初めを迎え、街は活気に溢れていた。
バーミリア大水陸の中央、ヴァルガード。純粋量では商業都市トマスをも上回る水源を持つ、ツヴァイ帝国首都である。

その外観はまさに要塞であった。この世界において水源、特に「枯れない」水源を持つことはそのまま権力の象徴でもあったから、当然のことと言える。ここは大水陸でも最大水量を誇り、また最も多くの人の血が流れてきた呪わしき場所でもあった。
不安定な水源の沸き。故に移動可能な生活様式が基本となる世界では、まずもって石造りの街並みという時点で極めて珍しい。如何に堅固な壁をつくろうと、そこに水が沸かなくなってしまえば人は生活できないからだった。

だからこそ、この土地を手に入れた時の権力者達は皆こぞって石を積んだ。より高く、より硬く。
しかしどれほど高く石を積み上げようと、あるいはだからこそ、長らくこの地は戦乱の舞台となってきた。“妖精の地”というこの地の異名は、あまりに多くの人の躯がここに埋もれてきたことに対する忌み名でもある。

幾度も戦火に巻かれてきたこの地だが、ここ十数年程は平穏の中にある。バーミリアで最大の勢力を誇るツヴァイ帝国は、周辺を無数の敵に囲まれ辺境での小競り合いこそ常のことであるが、相手国の首都まで攻め込むことはあっても逆に攻め込まれるような危機に陥ったことは皆無である。建国からすでに幾代も経ち、強大な国ではむしろ外敵よりよほど警戒すべき内乱の類の兆しもなかった。水陸全土を席捲した「魔女狩りの大災」以降、衆民による動乱もない。

壮年の域に入った皇帝フーギ・スキラシュタの施政は革新的ではなくとも、外征より内部の潜在的な商工業の発展に尽くそうとした先代の意思を継いで賢明だった。

もっとも、そのことには皇帝個人というより、先代からの重臣ナイル・クライストフの影響が色濃いと言われている。幼少時から見知り、自身が皇帝位につくとそれまで空位だった宰相に彼を登用した皇帝フーギの信頼は篤かった。

ナイルの政治的志向は革新的な保守と言われる。国の興りからして外征国の特色が強い自国を、より安定させるための方策を思案していた。ヴァルガードの豊富な水源を利用した周辺の緑農地化はその最たるものだが、他にも様々な例がある。有力貴族の子弟を対象とした『大学』もその一つである。

それは、将来の国の根幹を成す人材の教育という目的に加え、優秀な学者達の保護という意味もあった。学者には奇矯な性格の者もあり、彼らの多くは生活能力に乏しかった。各地の有力者は自身の名声のために高名な学者を自家に招いたが、ナイルはそれを国家規模で行ったのである。

さらに、その大学に他国の有力者達の子息まで招こうとしたところが彼の政治的手腕の妙技であろう。水陸最大国家としての示威を他に明らかにしつつ、他国同士の牽制もその両手に弄び、あれよあれよといううちに大学を一種の水陸最大の社交場と化すことに成功したのだった。

発足から既に数年。多くの高名な学者と各国の高級子弟達が集った大学は、文字通り水陸で最上級の学び舎であった。

雑踏の中、一人の女性が街を翔けるように歩いている。

実際には、その人物は女性というにはまだ年若く見えた。律動的なテンポを刻む足音に呼応して、長く伸びた金砂の髪が揺れている。長身だが容貌にはまだ少女の面影が強い。彼女は先月、十六を迎えたばかりだった。

身に包んだ服装は簡素だが、仕立てのよさが窺える。お抱えの服飾屋が注文の際に一々申し出てくる装飾過多なあれこれを徹底的に排したデザインは彼女の好みだったが、彼女を本当によく知るものであれば、だからこその変化に気づくかもしれない。彼女のシルクのブラウスの胸元には、金細工の石止めが密やかに飾られていた。試みに耳飾りもつけてみたのだが、すぐに頭が痛くなってしまい彼女はそれを諦めていた。

クリスティナ・アルスタ。それが彼女の名だった。バーミリア大水陸で権勢を誇るツヴァイ帝国において、まず名門と呼ばれるに足る貴族の令嬢である。

アルスタ家は建国から続くが、その名声を得たのも失くすのも常に剣を手にしてであった。一方で政治の類には疎く、皇位継承のいざこざに巻き込まれる形で長らく主流派からは遠くに追いやられることとなった。それでも不平一つこぼさずにいる実直さが周囲から見直されてきたのはつい最近のことである。

それで起きる面倒もある。最近、彼女の家には訪問客が絶えなかった。

理由は考えるまでもない。今になって近づいてくるのは友誼を結び、可能であれば甘い蜜を吸おうという下種な輩ばかりだった。もっとも厳密には彼女の家ではなく、彼女を介した先の相手に、ではあるが。

馬鹿馬鹿しい。端正な顔をわずかに歪め、彼女は口の中で毒づい

た。

そのような浅はかさが、あの方に見通されぬわけがない。家同士の交流の折、何度も会話の経験を持つ彼女は、静かな威厳を身にまとった彼の人物を自分の両親に劣らぬほど尊敬していた。

剛胆でありながら常はそれをひけらかすようなことなく、帝国宰相という位を鑑みれば異常といえるほど社交にも興味を示さない。それでいてその地位に居続けられている現実が、彼の底知れなさを示している。変人ではある。そして、家名に「愚直」と書き加えられていると噂のアルスタ家と同じく、その奇妙さも代々連なるものかもしれなかった。

この日は新年の無事を祝って皇帝が衆民に酒と休日を賜り、市場はあえてその機を逃すなと大店を構える商人とそれに群がる客が殺到している。賑やかしい一画を抜けてしばらくすると、彼女はさきほどまでとは嘘のように閑散とした場所へと辿り着いた。

その中ほど、ただヴァルガードの豊富な水源故に作られた小さな無用途の噴水の傍らに、彼女の探す人物は横たわっていた。

相手の名を呼ぶ時、彼女は彼女だけが気づく一瞬の間を置いてから、囁いた。

「――ニクラス」

目を閉じていた人物は、その呼びかけにゆったりとした反応を返した。清濁併せ持つことを自ら使命としているようなトマスなどと違い、ヴァルガードはこの水陸でも恐らく最も治安のよい街ではあったが、振舞い酒のせいで人々の気が緩みがちな中、のうのうと眠りこけていて無事にすむ道理はない。まさか本当に寝入っていたとは思えなかったが、彼女がたっぷり数秒を数えることができるほどののびやかさでまぶたを開けたその人物は、まず彼女の背後に広が

る青々とした空を瞳に映し、何事かを思案するように眉をひそめ、それからようやく彼女の姿に焦点をあわせると、
「……ああ。クリスか」
いくらか気が抜けていたが、彼がきちんと自分の愛称を呼んだことに、彼女は内心で満足した。この男は生きることの様々に自分だけの制約を課しており、他人の名前を縮めて呼ぶという些細なことにもかなりの間、余人には理解しがたい抵抗を示していた。

感情の動きを完全に肌の表面下で制御しつつ、クリスは片眉をあげる。
「新年最初に会っての言葉がそれか？　ニクラス」
からかいの言葉を受け、眠気を払うように頭を振ったニクラスが応えた。
「昨日、王宮で会ったばかりじゃないか……」
「それは公的な場での話。プライベートでは、今この瞬間に新年を迎えたばかりよ」
男は、感情の窺いしれない眼差しを向けると、一旦瞳を閉じ、開いた。
「……おはよう。クリス。新しき年の祝いを、君の輝ける武勲への祈りとともに」

高すぎず低すぎもしない、耳に心地よい音階で彼が口にしたのは、正しく彼女好みの文言だった。
「おはよう、ニクラス。新しき年の祝いを、貴方の生あることへの感謝を込めて」
胸を張り、彼女はわずかに唇の端をほころばせた。ニクラスもかぶりを振りながらそれに応える。
「それで、どうしてこんなところで惰眠を貪っていた。いくらなんでも、誰に襲われても文句は言えんぞ」
「……バザーを見学に、きてたんだけど。知らない相手にいきなり

葡萄酒を両手に渡されて。しばらく頭を冷やしてた」
　言われて初めて、クリスは彼の口元からかすかに酒の匂いが漂うことに気づいた。
「また馬鹿なことを」

「ああなったらいくら断っても相手は話を利かないよ。酔っ払いは適当に受け流して機を待つのが正解……クリスは、大学でも飲まないからわからないだろうけど」
「当たり前だ。好んで自ら醜態を晒すような真似、私にはまるで理解できん」
「楽しいんだけどな、酒も」
「そんなものがなくとも、私は充分に人生を楽しんでいる」
　ふくよかな膨らみを誇るように宣言する彼女を、ニクラスは天空輝く炎の星をみるような表情で仰ぎ見て、笑った。
「それでこそ、クリスだ」
「なんだ。物を含んだ言い方じゃないか」
「なんでもない。それより、よかったら市場に戻らないか。見たことのない食べものもたくさんあった。そのために家の食事を抜いてきたんだ」
「相変わらず物好きなことだ」

　呆れるように言いながら、彼女は特に顔をしかめることなく頷いた。一般的な貴族階級の人間がそうであるように、彼女も大学に入るまでは市井の売るものなどなにが入っているかわかったものではないと当然の如く思っていたものだが、そんな思い込みもこの男との出会いによってあっさり打ち破られてしまった。
　変人。正しく、家の血の流れるとおりに。自分がこの男と出会ってから半年ほどがたつが、そのことで自分にはいったいどれほどの変化があったのだろうか。男の存在が彼女に接し、交じって溶けることの想像は人知れず彼女の頬を薄桃に染め上げたが、それに気づ

いているのかいないのか、どちらにせよ微動だに表情の筋肉を動かさずに、男は言った。
「よし、行こう。……よかった、財布はなんとか失くさずにすんでる」

ツヴァイ帝国宰相の実子がなにをせせこましいことを。彼女よりわずかに高い位置にある肩に並び、クリスは生じた皮肉めいた感想を胸の中で押し殺した。二人きりの道中を、もう少しばかりこのままの雰囲気で過ごしたかったからこその選択であった。

2

「それで、今日は何時頃に向かうつもりなのだ？」
屋台で適当に食べ物を漁りながら訊ねたクリスの言葉に、ニクラスは冗談のない表情で眉をひそめた。
「向かう？」
クリスは呆れた。
「今夜は大学の来新歓宴会だろう。忘れていたのか？」
「ああ。そういえば、そうだった」
ニクラスは嫌そうに頷き、脳裡をさらうように瞳を閉じた。
「大講堂で、開始は十九時からだったか？　あまり、気が乗らないな」
「子どものようなことを言うな」
ぴしゃりとした声でクリスはたしなめる。

「普段の夜会とはわけがちがう。今夜の観宴会は我々にとってほとんど公的なものだ。ホストたるツヴァイ、そして大学を一番に推し進められたナイル様の顔に泥を塗るつもりか」
正論に、ニクラスは渋面になって押し黙る。さらに言葉を放とうとして一瞬それに戸惑い、やや勢いの乏しい口調で彼女は続けた。
「我々には……責務があるのだ。ニクラス」
その言葉を聞いたニクラスは、今までがそうであったように、顔に微妙な表情を浮かべた。異物を飲み込むような表情のまま、ゆっくりと首を頷かせる。
「わかってるよ。だけど、ちょっと困ったな。別に忘れてたわけじゃないんだけど、誰にも同伴の話をしてなかった」
やっぱり、完全に忘れてたんじゃないか。浮かんだ言葉は繰り出さず、かわりに彼女は別のそれを舌の上に転がした。
「ならば、私が供をする」

ニクラスは軽く目を見開いた。
「何を驚く」
「いや。……相手、決まってないのか？」
「決まっていない。それが何か？」
当然のようにクリスは言うが、ニクラスが意外に思うのも無理からぬことではあった。彼女ほどの相手であれば夜会の誘いなど引く手あまただろうし、当日までパートナーが決まっていないはずがない。

この時ニクラスの知らない事実は二つあった。一つは、彼女への誘いは決して多くなかったこと。それはもちろん彼女自身の魅力所以のことではなく、むしろ彼女の連れは既に定まっているものとほとんど周知されていたも同然だったからである。もう一点、それでも彼女に声をかけてくる者もないではなかったが――クリスは丁重な返事をもってそれら全てを断っていた。そのことと理由について、わざわざ彼に話す必要を彼女は認めなかった。
「私では不足か？」
「そんなわけないだろう」
貴族らしからぬ簡素な服装に身を包みながら、さきほどから道行く人々の視線を一心に浴び続けている彼女に、苦さのまじった笑みでニクラスは言う。
「助かるよ、クリス。今夜、一緒に行ってもらえると嬉しい」
「喜んで。ニクラス」

夕刻の迎えを約してニクラスと一旦別れたクリスを、玄関の前で男が出迎えた。
「お帰りなさいませ、クリスティナ様」
そっけなく頷き、そこからさらに感情をそぎ落とした声と態度で彼女は続けた。

「今夜の舞会、ニクラスと出ることになったわ」
「おめでとうございます」
「……ん」
綻びかけた表情をあわてて引き締める。
「すまないけど、誰か手のあいている者がいたら、あとで私の部屋に呼んでくれないかしら。全く、今からでは準備も事だわ」
「はい。至急、ファビオラをお部屋に参らせます。ご一緒にお飲み物などは如何ですか？」
「ええ、お願い。部屋へは一人でいいわ」

自室までついてこようとする男を下がらせ、クリスは屋敷の自室に戻ると窓際の椅子に腰掛けた。よく庭師の手入れが行き届いた中庭を眺め、それから落ちつかなげに立ち上がると姿見の前に立つ。自分では鋭さの勝ちすぎているように思える顔を睨みつけ、ため息をついて今度は衣装棚へと足を向けた。
相談役の相手が来るのも待ちきれないでいる。なんとも気の急いたことだ。自分を笑いながら、一人きりの部屋では他の誰に憚ることもなく、彼女はようやく自身に思う存分口元を緩めることを許した。

開けた衣装棚には数多くの衣装がしまわれている。一見して、それらは全て、既にニクラスの目に触れたものばかりに思えた。こんなことならなじみの服飾屋に頼んで新しいドレスを仕立てておけばよかった。体型に変化があったわけではないと思うが――月に一度の測りの結果を思い出しながら、物思いに悩む自身の表情が小さな鏡に映り込み、彼女は顔を赤くした。

これでは女そのものだ。いやもちろん、そうであることを忘れたつもりなど一時もないが。

ふと、胸元に光る石飾りに目がいって、彼女の瞳が夢から醒めたように色を戻した。今日のこれまではおおむね彼女の思い描いたとおりに進んでいたが、唯一つ不満だったことといえば、ニクラスがこの飾りについて何も感想めいたことを言ってくれなかったことだった。

もともと世辞の類を言うような性格ではないから、仕方ないのかもしれない。落胆が勝手な思考であるとは自覚しつつ、すこしばかり差した心の影を振り払うように彼女は頭を揺らした。

斜陽に転びかけた気分を晴らすために日課の剣を振りに部屋をでかけ、扉を出たところで飲み物を伴って現れた女中と鉢合わせしたクリスは相手に大笑いされてしまうこととなった。

幼くから砂にまみれてきた者の証である褐色の肌をしたファビオラは、アルスタ家に多く勤める女中達の中でも特に古株の一人だった。女中長と料理長の両方の経験を持つ異色の人間で、幼い頃にはクリスの乳母役も務めている。自身の子育てが落ち着いてから再びアルスタ家に戻り、それからは堅苦しい役職から離れクリスの侍女のような役割を負っていた。職責と階級差の激しい女中達のなかで特異な存在ではあるが、持って生まれた人柄のために彼女を毛嫌う者はない。クリスにとっては文字通り、母にも似た存在でもあった。

「そんなもの気にすることじゃありませんよ、お嬢様」

主人の奇行の原因を知った彼女は、遠慮のない態度でそう言った。

「男なんてものは元々、細かいところまで目が行き届く生き物じゃありませんからね。宝石の価値にも値札がついてはじめて合点するような輩です」

「……そういうものだろうか」

家の中では彼女を相手にした時にだけ使う、繕いのない口調でクリスは言葉を紡ぎ、息を吐いた。老女中はにんまりと笑み、

「もっとも、あのクライストフ様のご子息のこと、世の男どもとは一味違うかと思いますがね。気づかなかったのは、違う理由があったのかもしれません」
「なんのことだ？」
素直に訊ね返すクリスに、ファビオラは澄ました顔で告げた。
「こんなにも愛くるしいお顔が近いとあらば、いくら光り輝く宝石でも目に霞んでしまうというものです。ニクラス様のことをお話になるお嬢様は、それが良いことであっても悪いことであっても、どの物語にでてくる姫君より人の琴線を震わせます」

「からかうのはよせ」
自身の無粋を知る彼女は苦虫を噛み潰した顔になったが、ファビオラの目は真剣だった。
「とんでもございません。婆の言葉を疑いますか。なんなら街の雀どもに聞いてまわってもようございます。お嬢様は如何な深窓の姫君にも劣るところございません。なにせ、この婆のお嬢様なのですから」
「わかった。わかったから無茶はよしてくれ」
老齢にも近い身で街を歩きまわるようなことになれば、寿命を縮めてしまいかねない。苦笑してクリスは彼女の言葉を受け入れた。
「いいですか、お嬢様。女は皆、生まれながらに宝石でございます。輝く術も違えば、光り方も異なる。お嬢様は既に充分な輝きをお持ちですが、それ以上のものをご所望とあらば、よろしい。術は婆が存じております。いくらでもお力になりましょう」
「……あの唐変木の目を向けさせるのには、いったいどの程度の努力が必要だろうな」
「さしあたっては、この程度のものでしょうか」

言いながらファビオラが取り出したものを見たクリスの顔が歪む。女性の胸部から腰にかけて矯正することを目的としたその着装具は、

息苦しさがあって彼女にはどうしても慣れなかった。
「自然体の美しさもあるんじゃないかと思うんだが」
「宝石の輝きも圧力があってのものでございます」
逃げの言葉を打つクリスに、年老いた女中はあっさりとそう切り返した。

ニクラスは、約束の十分前に家を訪れてきた。
家を訪れるのに遅れるのは無論、訪問の儀礼に反しているが、早すぎるのもまた相手にとって迷惑なことではある。しかし、こういう場合必ず丁度の時間に現れる男の徹底ぶりは、少し度が過ぎているほどだった。

自身の背にある家名を慮ってのことだ。早い時間に訪れれば、クリスが来るまで代わりに誰か家の者が彼の相手をすることになる。なにせ帝国宰相の実子なのだから、家にいれば彼女の父親だって顔を出さないわけにはいかない。相手にそう気を使わせるのを嫌い、それ以上に自分自身そういったことを煩わしく思っているから、彼は決してその時間帯を外さない。
気持ちはわからないでもないが。執事から男の訪問を聞いたクリスは、壁時計の針を見て相変わらずぶれがないことに苦笑し、椅子を立った。

実際、近頃になって再び社交のしがらみに絡まれ始めているアルスタ家の一人として、同じような思いはある。彼の場合、さらにその数倍だろう。あの奇矯な性格はそのなかで形成されたのか。いや、あの性格だからこそ、そういう反応になるのだろう。つまり自分もあちら側であるという自覚は、彼女にもあるのだった。
「お持ちするお飲み物は暖かい葉茶でよろしいでしょうか」

自室を出る際そう訊ねてきた執事の男に彼女は考えて、首を振った。
「今、キッチンは忙しい？」
「夕飯の準備中ではあるかと存じます」
「そう……。私が行くと、邪魔になるかしら」
「なにか御用でいらっしゃいますか？」
「私が、お茶を淹れようと思ったのだけど」

男は薄く穏やかな微笑みを浮かべ、
「どうぞお気遣いなく。キッチンでも何も戦争が起きているわけではございません。ご案内いたします。しかし、ニクラス様をお待たせしてしまうことになりますが」
「ファビオラがね、言っていたの」
男の言葉に本心を隠しながらかわす為、クリスはさっきまで着付けを手伝ってくれていた女中の言葉を用いて言った。
「空腹こそ最高の調味料。男は少しくらい待たせておいた方がいいって。……あなたはどう思う？」
男は口元の笑みを少しだけ強く、執事として過不足ない態度で頭を下げた。
「まさに砂海をさまよった果てのオアシスの如くかと存じます」
そこまでいくと、逆に嫌がらせな気がするが。苦笑しながら、クリスは男の先導に従った。

急に家人が現れた料理場の人間は誰もが驚いた様子だったが、年若い彼女の希望を聞いて嫌な顔をする人間はいなかった。
忙しそうに働く彼らの邪魔にならないよう、クリスは執事からてほどきをうけてお茶淹れの準備を整えた。ティーカップも彼女の好みのものを選び、沸かしたお湯で温めておき、分量を吟味して香りの高い茶葉をポットに落としお湯を注ぐ。それらを全て自ら手に持って、彼女はキッチンを出た。

「みんな、邪魔をしてごめんなさい。ありがとう」
夕食前を迎え、執事の言葉でいうならキッチンはまさに“戦争のような”状態だった。そんななかで我儘を許してくれたことへの感謝を伝えると、彼らはさすがに手を止めることは出来ない様子だったが、笑顔を返してきてくれた。
「お嬢様、がんば！」
「こぉら、タリア。あんたはさっさとお皿の準備をしろ！　……いってらっしゃいませ、お嬢様。ご武運をお祈りしております」
戦場へ見送るような文言に生真面目に頷いて、クリスは男の待つ部屋へと向かう。

応接間では、ニクラスが眠そうな表情で頬杖をつき彼女を待っていた。
「すまない、待たせたな」
「いや、少し早かったか？」
言いながら、男が自分の持つ盆に視線を向けたのがわかった。
「今日は私が淹れてみた」
「それで遅かったのか。どうしてまた」
「向こうに着くのは、少しでも遅いほうが気が楽だろうと思ってな」
彼女の言葉の意味を理解したニクラスの眉に皺が寄った。小さく笑う。
「気を使ってくれたのか」

夜会の開宴は十九時だが、そのような場合、一般的に参加者は一時間程前を目処に会場を訪れる。それから開宴まで行われるのは挨拶回りと歓談、つまり社交なのだが、それはこの男が一番毛嫌っていることでもあった。
「煩わしく思っているのは、私も同じだからな」

澄ました顔で彼女はお茶を淹れ、男の前に差し出した。青白い陶器製のカップを手に取ったニクラスが、暖気のなかに混じる香りに口元を綻ばせる。それを見届けてから、クリスも自身のカップに手を伸ばした。

しばらくの間、会話はなかった。彼女はそれを不快に思わなかった。

葉茶の香りを楽しみながら、窺うように彼女は男を見る。正礼装ではないが、黒の礼服を自然と着こなした姿は生まれながらの貴族として堂にいっている。それなのに奇妙におかしみを感じてしまうのは、普段とのギャップがあるからだろう。

もっとも、それを笑える自分でもない。急にクリスは自分のことが気になった。

濃く引き延ばした新しいドレスは、着るのは初めてだ。ファビオラが母の意を受けて昨年のうちに注文してくれていたのだという。サテンの滑らかな触り心地も空を純粋に溶かしこんだような色も、装飾を控えめに抑えながら流行をとりいれたデザインも彼女の好みにあっていたが、それが似合っている自信はあまりなかった。

ニクラスも何も言わない。いや、この男が何も言わないのはいつものことだ。クリスはわずかに顔をしかめた。昼間は挫折した耳飾りだが、今また水晶石をあしらった飾りをつけているせいで、さっきから耳朶に鈍い痛みがあった。

「大丈夫か？」

そういうところにだけはすぐ気がつく。クリスは肩をすくめた。

「問題ない。少し、堅苦しいだけだ。どうにも身動きが取り辛い」

「似合ってるよ」

「世辞ならいらんぞ」

思わず仏頂面で返すクリスに、男は息を吐いて言った。

「素直に受け取ってくれてもいいだろう」
誰のせいだ。言いかけて、彼女は言葉を飲み込んだ。その台詞はあまりに本心が透けて見えて、はしたないもののように思えた。
「こういったものが似合わないというのは、自分で一番わかっている。私は剣しか振ってきていないからな。それが社交の華を気取るなど、おこがましいというものだろう」
「後悔してるのか？」
ほんのわずか、男の口調に咎めるような響きを感じとり、クリスは首を振った。
「まさか。そういうわけではない。すまん、おかしなことを言った」
会話を打ち切って彼女はカップを口に含んだ。何か言いたげな表情で、しかし口は開かずにニクラスは壁掛けの時計を眺めやる。
「そろそろ出ようか。半前にはついていたほうがいい」
「ああ。行こう」
立ち上がり、部屋を出たすぐそこに執事の男が控えていた。
「それじゃあ、行ってきます」
「は」

一礼し、男が先導して先に歩き始める。ニクラスと連れ立ってクリスは廊下を歩いた。すれちがう女中達が立ち止まり、頭を下げて見送ってくれる。正門を出てニクラスの待たせていた馬車に乗り込む際、外までついてきた男が言った。
「ご武運をお祈りしております」
ゆったりと馬車が動き出し、少ししてからニクラスが口を開いた。
「相変わらず、今から戦争に行くような気分だ」
「私にとってはどちらも大して変わらん」
男が笑う。
「社交は剣のない戦か」
「剣ならある」

「……そうなのか」
ニクラスの視線が興味深そうにドレスのラインをなぞるのを見て、クリスは顔を赤らめた。
「ばか。心がけのことだ。不埒だぞ」

3

王宮をこの街の中心として、やや東に離れた地区に大学はあった。周囲には国立図書館や工房地区も併設されてあり、独特な雰囲気がある。学生達の住処、そして彼らを目的とした店も多数開かれていた。夜になると路上で眠る学生の姿を見ることもある、それを自由な空気というか、らしからぬ品のなさと見るかは人それぞれであろう。

馬車が目的の場所に着くころには、すっかり日が落ちて暗くなっていた。同伴者のエスコートを受けて降りた先に、闇に浮かび上がる石積みの建物がそびえ立っている。

派手な服装に身を包んだ案内役の少年が、勢い込んだ直角の礼で二人を出迎えた。

「こんばんは。ご案内致します、どうぞこちらへ」

目をあわせる。ニクラスの左隣に立ち、クリスは彼の腕にそっと自身をからませた。

毛織の敷き詰められた道を歩く。先を歩く少年の後ろ姿がしゃちほこばっていた。緊張しているのだろう。大学で行われる催事で運営にかりだされるのは、まだ社交の場に立つ前の年少者達の役割だ。それは場の空気に慣れ、人の顔をおぼえるためということでもある。精一杯に大人ぶろうとしている態度は素直に微笑ましかった。

ぎくしゃくした少年の案内の先にいたのも、やはり派手な服装の男だった。その人物は二人と同年代で、男は二人を見ると、おおげさな態度で表情を輝かせた。

「お待ちしておりました、ニクラス様、クリスティナ様」

少年が驚きの表情でこちらを振り返る。微笑もうとしたが、怖がらせることになりそうだったのでクリスはやめておくことにした。代わりに、その無作法には気づかない振りをする。

「こんばんは。遅くなって申し訳ない」

「とんでもありません。皆様、お待ちでございます。どうぞ中へ」

男が頷きで合図を示すと、扉の前に立っていた別の厳しい男がドアを開け放ち、中に向かってよく通る声を発した。

「ニクラス・クライストフ様、クリスティナ・アルスタ様！」

新たな招待客の到着の案内に、ざわりと中の空気が蠢いたのがわかった。

扉を抜けると、天井の高い部屋に大勢の人間が集まっていた。普段は観劇などにも扱われる大講堂に色とりどりの華やかさが溢れている。人と物、その両方の贅沢の極みがそこにはあった。

その中で、人々の視線が二人に集中していた。隣で男が小さく息を吐く音が聞こえる。

「戦はまだ始まってもいないぞ」

「わかってる。……それにしても、少し香りが強いな」

クリスは小さく頷いた。室内にはあまり嗅ぎ慣れない香りが焚かれていた。こもるようで、あまり彼女の好きな種類のものではない。

「悪酔いしてしまいそうだ」

「飲むのか？」

意外そうな声に、ちらりと上目を送ってクリスは言った。

「私はお前の心配をしている」

ニクラスは肩をすくめた。

「この雰囲気じゃ、楽しんで飲む気にはなれないよ」

減ることのない無遠慮な視線の群れに、クリスは目線を動かさず

に周囲を観察した。多くの人間が到着したばかりの彼らの同行を見守っているが、あえて気にしない素振りをしている人物も何人かいた。その中で本当に気づいていない人間がいたとしても、ごくわずかだろう。他には何かしら理由がある。虚勢か、悪意か。その理由が何かはともかく、彼女はその人物の顔を記憶にとどめておくよう注意した。それは自分の役目であると彼女は思っていた。

もっとも、そのようにわかりやすい連中ならそう危険でもあるまいが。そんな感想を抱く。面従腹背どころか、一瞬前まで味方だったはずの者がいっそ華麗に裏切ってみせるのが、政治という伏魔殿の恐ろしさだった。

「お前がまず誰に話しかけるか、賭けでもしてる連中もいるだろうな」

今現在の大学社交界において、ニクラスは最も注目される一人である。その彼が最初に挨拶を交わすのは誰か。くだらないことだが、そんなことを気にする輩がここには大勢いる。他国の王族のように一挙手一投足が見られるというのは、確かに煩わしいことではあった。

「向こうから来てくれればまだ気が楽なんだけどな。とりあえず、イシク先生でも探そう」

「……顔を出してくれているといいが」

彼らがよくしてもらっている人物だが、やはりというべきか、大の社交嫌いで通っている。

結局、その人物と会うことは出来なかった。通りがけのテーブルで顔見知りに捕まり、それを機に他の連中までもが集ってきてしまい、彼らはそのままそこに長く留まることになった。

立食式の夜会は、参加者こそ大学に関わるほとんどの人間を呼び込まれた盛大さではあったが、形式としてはそこまで堅苦しいもの

ではなく、開宴して数人が挨拶に立った以外は自由な歓談を中心に推移した。講堂の中央では演奏にあわせて踊りを楽しんでいる人々もいる。

クリスは一人、壁際のソファに腰掛けていた。連れの男はさきほど、水を取りにいったきりまだ戻ってこない。恐らくどこかで誰か出席者に捕まっているのだろう。

テーブルで何十人目からの挨拶を受けていた頃、彼女は頭痛がひどくなってきていることを自覚した。それに気づいたニクラスが居合わせた人々に断りを入れて、彼女を人ごみから離れたここへ連れてきてからまだ半刻もたってはいない。

耳飾りのせいだ。それにこの香りも。耳から外した水晶のきらめきを手のひらに転がし、クリスはため息をついた。偉そうなことを言っておいて、自分が彼の足を引っ張ってしまっては意味がないではないか。

――やはり、不向きなのだろうな。

自嘲に笑う彼女の前に影が立った。連れかと思ったが、違う。彼女は表情を固くした。

「これはこれは。アルスタ家ご令嬢様ではいらっしゃいませんか」

言葉面は丁寧な裏にある刺に気づかぬわけもなく、しかし彼女は努めて感情を抑えた口調でそれに答えた。

「……ごきげんよう。マヒート様。ゼラビア様」

そこに立っていたのは一組の男女だった。

ともにこれでもかというほど華美な服飾に包まれた二人。平面じみた顔の造作が似通っているのは、彼らが実際の兄妹だからだった。表情に張りついた笑みまでが不気味な相似形をかたどられている。特権階級という文字通りの透明なマントを羽織った態度だった。

「こんばんは、クリスティナ様。とても素敵なドレスでいらっしゃ

いますわね」
　小柄な少女は小鳥の囀るような可憐さだが、そこに毒花の美しさを重ね合わせたのはクリスの偏見かもしれなかった。しかし、彼女がそう思ってしまうだけの理由も存在している。
「クリスティナ様のお姿に似合っていて、とても綺麗……。やっぱりスタイルが違いますのね。私も今度、剣を習ってみようかしら」
「おいおい、やめてくれ。お前が剣を振り回したりなんかしはじめたら、親父も母様も卒倒してしまうぞ」
「あら、どうして？　クリスティナ様はどの殿方にも劣らない剣の腕前だと評判ですのよ。お茶会などでもよく話題なのですから」
　大仰に身をのけぞらせる男に流し目を送り、それからクリスへと視線が向けられる。
「ねえ、クリスティナ様？」

　それが何についての同意を促した言葉であるのか、クリスには理解できなかった。いや、そうではないとすぐに思い至る。これはただの皮肉だ。
　諭すように男が言う。
「クリスティナ様は武門の生まれでいらっしゃる。お前が剣など握ってみろ。すぐにタコができて、舞踏会にも出られるなくなるぞ」
　その言葉に、ぴくりとクリスは膝上で指先を震わせた。
「まあ、それは大変……そういえばクリスティナ様は、今日は踊られないのですか？」
「――少し、気分が悪くなってしまって。休んでいるところです」
「それは大変！　お水は必要ございませんか？」
「いえ。今、連れが取りにいってくれていますので。どうぞお気づかいなく」
　気を使うくらいなら早くどこかに行ってほしい。とも言えず、やんわりと断る彼女に少女は思案するような表情になる。

「あら、ニクラス様でしたら、先ほどどなたかと踊られているのをお見かけしましたけれど……気のせいだったかしら？」
「ああ、確かヴィスコーラ家のアリアス様と一緒だったね。今もそうじゃないかな」
まさか。いや、一人でいるところに相手から誘いを受ければ、断るに断れない状況もあるだろう。それにヴィスコーラ家といえば他国の大貴族。ホストたるツヴァイの人間が、外交上の礼を逸するわけにはいかない。充分にあり得ることだ。
彼女は平静に思考をすすめたが、目の前に立つ少女が首をかしげた。
「クリスティナ様？　お顔の色が悪くなったようですけれど、どうかなさいましたか？」
「いえ――」

優れぬ気分では、苦手な相手への応対もそろそろおっくうになってきていた。陰湿な言葉にもうんざりする。いっそ堂々と罵ってくれたほうがまだましだ、と彼女は内心で呻いた。
「そうですわ。クリスティナ様。よろしければ、お兄様と少し踊られてはいかがです？」
「いえ、私は」
「身体を動かした方が気分も晴れるというものです。ねえ、お兄様。いかがでしょう」
善意の固まりといった笑顔で少女が言い、隣に立つ男もそれに鷹揚に頷いて言った。
「ああ、それはあるかもしれない。どうでしょう、クリスティナ様。もちろん、私などがお相手でよろしければですが……」
このように言われてまで断るのは無礼であるし、それにこのままの状態が続くよりはそちらのほうがまだ救いがあるように思えた。少なくとも、相手をするのが二人でなく、一人には減る。

彼女にしてみれば短絡的な判断で、クリスはそう決断した。室内に充満する香りと鈍く続く頭痛の影響もあっただろう。
「……それでは、お相手していただけますでしょうか。マヒート様」
「喜んで。さ、どうぞ」
恭しく一礼した男が手を伸ばす。クリスは立ち上がり、手を預けかけて一瞬戸惑った。

日頃の鍛錬で傷とたこのできた指先は、自分でも美しいものには見えなかった。さきほどの二人の会話のやりとりが脳裡をかすめ、ふっという鼻息を聞いて顔を上げた先で、男が見下した笑みを口の端にたたえている。
薄く唇を噛み締め、彼女は男の手を取った。

剣とは、呼吸と間合い。そして礼儀である。
幼少時のクリスの記憶にある、それがまず始めに身体に叩き込まれた父からの指導だった。

呼吸とは自制。間合いとは相手との距離。礼儀とは相手への敬意。そして剣とは、アルスタ家の人間にとって自分自身に他ならない。つまりその三つはそのまま彼女の生き方でもあった。
よく自らを抑え、相手との適正な距離を心がけ、礼を逸しない。それがクリスティナ・アルスタという人間の根本である。彼女は今まで家訓に疑いを抱いたことなど一度もなく、むしろ誇ってその生き方を貫いてきた。

茶会や読書。人の輪を作って噂話に興を求めるより、ただ一心に剣を振るう。それが周囲の同性達とあまりに違う姿であることも、気にはならなかった。少なくともあの男に出会う前までは。
回転する視界のなかで男の顔を思い出す。彼が今、別の場所で他

の誰かと踊っている。そのことに気を取られたわけでは決してなかったはずだったが、
「――っ」
体勢を崩し、彼女はあと一歩で転びそうなところをなんとか踏みとどまった。無意識によりかかってしまった胸板の上から、甘ったるい声が降ってくる。
「大丈夫ですか？　クリスティナ様」
クリスは険しい目つきで睨みつけるが、相手は動じない。全身に怒気がこもりそうになるのを抑え、彼女は自身の非礼をわびた。
「はい。……申し訳ありません、マヒート様」
「いえいえ、不慣れなことなどお気になさらず。楽しんで参りましょう」
言って、男は柔らかな口調とは裏腹な強引さでダンスを再開した。
「……っ！」
あわててそれを追いかけるクリス。
彼女にとっては舞踏もまた呼吸と間合い、礼儀である。好みではないとはいえ、嗜みとして彼女も人並み程度には踊ってきた経験がある。身体を動かすことは不得手ではないし、そもそもこの場でいう踊りとはある程度以上の運動神経がなければ難しい類のものではない。
舞踏とは一組の男女が行うものである。その意味で、必要なものは確かに呼吸と間合い、礼儀であった。そして、その全てが今の彼女の相手からは徹底的に欠けていた。
リズム。挙動。目線。呼吸があう、あわない以前の問題である。男はまるで自侭に、弄ぶように彼女を自分の腕のなかで振り回していた。それでも崩壊せず、なんとか崖の一歩手前で踏みとどまっている現状をむしろ褒めるべきであろう。呼吸を乱す。間合いを外す。模擬戦で幾度もそうした相手と剣を交わした経験を持つ、クリスな

らではといえた。

しかしそれにも限界があった。主導権は常にエスコートした男側にあり、上背も純粋な力でも相手には及ばない。先を読んで相手の稚気に対応し続けたとして、いつかコインの裏側をひきあててしまうのは必然である。

やがて、その時は訪れた。

「きゃっ」

男の強引な反転に腕が伸びきり、足が追いつかずに彼女はその場に倒れこんだ。

「ああっ。申し訳ありません、クリスティナ様……私が未熟なばかりに貴女にあわせることができず――」

彼女だけに語るのにはあきらかに大仰な声と仕草で男が言う。周囲の視線が集まり、踊りを続けながら人々が冷たい笑みを彼女に向けて閃かすのが視界をかすめた。

「舞踏が剣のようにいかなくても仕方ありませんな。……そろそろお休みになりますか？」

男のその言葉はしかし、むしろ彼女の闘志に火をつけた。

無言で立ち上がり、彼女は完璧な動作で一礼すると、もはや一分の隙もない表情で相手を見据えた。

「いいえ。どうかもう一度お相手いただけますか？　マヒート様」

彼女の気迫に一瞬、男がたじろぎ、虚勢の笑みを張って応じた。彼女の手をとり、舞踊の開始を告げるため互いに頭を下げ、その余韻が終わらぬ間に強引に自分側へと引き寄せる。

男の姑息な奇襲を、しかしクリスは完全に見切っていた。一拍と一歩を速めて見事に相手の側に自身を持っていく。驚きの表情を見せる男が次の動作に移る前に、彼女は流れのままさらに一歩を踏み出した。

「っ！」
今まで引っ張る立場だったのが一転して逆の立場になり、男の顔が歪む。クリスはそれに冷笑で応じた。
そのまま彼女が先手を打ち続ければ、男は無様に床にはいつくばったことだろう。しかし彼女はそうしなかった。

踊りの主導権はあくまで相手側にある。受け手が強引に先導してしまってはマナー違反だが、一歩だけという彼女の行動ならその儀礼を逸してはいない。もっとも、例えそうだとしても転ばされることが侮辱であることには違いないし、それをわかりきったうえで手を抜かれるのも、また同様だった。それは挑発であるとともに、男の連動した行動を妨害する実際的な意味もあった。まさに間合いを外し、呼吸を乱させた上で形式上の儀礼も守った形である。
その意図のどこまでを読んだのか、憤怒の表情で男が動いた。腕の力だけで強引に彼女を振り回そうとするのを、彼女は余裕の体捌きで受けきってみせる。

男のやってくることは、数としてそう多いわけではない。強引に振り回す。意図しないステップを踏む。たったそれだけである。クリスは純粋な反応の速度で前者に対応し、後者には今までの相手の癖を読むことと、頭に血を上らせ相手の意識を単純化することで、もとから分の悪いコインの裏表当てというリスクを最大限減じてみせた。力に逆らわず流れにのった一歩で相手を撹乱し、連動した行動を防いでもいる。この舞踏を試合とするならば、攻防から心理戦に至るまで、全てクリスの勝利であった。

だが、彼女は事ここに至ってもあくまで受けきることを主眼に、決してそれ以上を求めてはいなかった。相手の面子を叩き潰すことではなく、相手の悪意に対して如何に正々堂々と自らの誇りを守ることしか頭にない。この場合、それはむしろ短所と呼ぶべきものだ

った。愚直そのものである。
誤算もあった。止まぬ頭痛と慣れぬ矯正具。それが最終的には彼女に敗北をもたらした。

男の無理な先導と、それに反応するクリス。当然ながら彼らは他の男女とは勢いも動きの幅も違いすぎていた。剣の模擬戦のように周りに誰もいないわけではない。そのことが頭から抜け落ちていたわけではないにせよ、確かに彼女の注意力はその時、周囲から外れていたのである。

男が乱暴に腕を引っ張ろうとする、それに対抗するために大きく足を踏み出しかけたクリスは、その先に別の男女が親しげに踊っていることに気づき、とっさに身体を捻った。

普段の彼女なら、それでも最悪の事態は回避しえたかもしれない。しかし彼女の腰には矯正具がきつく巻かれ、深く呼吸することさえ疎外していた。彼女の肉体の持つ柔軟さは失われ、衝突を避けるためには無理な一歩を踏むことしか選択肢にはなく。向かってくるこちらにようやく気づき、恐怖に顔を強張らせる名も知らぬ誰かの表情を瞳に映した瞬間、彼女の決意は固まった。

絹を裂く音があたりに響いた。

4

会場の音が止んだ。

それほど大きな転倒だった。周囲の誰もが踊るのをやめ何事かと注目している、その中央で息をきらした男が取り繕った笑みを引きつらせていた。

「……これは、これは。クリスティナ様、だからあれほど……無理はなされないほうがと――」

男の声など彼女の耳には入っていなかった。

彼女は呆然と、膝下から破れてしまったドレスを見つめていた。空色を濃く凝縮した蒼のドレス。母とファビオラがこの日のために用意してくれた。二人の笑みと、無骨者を見送ってくれた執事に女中達の顔までもが頭に浮かび、彼女の端正な顔を歪ませた。

惨めな気分だった。

転倒前にとった行動に悔いはない。誰かを突き飛ばして自らの安全をとる道は、誰よりもまず彼女が自身に誇れなかった。もし後悔があるとしたなら、それは男の安い挑発にのってしまったことだ。

やはり自分のようなものが社交の華を気取るべきではなかったのだ。社交嫌いの男。その供として、彼が苦手な部分は自分が役割を果たしてみせると粋がった挙句がこの様だ。頭に響く鈍痛が鋭さを増し、浅い呼吸で無理な運動を続けたせいか吐き気も催していた。泣きたくなるような思いで、ともすれば溢れそうになる自らの感情を必死に抑えこもうとしていた彼女の耳に、聞きなれた声が響いた。

「――音楽を。妖精の沈黙は、いまこの場所に訪れるべきものではないでしょう。どうか皆様、ご歓談をお続けください」

高くも低くもない、耳に心地よい声音はある意味、彼女にとって今この瞬間には最も聞きたくないものだった。
周囲に生まれる戸惑いの小波に対して無理な強制力のない自然さで、その声は続けた。
「沈黙よりも踊りましょう。今宵は新年の宴。この地の妖精にもそのほうがきっと喜ばしいはずです。さあ、音楽を」

やがて、静かな音色で円舞曲が流れ始めた。周囲の人々がそれにあわせ、動き始める空気を肌に感じる。一人顔を伏せたままでいる彼女の目の前に、誰かが立った。
「クリス。手を」
顔を上げる。見慣れた男の顔がそこにはあった。

ニクラスはこちらの無様さを怒っても哀れんでもいなかった。いつものように感情の読めない、静かな瞳が彼女を見据えている。瞳にたまったものを必死に耐えて、彼女は差し出された手を取った。
柔らかく引き上げられ、彼の元にひきこまれる。涙腺の決壊を堪えるのに努力が必要だった。

「や、やあ、ニクラス。彼女は、これはその――」
彼女と対していた時の居丈だけさはどこへいったのか、男がどもりがちに言いかけるのを一瞥で封じ、ニクラスが言った。
「こんばんは。マヒート。連れが世話になったみたいだ」
「いや……すまない、少し悪ふざけがすぎたかも、しれない」
にっこりとニクラスは微笑む。
「いいさ。ああ、そういえばマヒート、妹さんがブライに声をかけられていたみたいだったけど。様子を見にいってみたほうがいいんじゃないか？」

名うての女たらしの名前を告げられ、男の顔面から血の気が失せた。挨拶もそこそこに逃げ出す相手を侮蔑の眼差しで見届ける気にもなれず、クリスは傍らに立つ男を見上げた。震えを隠した声で訊ねる。
「……ダンスの相手はすんだのか？」
「なんのことだ？」
男は眉をひそめた。
「水を持って帰ってきたらいなくなってるから、あちこち探してたんだぞ」

あの馬鹿兄妹。クリスは内心で毒づいた。

「なんだよ」
「なんでもない。……自分の間抜けさに呆れていただけだ」
うかつにも程がある。虚言に惑わされ、ドレスまで駄目にしてしまった。家に帰ったら悲しがるだろう人達のことを思い、クリスは重く息を吐いた。
「もしかして、邪魔だったか？」

クリスはまつげを瞬かせた。男が放った言葉の意味が頭にゆっくりと浸透して、もう少しで彼女は怒声をあげるところだった。
「それはなにかの冗談か？」
「……いや。そんなつもりはない」
ニクラスはしごく真面目な表情で頬をかいている。からかっているわけではないことがわかり、彼女は大きく嘆息した。
「私はお前のそういうところが嫌いだ」

じろりと見る。男には動揺の気配もなく、そのことが一層彼女には腹立たしかった。
「そういうことを聞くな」

ニクラスは顔をしかめ、子どものように唇を尖らせた。
「俺は魔法使いじゃない。聞かないと、わからない」
「察しろと言っている」
切り捨てて、彼女はもう一度息を吐いた。ひどく疲れていた。
まったく。とんだ歓宴会になった――その場を離れようと肩を落として歩き出し、連れが動きださないことに気づいた彼女は後ろを振り返りかけた。
「ニクラス？　……きゃっ」

引っ張られる。さっきの相手と違うことは、その後に柔らかく抱きとめられたことで、男の体温を至近に感じた彼女は心臓の鼓動を強くした。
「ちょっと。ニクラス、何を――」
男は待たず、無言のままゆったりとステップを踏み始めた。連れの強引さに戸惑いながら、クリスもそれに併せて身体を寄せる。相手の腰に手を回し、怨じた上目で見た。

「いったいどうしたのだ」
「察してみた」
「……なに？」
男は淡々とした声音で告げた。
「戦には勝って帰るべきだと思う」

言葉に詰まる。確かに今の自分の顔を鏡で見れば、ひどく情けないものになっているだろう。このまま帰ったのではあれだけ応援してくれた家の者達にあわせる顔がない。しかし、だからといってこれはやや強引に過ぎるだろうと思えた。
「だが、ドレスが……」
彼女の美しいドレスは膝下からちぎれ、その下の肌着が露になってしまっている。破れた裾を引きずりながらでも、ゆっくりした動

作なら転ぶことはないとはいえ、長くしなやかな脚がのぞく様子は品のいいものではなかった。

「戦場で格好を気にするやつがいるか？」

ニクラスが言う。

一瞬、自分の言ったことへのあてつけかと思い、彼の真っ直ぐな瞳を見てクリスはすぐにそれを否定した。そうではない。この男は、本当に彼なりに察してみただけなのだ。私が、クリスティナ・アルスタが何をもっとも大事にするか。そのために必要な行為はなにか。それに対する行動をとっている。

もちろん自分勝手には違いない。子どもじみてもいる。いや、大人じみた達観さであるかもしれない。出会ってから半年、男は彼女にとってわけがわからないままだった。

だが、不快ではない。感情の読めない表情も、つかみ所のない性格も突飛な行動もその強引さも。不快ではなかった。その理由について考えるのも、決して嫌なことではない。ただし恥ずかしさはあったから、彼女はいつものようにそのことに関しては深く考えずに、男の様々な感情を内包して混沌とした黒瞳を見透かすよう、薄く笑った。

「なるほど」

相手がそう言ってくれた以上、彼女に恥ずべきものはなかった。いつのまにかあれほどしつこく頭にこびりつくようだった痛みも既に遠く、晴れ晴れとした気配が全身を包んでいる。周囲の奇異の瞳をものともせず、彼女は堂々と連れに身を預けた。その耳元に囁きが触れる。

「それとも、嫌か？」

「……ばか。だから聞くなと言っている」

くすぐったさに口元を綻ばせ、すぐに仏頂面に戻ってクリスは答

えた。
「戦には勝つ。それだけだ。――いったいどれほど曲がかかるかはわからんがな」
「ワルツがロンドになったところで、気にはしないさ。なにせここは“妖精の地”だ」
「くだらんことを言う……」

甘さのないやりとりを交わしながら、二人は周囲にまじって踊り始めた。例え破れた衣服を身につけようと、自然と優雅なその姿に見惚れることこそあれ、眉をひそめる者はない。
宴の夜は更け、新年を迎えた妖精の地には灯りが煌々と闇を照らしている。大水陸で覇を争う貴族達の子弟は交流と策動に忙しく、黒々としたものを内に煮つめられたその場は決して見かけどおりの華やかさはなく、むしろ醜悪さの極まりでさえあった。
そんな中で、共に上級貴族と呼ばれる家柄に生まれ、異なる性格を持ちながら奇縁で巡り合った二人は、今はただお互いの呼吸を肌に感じて時を過ごしている。
時々、思いついたように言葉を交わす他は、互いに無言で身体を揺らすのみ。先ほどとはまるで違う、穏やかな居心地のよいリズムに身を任せながら、クリスは少しだけ迷い、それからほんの一握り分だけ、自身の距離を相手へと近づけた。

ひっそりと吐息を吐く。
あとしばらくの間だけ妖精がこの輪舞曲に飽きぬよう、彼女は心の中で祈った。

彼女が彼と別れる、一年以上前の夜の出来事だった。

妖精の輪舞曲　完

1（前書き）

本編の序編終了直後のお話になります。

1

――――。

声が、した。

意識の揺り篭の中に響き渡る音階に、少女は重さのない瞳を開いて目を覚ました。

まずはじめに感じたのは匂いだった。最初はあまりに心地がよすぎて逆に寝付けなかった、清潔なシーツの匂い。

陽の甘さを含んだ香りが鼻腔を満たすのにあわせてゆっくりと左右の焦点があう。視線は天井で像を結ばず、かわりに寝台につけられた天蓋の底が近かった。起き上がるのが困難なほど柔らかな寝台に横たわったまま、ふと眼に染みるものを感じてまぶたを閉じると、手に触れた頬が濡れている。目尻を拭わないまま、少女は身体を起こした。

室内にはすでに明るい日差しが入り込んでいた。採光に木窓を用いることが一般的なこの時代では珍しいことに、部屋の窓には透明な板が嵌め込められている。ここに来て初めて見たその不思議な物質が硝子という高価な代物であることを、彼女はこの屋敷に勤める人間から教わっていた。

やや厚さにむらがあるが充分に透明度の高いその向こう側に、よく晴れた外の景色が見える。密閉された窓からは砂も騒音も入り込まず、その場はとても静かだった。

――だから、聞こえたのだろうか。立ち上がり、彼女は室内用の足履きをつっかけて窓際へと向かった。

太陽の日差しがまだ柔らかい、時刻はまだ早朝といってよい頃だった。円状に広がる街の中央部に位置するこのあたりは市場などの喧騒から遠ざけられており、砂さえもここまでは届かない。黄土色に染まり、風と音が鳴り響く“外”とはまるで別世界のように白い街並みが、朝もやに静か佇んでいた。

外を歩く人影は少なかったが、窓の下に庭師の姿が見えた。庭園には色とりどりの植物があり、女中姿の女が甲斐甲斐しく水の世話をしていた。それは、この街の潤沢な水の在り様とこの屋敷の持ち主の地位を端的に示す光景であった。

扉を叩く音がして、彼女は窓から顔を向けた。

「……はい」

「失礼します」

扉の向こうから、黒の執事服に身を包んだ若い男が現れる。

「おはようございます、サリュ様」

彼女が返事をしなかったのは、“様”などとつけて名前を呼ばれることにどうしても慣れないからである。やめてほしいと伝えたことがあったが、対する返答は簡潔だった。

「貴女は我が主の大事なお客様でございます。礼をもって接するのは当然のこと、どうかお気になさいませぬよう」

にこりと口元を和らげる笑顔は柔和でも、その奥には決して退くことのない強情さが垣間見えていた。

黙然として頷くサリュへ微笑みを向けたまま、男は部屋の中に進み入ると、手に持っていた水差しを中央の卓の上へ置いた。

「朝食の準備が整っております。ご準備ができましたら一階へお越しください」

一礼と共に男が去り、サリュは水差しの水で顔を洗い、衣服を着替えてから部屋を出た。毎日新しいものを用意してもらっている、上質のシルクで織られた服装にもいまだ違和感が強い。一歩歩くごとにふわりと舞う軽さをたよりなく思いながら階段を降り、短くない廊下を歩いた先でさきほどの男が彼女を待っていた。

男が扉を開けたその部屋の中央で、一人の人物が円卓に腰掛けている。

「おはよう」

彼女に向けられたのは薄い微笑だったが、それだけで人に与える印象ががらりと変わるほど、その女性の顔立ちは整っていた。同性なら誰もが見惚れる黄金の長髪（長い髪を持つことはそれ自体、身分ある女性にしか出来ない）。鋭さと柔らかさを内包した体つき。ともすれば彫刻のように冷たい印象を与えかねない美貌に、それを穏やかに包み込む微笑と、隠し切れない疲れの色が見てとれる。彼女は先日この街で起きた騒動に対して、帝都から賓客としてトマスに滞在する身分でありながら、献身的に活動していた。

治安維持と街の修繕作業の監督。トマスを治めるベラウスギ公の配下の者には彼女の派手な――彼らにはそう見える行動に眉をひそめる者もいたが、金髪の女騎士は決して我を通さず、立場からすれば不満を抱いてもよいはずの下働きをまわされても不平一つこぼさず、それらに従事していた。

騒動の発端となった魔女裁判と、その後の騒ぎの中で彼女が見せた英雄的行動が噂になって流れていたこともあり、最近、街では彼女の名声が高まっていた。“帝都からの刺客”と揶揄される彼女をよく思わない者がいたとしても、そう邪険に扱うことの出来ない理

由もそこにあった。そうした様々な事情についてまでサリュは深く関知していなかったが、その女性が身を粉にして復興作業に励む理由については、知るところがあった。

ニクラス・クライストフ。――リト。その人物の行方が途絶えてから、今日で一週間が経つ。一週間。ふと思い至った事実、その日数にサリュは愕然とした。もう、そんなにも日が過ぎてしまっているのだ。

「どうした、サリュ？」

「……いえ。おはようございます。クリスティナ、さん」

心の震えが身体に伝播するのを抑え込み、サリュは答えた。名前を呼ばれた女主人が、何かを思い出すような表情でわずかに苦笑した。

「そうか。なら、朝食にしよう」

頷き、サリュは彼女の対面に座った。

すぐに女中達が食事を運んでくる。上質な麦の粉を念入りに挽いたものを練り、竈で柔らかく焼き上げた練り物――パンと、水気をたっぷりと含んだ様々な野菜を手ごろな大きさに切り、あるいは千切って塩気を抑えたソースをかけたサラダ。それにミルクをじっくりと煮つめ、具材の旨味を抽出したスープ。それらは女性の社会的階級からすればむしろ質素に過ぎるほどの内容だったのだが、サリュにとっては充分以上に豪華な品々だった。

一見して高価なことがわかる陶器に盛られて目の前に置かれるそれらに、しかし彼女は手を伸ばさなかった。食欲がなかった。それはこの一週間ずっとのことである。気づかう視線に顔をあげると、女主人がわずかに眉を寄せていた。サリュはゆっくりと銀製のスプーンに手を伸ばし、スープをすくった。一口含むと、途端に芳醇な味わいが広がった。美味しい。とても美味しい。だが、それでも次

の手が進もうとはしなかった。
「……あまり無理はするな。何か果物を切って持って来させよう。スープだけでも、少しでも飲んでおいた方がいい」
絹のような金髪を揺らして女性が言った。サリュはうなだれて、その彼女の視線から逃れた。

サリュが女性からこの屋敷に来て初めて叱責らしき言葉を受けたのは、昨日の朝のことである。
「生きることは食べることだ。笑うためにも泣くためにも、人は食べなければならない。サリュ、戦場では誰もが泥をすすってでも剣を持つのだ。生きるために」
決して怒る口調ではなかった。むしろ悲しむような声だったが、その言われた中にあった一言が深く少女の胸に突き刺さった。生きるために。

――生きろ。

声が耳元で囁き、顔を俯かせて服の裾を握り締める。主人の意を受けた女中が、すぐにサリュの前に瑞々しい果実を持ってきた。初めて目にする暖色の表皮と半透明な果肉を覗かせる果物をしばらく眺めるようにしてから、彼女はその一切れを手に取り、口に運んだ。柑橘系のよく冷えた酸っぱさが舌を縮こませた。後からほんのりとした甘みが口の中に溶け出してくる。砂石を飲み下すように嚥下して、彼女はさらに手を伸ばした。

幾つ食べても、果実の酸っぱさは舌に慣れなかった。泣き出しそうにも見える表情で果実を口にする少女を、金髪の女性が慈しみと愁いの帯びた表情で見守っている。

水陸最大の商業都市トマスを襲った暴動は、その直接の要因とは別に、元々この街の構造上むしろ発生は当然だったという説がある。

水陸の主要な街と結ばれた“唯一の水源”を中心に、円状に作られた街は中央へ向かうほど支配者層――貴族等の裕福な人々が住み、外縁になるほど貧しい被支配者層が集まっている。トマスは能力さえあれば生まれや立場に限らず成功を収める機会の与えられる街だったが、だからこそ能力の有無は際限なく両者の格差を広げ続けることにもなった。

能力と資産のあるものがそれを元手にさらなる富を得、それに失敗した者や抗うことのできない者は搾取される側として延々と労苦に苛まれることとなる。そして成功者は失敗者より常に少数、ほんの僅かにしか存在しないのだった。

没落した商家、その日暮らししかできない人々は羨望と尊敬の念で成功者を仰ぎ見ながら、同時に内心では嫉妬と悪意の炎が黒く燃え上がっている。件の騒動では、鬱積した思いがきっかけを得たことで爆発したのだろうと見られていたが、それを否定することは能力主義、成果主義をとるトマスの存在を否定することになるから、確かに避けようのない部分ではあった。

しかし、ツヴァイ建国から続く名門ベラウスギ公爵家の今代当主は、開祖ほどの先見性の有無まで持ち合わせているかどうかはともかく、充分に優れた政治的手腕の持ち主だった。

彼は暴動の波が一通り収まった後、すかさず治安の掌握と扇動者の確保に努める一方、備蓄された水と食糧を供出して被災者に分け与え、また暴動の中で発生した火災によって焼け出された家屋についてはベラウスギ家が責任をもって補償することを約束したのである。

トマスを拠点に活動する有名商家もこれに賛同し、率先して多額の寄付金を申し出た。日頃恨みを買うことの多い彼らにとってはその矛先を和らげる意味もないではなかったが、たったこれだけのことで周囲からの視線が変わるような甘えた夢想を抱いたわけでもなかった。彼らはこの事態を純粋な投資の機会と捉えていたのである。この街で成功を収め続けている人々には、確かにそれを裏付けるだけの理由があった。

街への被害は、多くは貧民街に起こっていた。もともとの建築強度が不足していたこともあるし、この星で珍しい移動しない街であるトマスの街並みは、特に貧しい地区を中心に古いものとなっていたのである。先日の火災はそれらを一掃した。それはつまり、建造の受容が爆発的に高まることも意味していた。

材料を扱う商人は受注と発注に忙しく走り回り、家一戸を立てるには大勢の人手が必要となる為、それまで仕事もなかった人々までが狩り出された。賃金を得た彼らは、それを元手にもう一度成り上がる機会を得たことになる。暴動を起こし、大きくした扇動者が早々に捕まったという発表もあり、街には笑顔と活気が溢れていた。

見事な対応だった。トマスの持つ構造的欠陥の根本的解決にはならないとはいえ、淀んでいた泥を一時的に駆除することに成功している。今回の件で最も得をしたのは、実はベラウスギ公爵ではないか――そう冗談まじりに囁く者がいるほど、公爵家の事後処理には手ぬかりがなかった。誰の仕業かはしらぬが、今頃その人物は地団太を踏んでいるだろうて。というのは、公爵配下の人物の言葉である。もちろん、暴動によって命をなくした人々が決して少数ではないことも確かな事実だったが。

祭りにも似た喧騒から離れた中央市街地の一角で、サリュはぼんやりと窓の外を眺めていた。職人による精巧な細作りの椅子に座ったその側にはさきほど起きたばかりの小さな砂虎が転がっていて、彼女の衣装の裾に向かってじゃれついてきている。まだ子犬ほどの大きさしかないその生き物は今がやんちゃの盛りだった。ミルクを零すくらいならまだしも質の良い調度品を壊すことも度々で、その度にサリュが叱りつけているのだが、この家の主人をはじめとした誰一人として、その砂虎を咎めようとする者はなかった。

「クアル」

ぎゃう、と律儀に鳴いて応える砂虎を抱え、顔を埋める。いくら湯水で洗っても消えない、砂の香りがした。じたばたと腕の中で暴れる子虎を床に放し、腹を見せて転がってみせる姿を見守って、つい口元を緩めかけた背後に寒々しさを覚えたサリュは部屋の中を見回した。

そこには誰もいない。当たり前の事実に少女の顔が歪んだ。ここは、静かで。広すぎる。

立ち上がり、部屋の隅にある棚机に向かう。そこには幾つかの道具が散逸していた。いずれも彼女が発見された時、側に落ちてあった品々だった。彼女に手持ちの私物などありはしなかったから、それらは全て旅の同行者であった人物の持ち物ということになる。その中で、サリュは見覚えのある物を幾つか手元に引き取らせてもらっていた。

所々の塗料が剥げてしまっている四角い立方体の玩具。厚手の羊皮紙と、恐らくその中身と合わせて使用するのだろう計りのような器具に、細長い棒が中央で小刻みに揺れている物もある。それから、本。水に濡れればいっぺんで駄目になるような品も少なくなかった

が、それらが無事であったのは偶然の多大な作用はもちろん、元の持ち主の配慮の結果でもあった。可能な限り水を被らないよう、必要なものに処置が施してあったことを聞き、

「あいつらしい」

女当主はそう小さく笑った。

サリュは本を手に取った。彼女は字を知らないので、中身を読もうとしたわけではない。慎重に表紙を開くと、一輪の白い花が押されていた。

水気の抜けたそれは少しの風がそよいだだけで崩れそうなほど儚かった。皺の寄った花弁に潤いをもたらそうかというように雫が落ちる。水滴は、少女の瞳から流れていた。

本を傷めてしまうことを恐れ、サリュは慌てて表紙を閉じ、本から離れたところで存分に涙を流した。あの日以来、少女はよく泣くようになっていた。

必要なものがあればなんでも言うといい。という言付けを受けてはいたが、そう言われても思いつくものはなかった。クアルの為に必要なものと、クアルが迷惑をかけない為に必要なこと以外、サリュは何も希望を持たなかった。ただ男の生存を祈っていた。

身体にぽっかりと穴が空いている。空虚な感覚で、日がな一日部屋に閉じこもって過ごし、それでも時が経てば空腹を訴えてくる自分の肉体が彼女は不思議でならなかった。

家の人間達も、そんな少女に無理に干渉してくることはなかった。彼の家に勤める人々は誰もが優しく、彼女に対して親切でもあったが、あくまで自分達の職分を守り、それ以上を侵すことはなかった。

最もサリュを気遣ってくれているのは、彼らの雇い主でもある女当主であることは間違いない。しかし、ひどく忙しい生活を送っているその人物と彼女が顔をあわせる機会はそう多くなかった。それでも女性は毎日の朝と夜、必ず食卓を共にとることを欠かさなかった。

「少し、身体を動かしてみてはどうだ？」
ある日の朝食の卓上、相変わらず食欲のない様子を見た女当主はそうサリュに提案した。小首をかしげる彼女に、
「私も昔から、何かあった時はそうしてきた。運動すれば気が晴れるし、少なくとも空腹にはなる――あくまで私の場合だが」
「……運動」
「外の空気を吸って歩いてみるだけでもいい。街を出歩くのは、まだ少し危ないかもしれない」
熱心に勧められ、サリュは自身より砂虎のことを考えた。そういえば、あまり外に出ていないからクアルも退屈しているかもしれない。最近、部屋で暴れているのはそのせいだったのかも。

少女がこくりと頷くのを見て、安堵したように金髪の女性は微笑んだ。

翌日、いつもより早く目覚めたサリュは砂虎を胸に抱えて部屋を出た。清掃中の女中達に頭を下げながら外へ向かい、適当に幾つかの扉を抜けると、低く乾いた空気が彼女を包んだ。

砂が遠く空気が澄んでいる。鮮明な視界に目を奪われて、サリュはしばらく立ち止まった。緑と花の彩り。訪れた後庭は色と香りに溢れていた。
いつも部屋から見下ろしていて、この場所の存在は知っていた。

しかし、実際に間近で目にしたのは初めてで、それは想像以上のものだった。

一帯にふんだんに水が巻かれ、季節の花が所狭しと咲き乱れている。絢爛な風情は彼女の故郷、今はもう砂に埋もれてしまった小さな集落では見たこともない光景だった。全てが茶色く塗りつぶされたあの場所に比べれば、まぶしくて目がつぶれてしまいそうになる。

裁ちバサミを持った年老いた庭師が現れ、怪訝そうに顔をしかめた。

「……おはよう」

「おはよう、ございます」

じろりとした視線を向けられ、少女の身体が強張った。老人は品定めするかのように彼女を眺めた後、そっけなく告げた。

「向こうだよ」

眉の形を疑問のそれにするのを見て、つっけんどんに言葉が足される。

「ご主人なら、向こうだ」

あごをしゃくった先へ、追いやられるようにサリュは向かった。建物の壁をまわり込み、開けた視界に見知った姿が入った。

金髪の女性が剣を振るっていた。長大な剣を正眼に構え、緩やかに天に伸ばし、一気に振りおろす。地面すれすれで止められた剣先が、踏みしめられた一歩とともに今度は振り上げられ、胸の高さで突きへと変化した。

決して舞のような華やかさはなかった。代わりにそれぞれが致命に至る重さを持っている。刃が鋭く空気を切り裂く音が耳に入るほど近づいたところで、剣を持った女性が気配に気づいた。

「――ああ。おはよう」
「おはようございます」
剣を止め、弾んだ息を落ち着かせる女性に訊ねられる。
「散歩か？」
「はい。お花を、見に」
「ああ――あれはちょっと凄いだろう？　庭師達が、気を遣ってくれていてな」
「……目がくらみました」

正直な感想を告げると、嬉しそうに女当主は微笑んだ。
「そう言ってくれると皆も喜ぶ。ここの土地には馴染まないものも帝都から運んできてしまって、苦労して育ててくれているから」
サリュは訊ねた。
「クリスティナさんは……運動、ですか？」
剣を手にした女性が頷く。
「日課のようなものでな。鍛錬を一日でも休めば、身体がうずいてしまう。使用人達には呆れられているんだが」

サリュは目の前の女性の生業を思い出していた。女性は騎士だった。それがどういった存在であるかは、彼女自身の経験で知っている。
少女の視線は騎士の手に持つ剣に引き寄せられた。見ただけで重量感が窺える長剣には朝の薄い日差しに輝くような光沢はなく、硬質の存在感だけが浮き出ている。剣。騎士がその職責を果たす為に振るうその道具が、彼女にはひどく特別なものに見えた。

それが人殺しに用いられるものであることは承知している。しかし同時にそれは、何かを護る為の道具でもあるはずだった。
胸に抱いたクアルが鳴いた。その声に触発されるように、少女は口を開いた。

「――剣を、教えてもらえませんか」

少女の希望に、女性はかすかに眉を持ち上げただけで驚いた様子は見せなかった。

「どうして剣が要る？」

優しげな声だったが、詰問するような響きを併せ持った台詞だった。視線をそらさずにサリュは答えた。

「この子を。守らないと」

胸の中の小さな生命は、少し前に失われるところだった。それを救ってくれたのは――彼女は、そう信じている――一人の男だった。その相手はもういない。腕の中で暴れるやんちゃな砂虎を、少女は自分の力で守り抜く必要があった。

「……そうか」

女性は嘆息するように言った。表情が少し困っているように見えたが、すぐに微笑を戻し、

「――持ってみるか？」

手渡された剣は、想像していた以上の重みを少女の手のひらに伝えた。

「馬上で用いる物だが、それでも一般的なものより軽くしてもらっている。もっとも、ある程度は重くなければ話にならないのだが」

剣を受け取り、女性はそれを上段に振りかざした。そのまま一気に振り下ろす。地面を穿つその直前で、剣先は止められた。ぴたりと制動してわずかにも流れない。

「私の家は武門の出だ。幼い頃から剣とともに過ごしてきた。堅苦しい精神論も色々とあるにはあるが――結局のところ、剣とは打つこと、止めることだ。相手を討ち果たすためには剣を突き入れねばならず、その剣を制御できなければ、切っ先が護ろうとしたものを

貫いてしまう」
少女が胸に抱く生き物に視線を落として、
「護りたいと思って、それを傷つけてしまう。ならいっそ、はじめから持たなければいい。サリュ、それでもお前には剣が必要か？」
女性の言葉は、わかるようなわからないようなあいまいな印象だった。はっきりしているのは、それが持った者の言葉であるということだ。だから彼女の答えは決まっていた。
迷いのない表情で頷く少女に、女性はもう一度小さく息を漏らし、言った。
「わかった。剣を教えよう」

2

次の日の朝、後庭を訪れたサリュに一本のナイフが渡された。

飾りの少ない、しかし柄まで精巧なつくりで少女のような人間にも一見して値打ちのあるものだとわかる。一般的な短剣類より鍔が大きめであることに彼女は気づかず、それよりもむしろ刀身の短さを疑問に思った。その表情を違う意味で捉えた女性が説明する口調で言う。

「短剣術は立派な護身の技だ。引きずって目立つ長剣などより、よほど役に立つ。アルスタ家に関わる者達の中にも、剣を振れない者はいても短剣を扱えない者はいないからな」

少女は脳裏に彼女の知る人物の姿を思い出した。その相手も、確かに短剣を振るっていた。こっくりと頷く。

「では、始めよう。とはいっても、座学で教示できる性分でもないのでな。私はこんな形でしか教えられない」

言って、女性は自らも手に剣を持った。

昨日のものとは違う、やや小振りな剣だった。ちょうど長剣と短剣の中間にあるような長さで、幅広に伸びた刀身が調理に使う類の道具を少女に思い起こさせた。鍔がないのも彼女にそう思わせる要因だった。

鞘の役目を果たすのか幾重に布が巻かれている。ほとんど平べったい棒のように見えるそれを構え、金髪の女性は告げた。

「いいぞ」

少女は困惑した。

女性は剣を構え、鋭い視線を彼女に向けている。つまりは打ってこいということなのだろうが、しかし、刃物を手にしたことくらいはあっても、その扱い方について少女は全くの素人だった。どうすればよいだろうと手元に目を落とし、その瞬間に金髪の騎士が動いた。

手首を痛烈に打たれ、短刀が落ちる。静かな声で叱責が飛んだ。

「相手から決して注意をそらすな。視線を外す時もだ」

サリュは呆然とその声を聞き、痛みの走る右手を抱える。女性はそれ以上何も言わず、無言で少女がナイフを拾うのを待っているようだった。

屈みこんでナイフを拾う。適当に柄を握り前方に構え、一呼吸した。ふと、鞘に入ったままであることに気づき、その次の瞬間には少女は再び手首を打たれていた。

見上げると、金髪の女性はあくまで静かな双眸を向けている。

――後はその繰り返しだった。

結局、一度も短刀を振るうことができないまま、その日の鍛錬は終わった。

朝食の前に汗を拭いて着替えるよう、自室に戻された。痛む右手を使わず、女中が用意してくれた新しい衣服になんとか着替え終えると、計ったように扉を叩いて執事の男が姿を現した。

数え切れないほどの痛打を受けた少女の右手は赤く腫れあがっていた。それを見て、男がわずかに息を漏らした。

男は手に水の入った桶と布、そして深い碗を持っていた。碗の中からは強い香りが漂ってくる。なにかを磨り潰した液状のものが見

えた。
「湿布薬をご用意しました。お手をよろしいですか？」
桶につけ、よく絞られた布を手の甲にあてがわれると、凍るような冷たさが患部を包み込んだ。痛みはほとんどなかった。そのことに逆に違和感をおぼえて、彼女はわずかに顔をしかめた。

よく冷やされたあと、茶色と緑を捏ねた色合いをした粘着質の液体を塗りつけられる。薬は冷水の布をあてられた以上に冷やりとした感触を彼女に与えた。そこではじめて、少し痒みが生まれる。
「若干、痛痒いかと思いますが……我慢してください。皮膚に悪いものではなく、効能が染み込んでいる証拠です。アルスタ家に代々伝わる薬ですから、明日までには腫れもひいているでしょう」
湿布薬の上から布をあて、その上を包帯で巻いていく。鮮やかな手際で男はすぐに処置を終えた。不自由さはあるが、必要最低限の拘束に留まっている。これなら物を持つこともできるだろう。
「ありがとうございます」
彼女が言うと、男は少し困ったように眉根を寄せた。
「驚かれましたか？」

少女は黙って首を振った。
そうですか、と顎を引く。立ち上がって、男は呟くように言った。
「昔、私がこの家で働くようになり一月ほど経った頃、同じように短剣を持たされました。相手は当時、執事長を務めていた初老の男性でした。全身を手ひどく打たれ、その日の夜は痛みでとても眠れませんでした。次の日からは仕事終わりに仕事の上役に打たれるようになりました」
不意に語りだした男を、少女は驚きの感情で見あげた。そうしたことは今までに一度もなかった。男は続ける。
「アルスタ家に仕える者なら誰もが受ける稽古だ、などと言われましたが、私にはとても信じられませんでした。男達はにやにや笑っ

てましたからね。嫌がらせやいじめの類だろうと思い、打たれる日々が一週間続いたところで私は逃げ出しました。仕事もほっぽり出してお屋敷の裏で泣いていたら、叱りつける声が聞こえました」

懐かしむように口元がほころんだ。

「そこにいたのは私より年下くらいの小さな女の子でした。その女の子は言いました。泣くくらいなら、なぜその剣を振るわないのかと」

新しく現れた登場人物が誰のことか、彼女はすぐに察することができた。その表情や仕草すら、容易に想像できるような気がした。

「お前が持っているのはその為の物だろうと。悲嘆にくれて泣き寝入るくらいなら、それで相手を刺し殺してしまえばいい。そうして、お前はやっと剣というものの重さがわかるのだと。そんなことははじめからわかっていて、できないのではなく、お前がお前の意思でそれをやらないだけというのなら。剣を持つ者は、決して泣いてはならないのだ――十にも満たない女の子がそんなことを言うのですよ」

「よく見れば、その子は私以上にボロボロでした。目元が少し赤かったようにも思えました。けれど、その子は決して泣いていませんでした。たとえ頬が濡れていても、絶対に認めなかったでしょう。ええ、確かにその方は泣いてはいなかったのですよ。あとで知りましたが、当家に生まれた者に幼少から課せられる鍛錬は、それはもう、私なら一日ももたずに裸足で逃げ出すくらいのものだったそうです」

男が息を吐いた。慈しむような吐息だった。

「不器用な方々なのです。家も、人も。……とても」

「クリスティナさんとは、昔から――？」

男は首を振った。

「雑務役から家付きの使用人を経て、私がお嬢様のお側で働けるよ

うになったのはずっと後のことですから。覚えてもいらっしゃらないでしょう」

話はそれで終わりという合図とばかりに、男はいつもの柔和な笑みを浮かべた。

「参りましょう。朝食の用意が整っております」

「はい。――あの」

呼びかけようとして、少女は男の名前を知らないことに気づいた。

「ありがとう、ございます。……お薬じゃなくて」

「お嬢様にはどうぞご内密に。主人も覚えていない昔のことを語る使用人など、煙たがられるだけですので」

執事としての礼儀に、かすかにおかしみを含めた口調で男は言った。

食卓へ現れた少女の包帯に覆われた手を見ても、金髪の女性は少なくとも表向き、表情の筋肉をわずかにも動かすことはなかった。それを平然と見届けるようにして、

「――おはよう」

「おはようございます」

いつもに比べて口調が素っ気ない。さっきの話を聞いていたから、その違和感はますますわかりやすかったのだが、傍に控えた執事の男がそ知らぬ顔をしていたから、サリュも何も気づかない振りをして席についた。

目の前には既に皮を剥かれ、食べやすいように切り分けられた果肉が皿に置かれていた。

「では、食べよう」

「はい」

朝食は無言のうちにすすんだ。

時々、女当主の気遣うような視線が注がれるのがわかった。少女が顔をあげると、あくまでさりげなさを装って視線が逸らされる。横に立つ執事の男が咳を払い、それにつられるように少女の口元も動いた。
「……どうした？」
怪訝そうに訊ねられるのに、首を振ってサリュは言った。
「お腹が空いてしまって」
彼女の言葉に女性は瞳を瞬かせ、それから嬉しそうに笑み崩れた。
「すぐに持ってこさせよう。私と同じものでもよいか？」
「はい。お願いします」
サリュも同じように返す。表情にはかすかに微笑らしきものが浮かんでいた。

三度もある贅沢な食事以外。一日の間にある膨大な時間で、サリュは翌日の鍛錬について考えた。
どうすれば打たれないか。何が悪かったのか。かまってもらえずつまらなそうなクアルに服をひっぱられながら終日を費やして思考した結論を、彼女は次回の鍛錬でさっそく実践してみせた。

大きく、後ろに跳ぶ。

距離をあけ、金髪の女性の剣が届かない範囲に逃げる少女を見て、金髪の騎士はにっこりと微笑んだ。
「それが間合いだ。サリュ」
まっすぐに剣を持った腕を伸ばす。騎士の持つ剣先からさらに一本分の距離が少女との間に空いていた。
「剣とは硬い。長い。重い。自分は痛まず、相手を痛める。使う側にとってはそういうものだ。あくまで手の延長上にある便利な道具

に過ぎない故に、必ず届く範囲というものが存在する。持って扱うものは全てそうだ。槍も斧も。あとはそれぞれの癖による。形状や長さ、重さ。槍のように握る位置である程度の間合いを変えられるものもあれば、はじめから相手に防御されることを前提としたものもある。なにかしらの意図を持ってかたどられた、それを推測するのにも距離は重要だ」

一息に告げ、女性は小首を傾げた。それからどうすると、その瞳が訊いている。

サリュは目の前の相手を観察した。昨日はそんな余裕がなかった、その佇まいをしっかりと網膜に焼き付ける。やや右脚を後ろに引いた半身。片手に持った剣先がちょうど肩の高さにあるように構え、全体としてはとても自然な風に見える。その格好を、見よう見まねに少女は模倣した。

不恰好に短剣を構えてみせる少女に、出来のよい生徒を見つめる教師の表情で騎士は頷き、

「――いくぞ」

一歩踏み出すのにあわせて、少女は退いた。もう一歩。さらに後退。すぐにらちがあかないことを悟った。ふと背後に壁が迫っている事に気づき、わずかに後ろに気を取られる。その失策にも気づいた。

二度目の注意はなかった。

無言のまま、間合いに入り込んだ相手からの一撃が振り下ろされる。少女はその剣を、右手に構えたナイフの根元で受けた。重い衝撃にそのまま弾かれる。布に包まれた剣先がしたたかに肩を打った。

「人と剣の動きが線なら、打撃はその終着。点だ。人の身の重さに剣の重さが加わって集中するその一点同士がまともにぶつかれば当

然、重いほうが勝つ。サリュ。ほとんどの相手がお前より大きくて、重い。そのことを忘れるな」

苦悶の表情に歪めながら、声はあげずに少女は地面に落ちたナイフを拾った。無言で構えなおす。一息毎に肩の痛みを癒すようにしながら、頷いた。女性の言ったことなどほとんど頭に入っていなかったが、それでも返事を搾り出す。

「はい」

「点をずらせ。力は受け流せ。コツは、自分で掴むしかない」

「はい」

その日の鍛錬が終わるまでに、彼女はさらに二十を越える剣打を受けた。

手先から肘、肩までまんべんなく打たれ、鍛錬が終わるとすぐに執事の男が湿布薬を塗ってくれたが、さすがにその日の食事では右腕を持ち上げることすら難しかった。腕中をぐるぐると包帯巻きにした少女に、仏頂面を自らの表情に強要させた騎士が言った。

「明日からは左手で構えるといい」

冷淡に言い放ってから、気遣うように付け加える。

「……いつでも休んでいいんだぞ」

少女は首を振って、左手に持ったスプーンで食事を流し込んだ。昨日よりもさらに自然に、用意された食事は喉を通った。

部屋に戻ると、やんちゃな砂虎が部屋の中央に置かれた皿に頭を突っ込んでいた。周りにはミルクが飛び散っている。クアル、と呼びかけても顔を向けもしない相手にため息をついて、彼女は棚机に置かれたナイフを手に取った。

左手に構えてみる。右手の時よりもさらにぎこちなく思え、まぶたを閉じて庭先で見た女性の姿を思い浮かべる。眼差し、姿勢、右足と考えたところで、いまさらながらに女性が左手に剣を持っていたことを思い出した。食事中はスプーンを右で使っていたことも。

その意図はともかく、イメージは右手に構えたときよりも容易だった。騎士の動きを再現しようと、左足を踏み出す。同時に剣を打ち下ろし――何か違う。頭を捻り、女性の打撃が一歩の着地とほとんど同時に行われていたことを思い出した。

線と、点。かすかに記憶の淵にひっかかっていた言葉を拾いあげる。あの女性は他に何を言っていただろう。ずらす。受け流す。抽象的な意味を掴めずに途方にくれ、何か考える手助けになるものはないかと部屋の中に視線を泳がせた。

彷徨った視線が部屋隅の棚机に止まり、それを振り切るように身体ごとそむけて、彼女はナイフを振るった。

なんの理解もないまま、闇雲に振り続ける。

少なくともその行為に没頭する間、誰かのことを忘れられるということに少女は気づいていた。

3

守りに入るから打たれるのだ。昨日の反省としてサリュはそう結論づけた。

自分に相手の剣を捌く技量がないのなら、逆に攻める。相手の剣が届かない――間合いの外れから一気に接近する。至近距離では剣を振れないはずだというまでの確信はまだ彼女にはなかったが、懐に入れば小さな武器の方が扱い易いだろうということくらいは想像できた。

翌日の鍛錬で、前方に構えた相手に、彼女は遠い距離から一気に駆けた。相手がわずかに眉を持ち上げるのを見ながら、自身の左側から回り込む。

鞘に入ったままのナイフを突き出す。――魔法のような出来事が起きた。

軽く目をみはった女性が左腕をたたみ、ナイフの刃先にあわせるように剣先を向け。次の瞬間には、少女のナイフが宙に跳ね飛ばされていた。しなるように刃が少女の首元に延び、寸前で止められる。

無言のまま、女性は一歩後ろに下がった。

いまだに目の前で起こったことがわからず、サリュは自分の手のひらを見つめた。手に痛みはない。打たれたわけではなかった。だが実際、彼女の手からは武器が失われている。いったい何が起きたのか。

確かめるために彼女は再び挑んだ。結果は同じだった。

さらに数回を繰り返して、ようやく少女は理解した。彼女の武器は、全て相手にからめとられているのだった。

刃に刃をあわせ、力を受け流し、適したタイミングと力と方向に向かって、一気に跳ね飛ばす。魔法のようなと表現するのにふさわしい、卓越した技量であった。しかし、ようやくそれがわかったところで、いったいどうすればよいというのか。

「アルスタ家の者は盾を持たない。遠い祖先が、そうだったらしくてな」

金髪の騎士が言った。

「盾を持つくらいならもう一本剣を持て――我が祖ながら、無茶なことと思うが。そこで、盾のような剣の扱いが生まれた。剣を持たない側からの攻撃、剣の間合いのなかに入られての攻撃。そうした場合に応じる為の技術。それが後に、幼い時からアルスタの者が学ぶ護剣術となった」

「それは組み打ちではない。故に重さはあまり論点にならない。力をずらし、かわすためにある。あるいは相手の懐に入るための。短い刃、大きな鍔はその為のものだ。私の持つものはまた少し違うが、サリュ、お前のそれがまさにそれだ」

少女は手に持ったナイフを見た。はじめはやや奇怪に見えた形状が、ようやくその意図を知って納得する。短い刀身と鍔の存在。あくまで実際的に用いられる為の、精緻でありながら無駄のないつくり。

「続けよう。さっきのはなかなかよかった。私の剣はお前より遠くに届き、近くでは振るいづらい。私の間とお前の間は異なる。後は、そこからどうするかだ」

騎士は講義を終え、剣を構えた。少女もそれに応えて短剣の柄を握り締める。

鍛錬が終わるまでに打たれた数は、昨日の半分ほどに減じた。

一日も経てば、右腕も動かせるように回復している。まだ肩より上に持ち上げることは難しいが、やはり利き腕が不自由なままでは日常生活を送りづらい。代わりに剣を持って臨んだ左腕には新しい打撲が生まれたが、昨日ほど打たれはしなかったのでそう手ひどい有様ではなかった。

鍛錬の後、湿布薬を用意してくれていた男から処置を受ける間も、彼女は左手からナイフを離さなかった。鍛錬の間にわずかにだけあった幾つかの手ごたえを忘れぬよう、手のひらに染み込ませるかのような行いを見て、男は何かを言いかけたようだったが、結局は何も言わなかった。

食事を終え、部屋に戻ってもすぐにナイフを握る。脳裏に濃く残渣として在る女性の動き、それに対応するように自らの動きを何度も反復する、その少女の姿をつまらなそうに砂虎が眺めている。

毎朝、剣に打たれる日々が続いた。打撲の数は三日目の鍛錬で極端に減りはしたものの、それ以降はほとんど変わることがなかった。当然ながらサリュの方から反撃に成功した試しはない。

少女と騎士の技量は隔絶していた。それ自体は無理からぬことである。武門の生まれであり、幼い頃から鍛錬を続けてきたその騎士は、質量才全て少女より遠く天上にあった。誇りと血、そして日々のたゆまぬ努力が彼女をその域へと辿りつかせた。

一方の少女は剣を振り始めてまだ数日であり、才能以前の問題があった。騎士からの指摘にあったとおり、まず体格で劣っている。彼女は自身の正確な年齢を知らなかったが、恐らくは十代半ばから二十の間であろうことを考えれば、この時代の一般的な女性の身長よりもさらに彼女は小柄だった。生まれと生活の貧困さがそうさせ

た。身体を動かす能力に長けているわけでもなければ、小柄を生かす瞬発性もせいぜい人並み程度にしかなかった。

ただ一点、少女は決して考えることを止めなかった。どれほど打たれようとへこたれず、逃げ出さずに剣を握り続けた。その我慢強さもまた、生まれ育ちが関係している。あるいは、何かの経験と想いが。

彼女の深遠にたゆたう何者かの存在を知りつつ、彼女に接する周囲の人間はあえてそれに触れようとはしないでいる。

鍛錬を始めて一週間が過ぎた。その間、ただひたすら剣について考え続けた少女の執念が一つの結果を生んだ。

騎士が斜めから振り下ろした剣撃、その太刀筋を注意深く見極め、短剣をあわせる。直線的な軌道を読んで、刃にこすらせ――それが根元に届くや否やのところで、一気に手首を跳ね上げる。

乾いた音を立てて剣が弾かれた。

思わず、二人で目を合わせる。さきに表情を動かしたのは、相手の方だった。にっこりと笑う。

「――よく出来たな」

自分でも信じられない思いで、サリュは手元を見おろした。

少女が今やったことは、前に金髪の女性が見せたそれだった。相手の剣を受け、そのまま跳ね上げる。

「エルドと呼ぶ。受け流す、という意味だ」

騎士が言った。

「護剣の基礎で、ほとんど全てでもある。エルドで捌き、もう片方の剣で打つ。あるいは手にあるのが短剣だけなら、受け流したまま相手の懐に身を入れて、刺す。感覚を覚えているか？　なら、もう

一度だ」

とはいうものの、二度やれる自信はなかった。実際そのとおりで、それから何度剣を受けても、彼女は相手の剣を弾くことができなかった。落胆して肩を落とす少女に、慰めるような声がかかる。

「まあ、一度できただけでも大したものだ。それに、エルドというのはリスクも大きい。慣れないうちから無理に狙うのは控えたほうがいい」

詳しい説明を求めて顔を上げる少女に頷いて、

「足で距離をつめ、腰に重さをのせ、肩が角度を測り、手首を添える。この一連の動きが剣だとするなら、エルドは手首の段階で“跳ね”させるわけだからな。相手の剣の動きを見極めた上でなければ、相手の重さを全て手首で受け止めることになりかねない。無茶なやり方では手首を傷めるだけだ」

特に相手が手だれの場合にはな、と続ける。

「直線的な軌道で打ってきてくれることなど稀だ。ただひたすら相手の剣を捌き、機会を待つ必要がある」

わかるようで、よくわからない。そんなふうな少女の表情を見て女性は小さく笑った。

「やってみせよう」

剣を構えた相手に、サリュもナイフを構える。行くぞ、という声とともに、女性が踏み込んだ。先ほど少女が偶然に受け流しを成功させた時と同じ、斜め上からの打ち下ろし。あわせて少女も短刀を向け、両者の刃があう寸前。女性の剣が軌道を変えた。

「……っ」

鞭のようにしなり、そのまま少女の腕をかいくぐって喉元まであてられた剣に、彼女は声もなかった。

「こういう風にな」

刃先をあわせるという、ただそれだけのことすらが至難。今まではただ相手が限りなく手を抜き、刃をあててくれていたのだと少女は悟った。考えてみれば当たり前のことではあったが。

悔しさはなかった。うぬぼれるような傲慢な思いなどそもそも持ち合わせていない。ただし、先ほどの成功もその為だったのかという気持ちは少しあった。

女性は気休めの言葉は使わなかった。彼女という人物はそうした行為を好まない。

「今日はおしまいにしよう。それとも、もう少し続けるか？」

騎士は言った。聞きながらにして既に答えを知る者の表情だった。

鍛錬が再開された。

朝食を終え、心地よい疲労をひきずりながらサリュは部屋に戻っていた。最近では痛みは腕に集中せず、全身に散っている。その分、鍛錬後に塗られる湿布の匂いも身体のあちこちからするようになってしまったが、その強烈な香りにもいい加減に慣れた頃だった。

人間よりよほど鼻の利くクアルにはひどく不評だったが。この薬の効能は身をもって知っていたから、彼にはもうしばらくの間、なんとか我慢してもらうしかない。最近は嫌がるのであまり抱き上げてもいないことを思い出しながら、部屋の扉を開けた。視線がすぐに砂虎の姿を探す。眉が寄った。

「クアル？」

部屋の中央にミルクの入っていた平皿があり、周囲はいつものように飛び跳ねた中身で汚れている。しかし、肝心の砂虎の姿がなかった。

「――クアル」
お腹一杯にミルクを飲み、どこかで眠りこけているのだろうか。寝台の下や棚の向こうなど、丸まった姿を探して部屋の中を歩き回り、呼びかける少女の声に徐々に不安の色が交じった。
「クアル……っ」

返事はない。しまいには大きく声を荒げ、それでもしんと静まり返ったままの室内の気配に、ようやく彼女は砂虎の不在を認めた。廊下へと飛び出す。どこに向かっているかもわからずに屋内を駆けた。
廊下の女中達が、驚きの視線を向けてくる。構う余裕もなく、少女はひたすらに駆け続けた。いない。いない。いなくなる。――嫌だ。
「サリュ様」
目の前に執事の男が現れた。脇をすり抜けようとしたところを肩をつかまれて引き止められる。
「どうかなさいましたか？」
「クアルが……っ」

気が動転していた彼女はそれ以外の言葉を言えなかったが、それだけで男は事態を把握したようだった。目を細め、落ち着いた口調で確認してくる。
「お部屋には、いないのですか」
こくりと頷く。拘束から逃れようと暴れたが、肩に置かれた男の手はぴくりともしなかった。
「……わかりました。すぐに人を使って探させます。サリュ様は、一度部屋に戻りましょう。もしかしたら何か見落としているかもしれません」
そんなことをしてる暇はない。さらに暴れようと身をよじらせるサリュへ、男はたしなめる声で言った。

「落ち着いてください。わけのわからないまま走り回っても、砂虎は見つかりません」
男の言葉に諭されたというよりは、疾走直後に暴れ続けた身体の限界がきて、少女は動きを止めた。目の前に岩のように立ちふさがる男を睨みつけ、頷く。廊下を通りすがった女中に声をかけ、先導する男に手を引かれながら部屋へ戻った。

部屋にはやはり、クアルの姿はなかった。ぐるりと周囲を見回した男が少女を振り向く。
「最後にあの砂虎を見かけたのはいつですか？」
「……朝ご飯に。出かける前、です」
「家の者がミルクを持ってきたのはその時ですね」
首を縦に振る。
「部屋を出る時、扉はしっかりしまっていましたか？」
少し考えてから、サリュは頷いた。
「となると、どこから出たかが問題になりますが……」

廊下から何人かの女中がやってきた。男が彼女達に指示を出す間、彼女はミルクの名残が残る床の平皿を見つめていた。いったい、どうして。湿布薬の匂いがそんなにも嫌だったのか、それとも。ふと、抱き上げるどころか、最近ほとんどクアルと接していなかったことを思い出した。ずっと剣のことばかり考えていた。いや、そうではない。考えていたというより、むしろ。
「これから屋敷の捜索にあたります。お手伝い頂けますか？」
思考は男の声に遮られた。
もちろん、彼女に否などあろうはずがない。足早に廊下を行く男の後ろを、強張った表情で少女はついていった。

「クアル――」

遠く青色に佩けた空へと吸い込まれ、散る。かすかな残響が失われる前に、サリュは再度肺を膨らませ、呼びかける声を放った。

「クアル――っ」

休みなく張り上げ続けているせいで声音はすでにしわがれかけていたが、どれほど喉が痛んでも少女には気にならなかった。例え喉がつぶれても、そんなことはクアルがいなくなることに比べれば些細なことだった。一人きりになってしまうという、その恐怖よりは。

彼女の頭にあったのは、先日の記憶である。幾ら呼びかけても応えてくれない誰か。そのまま、相手は自分の前からいなくなってしまう。

視界が滲んだ。咽の痛みからくるものではないのは明白だった。

私はなんて馬鹿なんだろうと少女は嘆いた。彼女が剣を習ったのは、小さな砂虎を自分の力で護るためのもののはずだった。騎士の女性は言った。剣を持つことで護りたいものを傷つけてしまうことがあると。

しかし、今回の件はそれ以前の問題だった。剣で傷つけるどころではなく――彼女の剣は、砂虎を向いていなかったのだから。護るための剣などではなかった。ならば何の為に、というその解答も既に彼女は自分の中で導き出している。だからこそ、自らの愚かしさが悔やまれるのだった。

「クアル！」

がさりと庭先の花壇が揺れた気がして、駆け寄る。棘が刺さるのも気にせず掻き分けても、そこに砂虎の姿はなかった。

「……サリュ様」
男の声に、振り向いた少女の顔は朗報への期待に満ちている。しかし、若い男の表情にあったのはいつものように平静な表情だった。
「屋敷勤めの者から、話がありました。シーツの取替えにお部屋に入った際、扉を開けていた瞬間があったかもしれないと。その者が出る際、少なくとも姿を見たおぼえはないということでしたので――その間に、外に出てしまった可能性が高いと思われます」

そんなことはとうにわかっていることだ。
言いかけて、彼女は気づいた。男の視線はそれ以上のことを告げていた。
「……外」

屋敷の、外。

「……あくまで、可能性ですが。どこからか出ていってしまわれたのかもしれません」
サリュは血の気が引くのを感じた。

砂虎は危険な生き物だとして広く認知されている。この屋敷では金髪の女性の好意で厚く遇してもらっているが、外でクアルが見つかればどんな扱いを受けるかは想像に難くなかった。まず間違いなく、殺されてしまう。
走りだそうとしたサリュを、肩に置かれた男の手が押しとどめた。

「放してくださいっ」
「できかねます。先日の騒動は落ち着いたとはいえ、あなたのことを覚えている街の人間がいる恐れは高い。今はまだ、屋敷の外に出るのは危険なのです」
「私なら、平気です……！」

必死な表情で少女は言ったが、男の態度は頑迷だった。
「申し訳ありません。あなたの身の安全を必ず守るようにと、主から言い付かっておりますので」
少女の言葉は受け入れられず、男は近くの女中を呼び止めた。
「クアル様は必ず、我々が見つけ出します。どうかお部屋でお待ちになっていてください。――貴方達、サリュ様をお連れしてください」

男の言葉と視線の意味を察したように、女中達は深く頭を下げた。
二人の女中に左右を挟まれ、サリュは屋敷の中へと戻された。隙を見て逃げ出そうと試みるが、すぐに回り込まれてしまう。女中たちの所作はそれぞれ素人のものではなかった。

無駄な反抗は相手の警戒を強めるだけだ。現時点での行動を諦め、うつむきがちに廊下を歩きながら少女は頭の中で必死に手段を講じていた。周囲に悟られないよう注意深く視線を四方へと配り、屋敷の構造や女中達の配置を目にやきつける。手の空いた人間は砂虎を探しに出てくれているのだろう。館の中にはあまり人が残っていないらしかった。
「……何かありましたらすぐにご報告いたします。こちらにてお待ちくださいませ」
部屋に戻ると、丁重な礼とともに女中達は去った。少女はすぐに扉へと近づき耳をそばだてる。気配はないが、扉の前に誰かが立っていないとは思えない。ここから出ていくことは難しいだろうと考えた。

それなら、どうするか――部屋の中央に戻り、机の上のナイフをとって、少女は顔を上げた。視線の先では硝子窓が白々とした日光を透過させている。

4

白磁の町並みをサリュは駆けていた。
全身を包む大外套を羽織っている。道行く人々が顔をしかめる程度にはその外見は目立っていたが、わざわざ声をかけて呼び止めるものはなかった。

トマス中央に居を構えるのは裕福層であり、貴族や商家が中心となる。そうした家々では例外なく使用人の服装にも気を遣われる為、彼女のような身なりをした者はまず外からの迷い子であろうと考えられているのだった。
実際には、彼女のような姿を見かけることがないわけではない。ただしそうした場合も時間帯は限られていた。朝夕に多くあるそれらの訪問者が、個人ではないという点でも今の少女とはあきらかに異なっている。

周囲の奇異の視線をものともせずに、駆ける。大声で砂虎を呼ぶ声をあげたいところだが、さすがにそれでは人の目を引きすぎる。自らの立場についての自覚はあったから、彼女は衝動を殺し、懸命に走りながら道端の隅々へと目を凝らしていた。

外に出たクアルが見つかったらどうなるか。間違いなく騒ぎになるだろう。そこには人が集まっているなりなんなりの騒動が起きているはずだ。街中を走っていれば、そうしたところにでくわすかもしれない。
では、まだ見つかっていなかった場合には。その時は砂虎が物陰に隠れているという可能性が高い。少なくとも大通りに悠々と姿を見せて、いつまでも人の目に見つからないのは難しいだろう。

大通りを駆けながら、砂虎が隠れられるだろう場所を彼女は探した。

一件一件の屋敷がそれぞれ土地を広く扱い、遊びの空間にも恵まれた中央区の建築物群には、いわゆる路地裏と呼ばれるような箇所は多くない。一つの屋敷のなかにあるそうした隙間に紛れてしまっては探しようがないが、そうした場所には少女の身分では入り込めない。探索が不可能である以上、それに心を囚われていても仕方がなかった。極めて冷静に、彼女は自分にできることを選択していた。

やがて、少女の足が止まったのは、中央区の外れ、裕福層と一般層を分け隔てるように立ち並んだ店棚の連なる通りである。市場だった。

それなりの貴族や商家であれば、毎日の食料品や生活に費やされる細々としたどんなものの扱い、その仕入れにももちろんつきあいというものが存在する。契約を交わし、特別な受発注を経て直接運び込まれる為、家の者が露店に直接出向き、そこで自ら目利きをしながら買い物をするようなことは稀だった。

しかし、店側としてもそうした大貴族、大商家だけを相手にした商売が全てではない。商人という職業人が宿命としてあわせもつ業に正しく、彼らはみな現実的で、功利高かった。

上層地区の近くで「某家、御用達」という煽り文句を掲げながら商われる数々は、多くの人々の目をひいた。高貴な者に憧れ、彼らの生活の一端にでも触れたがるのは人の性でもある。トマスという成功と挑戦の街で、それらは明日は我が身という両面ある現実を、肯定的な希望として信じるために有効な手段でもあった。

故に、下層や一般層にあるそれと同じく、その市場が賑わいをみ

せることは必然といえる。そこを舞台とした多くの成功談もあった。つまり市場とは、トマスという商業の街の持つ光と影の象徴なのだった。

活気に溢れたその場所に立ち、サリュははじめてこの街を訪れた時に似た感想を抱いた。視界を埋める人と、その顔にある悲喜交々の表情。響き渡る歓声と怒声。上層地区のゆるやかな一画で半ば隔離されたように穏やかな数日を過ごした少女は、視界の光景に屋敷で見た絢爛華麗な花壇の時と同じような、目もくらむ思いをおぼえた。

小船の上のように不安定な心地を靴裏に感じ、しかしサリュはその場に踏ん張った。トマスに到着した日、彼女の側には彼女以外の人物がいた。迷いかけた自分をみかねて手をつないでくれた。その人物は、今いないのだから。少女は一人でこの人の洪水に立ち向かう必要があった。

顔を上げ、一歩を踏み出す。大外套を目深に被りなおした。

こうまで人が多ければ、足元まで注意を払う人間は少ないだろう。何かのおこぼれを狙った砂虎がどこかにまぎれこんでいる可能性は少なくなかった。慎重な態度と油断のない視線を周囲に向け、少女は足を進めた。

ことさらにいうまでもなく、トマスはバーミリア水陸においてもっとも栄えた街の一つである。

水路と陸路を介して運び込まれ、またそこから送り出される交易品の質量はまさにその街が水陸流通の中心であることを示していた。大商家ともなれば一国の王をも凌駕する財貨を蓄え、それがまたさらなる成功を呼び込む糧となる。トマスを危険視する声は帝国首都

ヴァルガードに常にあったが、それも仕方ない現実が確かにあった。

トマスの気風は自由な在り方にある。もちろんしきたりや制約といったものが全くないわけではなかったが、古い慣習や金にもならない道徳などにはほとんど価値が認められていなかった。トマスという街を支え、形作る商売人たちの志向がそうした風土を生んだ。

自由は膨張し、暴走する。ともすれば崩壊をも招きかねないそれが、トマスにない――少なくとも、表面上そう見えないのには、そこに住む人々の多大な努力があった。自由と無制限とは異なる概念である。慣習や道徳を極力重視しない姿勢は、何をするのも勝手という傲慢を許すものではなかった。トマスの人々は、そうした行為を防ぐためにそれぞれの業種、立場で話し合いをもち、協定を結んだ。その結果、生まれたものが組合と呼ばれる組織概念である。

組合は大から小まで幅広く、その種類は多岐に渡った。トマスを治めるベラウスギ公爵家を中心とした、大商家がその名を並べる支配者達の組合から、それぞれ職人達の組合。光ある故に必ず存在する、闇――慈悲を求めて路上をさすらう物乞いにすらそうした組織はあった。

彼らは他の組合連中のように、堂々と館をかまえ、書面に所属する人間の名を記して体制を維持するようなことはなかったが、実態としては全く同様のものであった。得られる利益の配分と、もめごとの仲裁。その二つである。

文字に記された名前ではなくその容姿で所属の有る無しを判断し、彼らは縄張りを荒らす者を許さなかった。新たに敗者の列に加わるなら、まずはその中での礼儀を知るべきだった。それすら出来ないものは、そこからもはじきだされてしまう。

今、大外套に身を包んで市場を歩く一人の少女が、そうした彼らにとって不快な新参者と見られてしまったのは無理からぬことである。数名の薄汚れた男達が、彼女の前に立ちはだかった。

敵意に満ちた視線で見下ろされ、少女は身体を強張らせた。脳裏には、暴徒と化した集団に追われた記憶が蘇っている。――魔女を殺せ。

「……なにか」

瞳が相手に見えぬよう、顔を伏せるようにした声に、乱暴な言葉が返された。

「お前。どこのもんだ」

「どこ、とは？」

「ここは今日、うちらの縄張りなんだよ」

沈黙し、理解の及ばないうちに少女は気づいた。誤解を受けている。

「私は、探し物をしているだけで。ご迷惑をかけるつもりはありません」

男達が顔を見合わせた。

「探し物ってのは、なんだ」

「……猫です」

砂虎というわけにもいかず、彼女は愛玩用として知られるその小型の生物の名をあげた。前に、そういう風な物言いを聞いたことがあった。

それを聞いた男達はもう一度互いの視線を絡ませ、一斉に笑い出した。

「猫って。お前、そんなりでペットでも飼ってんのか」

「いやいや。食料のつもりかもしらんぞ。あんがい、もうそこらへんで捌かれてるかもな」

下卑た笑いを起こす男達に、少女は黙したまま反応を返さなかった。猫を飼うという行為が上流階級に許された贅沢だという常識を知らなかったし、仮に知っていたとしても反論したところで何も得られるものはないだろうことは判っていた。

サリュは顔を俯かせたまま、男達の脇を通り過ぎた。その背中に声がかかる。

「待ちな」

笑いを収めた男達は、口元を醜悪な形に歪めていた。獲物を前にして、露骨にいたぶるような表情だった。トマスという街の在りようは決して楽園ではなかった。強者と弱者をつくり、弱者はさらに弱者を求める。

「言っただろ。ここは今、俺らの縄張りなのさ」

少女が言葉の意味を理解していないことを悟り、隣の男がわざとらしく続けた。

「通りたければ、通行料を払ってもらわねえとな」

もちろん、そんなものを払う必要があるはずがない。難癖をつけられていることを悟り、少女は注意深く周囲の様子をうかがった。

砂虎を探して市場の外れに足を向けたのがまずかった。人通りはあるが、誰もこちらにまでは注意を払っていない。大声をあげれば、注目を浴びることは容易いが――それで物事か解決するかはわからないし、クアルを探せなくなってしまってもまずい。

「すみません。お金は、持っていなくて」

せいぜい穏便に事を治められないかと、少女は頭をさげたが、

「なら、ブツだ。何かあるだろうよ。とりあえず、そのマントの中身を見せてもらおうか」

傲慢な物言いにそれが不可能だと理解した。
それならばと、胸元へと腕を伸ばしてくる男に少女は迷いなく懐の短刀を抜き払った。突きつけられた切っ先に目を見開き、しかしすぐに男達は笑みを取り戻す。

「おいおい、物騒だねぇ」
「いいナイフじゃねえか。慣れないことはしねえほうがいいぜ、坊主」
「……どいてください。騒ぎを起こしたくは、ありません」
その台詞はむしろ失策だった。彼女から騒ぎを大きくすることはないという事実を、男達に伝えてしまっている。男達はまるで怯まず、取り囲むように仲間同士の間隔を広げた。
「勘違いすんなって。お前の探し物を手伝ってやるのによ」
「そうそう。猫だったか？　一緒に探してやるさ。なあに、ちいっと御代をもらえれば、それで――」

男の言葉が終わらないうちに、サリュは身を翻した。全速力で走る。男達の怒号を背中に聞いた。
人の密集した空間は、彼女の小柄な体躯でもとても全力で抜けられるものではなかった。道行く買い物客と次々にぶつかり、非難の声を聞きながら少女は市場を駆けた。出口を探して走るが、土地勘のない彼女にはまるでどちらへ進めばいいか見当がつかない。

程なくして、彼女は袋小路に追い詰められた。三人の男が、息を切らしながら立ち尽くした彼女を笑う。
「追いかけっこはしまいかい」
その手に得物が握られている。ナイフが二人に、一人は中に何か詰められているらしい細長い布袋を下げていた。
「痛い目にはあいたくねえだろ？　大人しく――」

少女は躊躇しなかった。彼女が数日の剣の鍛錬で学んだことは、まず先手必勝ということだった。
地を走り、左端の男へと掛かる。その手に持った布の棒のようなものへ刃を向け、確かな感触を覚えた。切り裂かれた袋から中身の砂が流れ落ちた。

「てめえ！」
怒号とともに、男達が襲い掛かる。
それは決して連動した動きではなかった。だが、その隙を突くような技術も経験も少女にはない。路地裏は二人が同時に掛かるには狭かったが、その狭さが逆に少女が男達の脇を抜ける行為を疎外していた。

一人目の男のナイフを、軽くいなす――騎士のそれと比べれば、まるで眠ったような打ち下ろしだった――しかし、その後の行動が続かない。少女の非力な体格では、体ごと男にぶつかったところで相手の態勢を崩せもしなかった。つまり、取り得る行為は一つしか残されていない。

――刺す。一瞬、少女は迷った。だらしなく開かれた男の懐へ入り込まず、そのまま男の脚を切りつけた。悲鳴があがる。声にわずかに少女の体が強張ったところへ二人目の男が飛び掛った。
「このクソガキ！」
強引に伸ばされた腕に突き飛ばされ、彼女はあっけなく吹き飛んだ。煉瓦壁に後頭部を打ち、一瞬、視界がぶれる。はっと意識を戻したときには、腕を振り上げた男の凶悪な顔が視界いっぱいに広がっていた。

反射的にサリュは両腕で己が身をかばった。その上から、叩きつけるような拳がおろされる。重さをずらせず、まともに受けた力は

簡単に少女の身体を今度は横へと跳ね飛ばした。
息が詰まる。地面を転がり、数転して世界が平衡を取り戻す。立ち上がろうとする腕に力が入らず、歯を食いしばって顔をあげた先に靴底があった。
「あうっ……！」

踏みつけられた頭が地面を擦り、ざらりとした感触が耳に響いた。
「ガキが、なめた真似を――」
「おい、殺すなよ。ここじゃ人目につきすぎる」
「わかってるさ。さっさとそれ、拾って来やがれ」
少女が落とした短刀を拾い上げ、男は目を細めて口笛を吹いた。

「おい、見ろよ。とんでもねえ上物だぜ。そいつ、どこかの貴族の坊ちゃんなんじゃ」
「馬鹿が、そんなわけがあるか。どうせ盗みにでも入ったんだろうぜ。……おい、坊主。他にも何か持ってやがるな。これ以上痛い目にあいたくなかったら、さっさと出した方が身のためだぜ」
外套ごと髪を掴み、持ち上げる。少女の奇妙な瞳孔を見た男が驚きに顔を歪めた。

「お前――」
一瞬の隙を逃さず、獣のように少女は跳ねた。ぶちり、と捕まれた頭髪が千切れる音を聞きながら、強引に男へ身体をぶつける。尻餅をつく相手からの反動を利用して立ち上がり、サリュは周囲を取り囲む男達へ刺すような視線を放った。

外套が外れ、銀髪にも似た灰色の髪があらわになっている。その下にある面立ちを見た男達が目を見開いた。
「ガキかと思ったら、女か！」
「それより、そいつの目を見ろよ」

瞳孔に円の描かれた奇怪な双眸。思い出したように、一人の男が首を振った。
「そういえば――こないだあった騒ぎで、魔女だって言われてたヤツがいたな。そいつじゃねえか？」
「ハッ、まんまと生き延びてたってわけだ。あれのせいで火に焼かれて死んだ仲間も多いっていうのに、大したもんだな」
「いや、待て。しかしこれはいいぜ」

二人の仲間の言葉をひきとって、男が醜悪な表情をひけらかせた。右手に持つ、もはや用途をなさない布切れを捨て去り、
「本当にそいつが魔女だってんなら、関わりたくもねえが。顔は悪くねえ。大枚はたいて飼おうって物好きがいるかもしれねえぞ」
「ちっとばかり、肉がなさすぎるがな……。まあ、そういうのが趣味って連中もいるか」
「そういうことだ。傷をつけるんじゃあねえぞ」

にじり寄る男達へ少女は追い込まれた砂虎のように反応した。唸り声こそあげなかったものの、歯を剥き、身を低くして構える。しかしそれも、先ほど受けた一撃が彼女の足元を揺らしていたから、傍目には強がりが見え透いていた。

それをはっきりと認識して、男達の態度には余裕と侮りの色が強い。少女の手からはもはやナイフも失われていたから当然ではあった。

物陰から影が飛んだ。それを視界の端に捉えた瞬間、少女も動いていた。
先頭に立つ男の右手に、小さな砂虎が噛み付いている。慌てて振り上げた男の手からナイフが漏れ、それが地面に落ちる前に彼女はそこに滑り込んでいる。柄を掴み、今度は迷わずにサリュは男の太

ももへそれを突き立てた。

絶叫が轟いた。

耳をつんざくそれを聞きながら、すぐに少女は距離をとった。全身を怒らせた男が向かってくる。その斜め後ろに、もう一人。しかし同時には掛かってこれない。

彼女と同じく飛びのいた砂虎が、地を這うように駆けた。グアル、と小さな体躯で精一杯に咆哮しながら、注意を引きつける。子どもとはいえ猛獣の気配が男の注意を反らし、その合間を縫って少女は再び一気に距離を詰めた。

血に濡れた刃が見える。それが彼女の意識を鈍らせることがあっても、それも一瞬のことだった。耳元で騎士の言葉が響く。剣とは結局、打つものだ。

全身の力を込めて、彼女は手にある凶器を打ち刺した。

悲鳴。すぐにナイフを抜こうとして、手だけがすっぽぬけた。手のひらが赤に染まっていることに、はじめて彼女は気づいた。

「この野郎！」

顔を上げる。殺意をまとった男が右手にナイフを振りかざしていた。回避の動作は間に合わない。両手に武器はなかった。どこか冷静な思考で、全ての行動が間に合わないことを少女が悟り、

「――失礼」

見知った男の声が静かにその場に響いた。

路地裏の入り口、何事かと大勢の視線が集まるそこに、黒服の男が立っている。そこから投げかけられた言葉に、彼女の目の前の暴

漢が全身の動きを止めていた。そのまま前のめりに倒れこむ背に、一本のナイフが突き刺さっている。

薄汚れた衣服に、じわりとみるみるうちに血が滲みだした。それを見て、それから自分の手と、身体にかかった返り血を見下ろし、はじめてサリュは寒気を覚えた。腰が抜け、倒れこむところを近づいてきた執事の男に支えられる。

「遅くなりまして申し訳ありません。近くでクアル様を見つけることができたのですが、急に走り出されてしまい。結果的に、よかったと思いますが――ご無事ですか？　サリュ様っ」

思い出したように痛みが戻ってきていた。全身に痛みと、特に頭痛がひどい。視界が徐々に暗転する。意識が途切れる寸前、心配げにこちらへ寄り添う砂虎の姿に、彼女はわずかに口元を綻ばせた。

5

執事の男に背負われてサリュは屋敷への岐路に着いた。
意識を取り戻し次第、すぐに彼女は男の背中から降りた。全身には痛みが残っていたが、足元をふらつかせ、肩を借りながら道を歩く。胸には砂虎を抱えていた。体毛が彼女の衣服についた血で濡れている。

程なくしてたどり着いた豪奢な屋敷の門前に金髪の女性の姿があった。
どこかの巡察に出ていたのを戻ってきたのか、薄い鎧を身にまとった姿で仁王立ちにこちらを見ている。遠めにも険しいその視線を受け、少女はまっすぐに彼女の元へと向かった。

「ごめんなさい」

頭を下げ、血に汚れた格好で少女は言った。
返事はなく、静かに騎士は彼女を見下ろしている。感情が包まれて読めない眼差しに言い知れぬ重圧を受け、サリュは顔を俯かせた。飼い主をかばうように胸元の砂虎がみゃうと鳴いた。

小さな吐息が漏れる音が聞こえた。
「怪我はないか？」
「……はい」
そうか、と再び嘆息とともに呟き、騎士は傍らに控えて立つ執事へと目を向けた。
「ご苦労だった」

男は無言のまま頭を下げた。

「湯を沸かせてある。血を洗うといい。クアルもな」
「――はい」
言いつけを破り外に出たというのに、騎士の口から責めるような言葉が一切出ないことが彼女には辛い。砂虎とともに抱えたナイフを握り締める。ふと、騎士の視線がそれに向けられた。
「大事なものは護れたか？」
優しげな声が、どんな罵声よりもきつく彼女の心に突き刺さった。唇をわななかせ、彼女は頭を振った。声は出ない。答えることができなかった。
「……そうか」
少女の頭を撫で、騎士は去っていった。
館へと戻るその背中を見送る顔が歪む。金髪の女性のため息のような台詞には、確かに失望のそれが含まれていた。

次の日、少女は剣の鍛錬に出なかった。

ぱたりと扉が閉まり、男が去る。

残された室内の静けさの中にサリュはいた。
今しがた執事の男が朝食に呼びにきたのだが、体調不良を理由にそれを断り、彼女は寝台に横たわっていた。

天蓋に描かれた宗教画が、語りかけるように彼女を見下ろしている。緩やかに流れる長髪を波立たせた女性と、それを祝福するかのように傅く人々。周囲には鳥の翼を持った小さな子どもが舞っている。それらがどういった光景を模写しているのか、水陸で最も信仰

されているその教義内容について理解のない彼女にはわからない。ただ、その中央に描かれた描かれた女性の微笑が、この屋敷の主人のそれと重なり、腕で顔を覆った。

かたり、と鳴る音に、寝台から床へと視線を向ける。用意されたミルクに顔を突っ込んだクアルが、一心不乱に中身を舐め取っていた。こぼしかけたらしいが、周囲には今のところ零れた様子はない。

「――クアル」

そっと呼びかける。ぴくりと耳を立てた砂虎が振り向いた。縦に虹彩の入った真ん丸い瞳が彼女を見つめ、それから自分の足元の平皿を見てから、駆け出す。寝台の上に飛び込んできた小さな家族を、少女は思い切り抱きしめた。

砂の香りが胸を満たす。心安らぐその中に混ざる僅かな匂いに、眉が寄った。

昨日あれほどよく洗ったというのに、まだ血の匂いが残っている。毛玉のようなクアルの身体を転がし、どこにも血の跡が残っていないことを確認してから、思い至った。血の匂いが残っているのはむしろ自分かもしれない。

もちろん、彼女も昨日のうちに湯を浴びて身体を洗ってはいる。汚れた服装も洗い、それでも跡が残ったのであとは女中達に引き取られてしまった。血の汚れは少なくとも表面上には残っていない。

だが、血に濡れた感触とその鉄錆びた匂いは、今も彼女の中から消えてはいなかった。

感傷のようなものだ。冷静な気分で少女は考えた。彼女が自分の意志で他人を傷つけたのは、昨日が初めてだった。

その事が彼女の精神に翳りを生んでいるわけではなかった。生き

る為に誰かを傷つけ、殺してしまうこともある。砂に生きる者として、その程度のことは彼女もわきまえていた。
彼女の胸に巣食っていたのは全く別の事だった。

剣を振ったことではなく、剣そのもの。つまりは騎士の言った言葉に全てが集約されている。――剣は、大事なものを護れたか。
その答えが否であるから彼女は言葉を返せなかった。
はじめは確かにそのはずだった。砂虎を守れるように剣をとった。しかし次第に少女は剣に没頭し、砂虎を忘れた。いや、そうではない。砂虎ではなく、自分はただ誰かを忘れるために剣を振っていたのだ。クアルはその巻き添えを食らっただけだ。もし自分がはじめからそれが目的だったとしたら――きっかけにまで利用されたことになる。
「……ごめんね」
力いっぱいの謝罪を受け、ぎゃう、と苦しげに砂虎が暴れた。

それまでほとんど一日を費やしてきて剣を振らないとなれば、途端に時間が余るようになる。
今までの清算も込めて存分にクアルをかまいながら、彼女は無為に時を過ごした。脳裏にはどうしても彼のことが浮かび、離れない。

あの夜の別離からすでに十日以上が過ぎている。生きているのか。生きているのなら、いったいどうして見つからないのか。この街にはいないのか。河に下って流れてしまったのなら、自分が見つかった場所よりもさらに遠くまでいったとすれば。生死すら定かではなくなってしまう。
探したい。自分の足で彼を探しに行きたい。ふと、砂虎を探しに外に出たそのまま街を出てしまえば、と考えて、何を馬鹿なと頭を振った。

自分ひとりで生きる力も持たない身分で何ができるというのか。クアルを探しに少し街に出ただけであれだ。あの時、執事の男が来てくれなければどうなっていたか。寒気をおぼえた。それに。

彼のことは、金髪の女性が懸命に探してくれている。失せ人を昔から知るという彼女からは本当に良くしてもらっていた。もちろん、古い付き合いであったらしい彼から直接頼まれていたからではあるだろうが、その厚意を裏切って自儘にするわけにはいかなかった。

自分に出来ることは、彼女と、彼を信じて待つことだけだ。何も出来ないなら、せめて迷惑だけはかけないように。そう思えばこそ以前は部屋に閉じこもっていたのだが、前のように心を空にすることもできなかった。

遊びつかれたクアルがいつの間にか寝入ってしまっている。

起こさないよう静かに立ち上がり、少女は棚机に向かった。残された遺留品の中から塗料の剥げた玩具に手を伸ばす。色の揃ったそれを適当にバラし、改めて揃える。――すんなりと揃ってしまった。嘆息して、戻す。

旅の道具だったのだろう幾つかの小道具に手を伸ばし、用途の知れないそれらをしばらく眺め透かし、元へ。最後に彼女は本に手を伸ばした。表紙の次に挿された乾花を壊れないよう脇に置き、ぱらぱらとページをめくってみる。

文字の読めない彼女には、呪文のようにしか見えない文字の羅列。時に挿絵のようなものがあり、なにか後ほど書き加えられたような跡も見かける。元の持ち主であった彼女の村の長のものか、それとも――唐突にその可能性に思い至り、彼女は目を見開いた。

これは彼の文字かもしれない。

脳裏に、熾した火の下で本を読んでいた男の姿を思い出した。つまらなそうに頬杖をつき、ページをめくっていた男の横顔を、瞼が自然と落ちるまで彼女は眺めていた。

ずきんと胸が痛む。たった一月も前ではない出会いと、少しの旅路が遥か昔のことのように思えた。視界が滲む。涙が本に落ちないよう慌てて天井を仰ぎ、本を胸に抱いた。

そこに温かさの幻視を覚えたのは、ただ彼女の願望のものであったとしても。身近にあった彼の痕跡に、サリュは少しの間だけ声を出さずに泣いた。

「――文字を？」

夕食の際、少女は不思議そうに訊ねてくる女性に頷いた。

「本を、読みたいと思って……」

今朝の鍛錬に出なかった負い目があったから、それを願い出るのには勇気がいった。しかし女性は嫌な顔を見せず、むしろ大きく頷いて言った。

「それはいい。実は、私からも提案があったのだ」

今度はサリュが小首をかしげる。

「文字もそうだが。日中、時間があって暇だろう。サリュさえよければ、勉強をしてみてはどうかと思ってな」

「勉、強？」

少女には聞きなれない言葉だった。貧しい村で育った彼女には今までそうした機会がなかった。精々が数かぞえと、育ての親でもあった老婆が生業としていた薬草について多少の知識があるだけである。閉鎖された環境ではそれだけで充分でもあった。

「ああ、そうだ。生きていく為の知識はあって損はない。言語、数術、歴史。座学だけでなく、作法なども。剣術と同じだ。身体だけでなく、頭も動かしていた方がいいこともある――もちろん、気が向けばの話だが」

女性の上げたそれらがどんな場面で有効なのか、少女にはわからなかった。ただ、彼女が自分の為を思ってそう言ってくれていることはわかる。断れるはずがなかった。文字を学べるというだけで、サリュにとってはありがたかったから、女性の申し出は望外のことだった。

「ありがとう、ございます」

深く頭を下げる。それを見た女性が嬉しそうに微笑んだ。

「わかった。では、家の者にそう伝えておく。夕食にしよう。……腹は空いているか？」

「はい。いただきます」

正直に言えばあまり食欲はなかったが、これ以上、目の前の女性に僅かでも心配をかけたくはなかった。足元では食事を供にすることになったクアルが平皿と格闘している。

出された食事を、全てとはいかずとも半分以上食べることが出来た。それを見た同席の女性の表情が翳らなかったことを彼女は嬉しく思った。

6

翌日から始められた少女への教育で講師に立ったのは執事の男である。彼はサリュと同じく平民の出ではあったが、主人つきの側近となるからには相応の知識と経験、作法の心得が必要とされた。

扱われる内容は多岐に渡った。二十の記号からなる表音文字の習得、それによって古くから残されてきた歴史、数ある国の興りと滅び。その舞台となる水陸の成り立ちについて伝えられる説話、それを虚実入り交えて語る神話と宗教論。座学以外にも食事作法や礼儀式、会話として用いられる言葉遣い。歩法についても指導があった。

彼女への教育には貴族が受けるべきものと、平民が受けるべき双方が入り乱れていた。貧民の出である少女には到底必要になさそうなものまで含まれている。社交礼儀を学ぶなら欠かすことの出来ない舞踏に触れられていないのは明らかに女当主の意向だったが、それ以外にも思惑は見て取れた。

つまり金髪の女性は、あくまで可能性を提示しようとしているのだった。

彼女は友人から少女について頼まれていた。故郷を失ったと聞く少女が、これからどうやって生きていくか。その為に必要なことは全てするつもりだったし、与えるつもりでもいた。今回の教育もその一環である。

まだ本人には伝えていないが、彼女はこのままサリュを養うつもりでいた。彼女もいまだ家庭のない身ではあるが、一人の孤児を引き取ることは難しくない。その中で少女が生きるための知識を得、自らの志向にあった何かを見つけることができたならよいと考えて

いた。
その為にまずは少女の適正、及び可能性の幅にあたりをつけようと、思いつく全てを試してみることにしたのだが――一度に与えられるにはあまりに多いそれらに、少女は決して音をあげなかった。

少女は与えられる全てをよく学んでみせた。決して一を聞いて十を知る破格の聡明さではなかったが、どんな話にも真剣に耳を傾け、理解に努めた。
剣の鍛錬の時と同じだ。才というよりは性格。いや、想いというべきだろう。
何事にも真面目に取り組む姿勢や、今までにろくに教育を受けたことがなく、価値観に凝り固まっていないのも、もちろんその大きな要因にはなっている。だが、それ以上に少女の学習意欲を支えるものがあるのは明白だった。

少女は日々膨大な量を教わるその中で、特に言葉に強い興味を示した。帝国共用語の基礎を習得すると、今度は様々な単語の意味とその用法について訊ねるようになった。その質問には決まって一冊の本が使われた。しっかりと縁まで装訂された古びた書物。文字を覚えたばかりの少女が読むには明らかに荷が重いそれが誰の持ち物であるか、もちろん金髪の女性も知っている。

ため息が出た。つまりそれが少女の全ての根幹であり、同時に彼女を深く縛りつけてもいるのだった。それを忘れろというのが無理なことも承知している。それは何故か。同じことは、何も少女だけに限った話ではないからに違いなかった。

講師に立つのは執事の男だけではなく、時間がある時には金髪の女性がサリュに教えることもあった。
この時代、専門的な教育を受けられるのはほとんどが貴族だけの

特権であり、彼女もまた首都ヴァルガードにて学生時代を過ごしている。大学を出て既に数年がたつが、知識量では当時の最高水準のものを彼女は持っていた。
故に、執事の身分では聞き及ぶことすらないそうした知識について彼女自身が教鞭をとることになったのだが、実際にはそうした専門教育より、雑学めいた話に流れることの方が多かった。
ある日、女性が話題に上げたのは帝国で研究されている技術についてである。

「――砂の、船？」
「ああ。帆船というものはわかるか？　そうか。船はわかるな？」
少女は頷く。この街から逃げ出そうとした時に乗り、それから――。彼女の表情が翳ったのを見て、すぐに女性が言葉を継いだ。
「ともかく、船だ。それに大きな布を張って――帆というんだが――その帆に風を受けて、その力で動く。そういうのを帆船という。水は漕ぐことができるが砂ではそうはいかない。だから、後ろから風を受けて砂の上を進もうというわけだ」
「そんなものが……」

シーツをなびかせて砂海を渡る船を頭に思い浮かべようとするが、上手く脳裏に描きだせない。頭を捻る様子に、女性は微笑を浮かべながら続けた。
「似たようなものは昔からあるが、それらはほとんど一人用だった。船というよりは帆をつけた板のようなものだ。だが、何人もが乗り込むような大きさになると途端に難しくなる。必要な力が大きいからな。その為にはもっとたくさんの風の力が必要で、そうなると当然、帆も大きくならなければならない。そうして帆を支える軸もさらに巨大化して――堂々巡りだ。だから、なかなか研究がはかどらずにいた」
「あの人が、それの研究を？」

「研究というか、首を突っ込んでいただけだが」

女性は言った。

「私達の通っていた大学には、各国の貴族子女への教育の他に、優れた技術者や学者の保護という目的もあったから、色々な人間が集められていた。中にはなんというか、相当に個性的な相手も多かったんだが……困ったことに、あいつはそういうのが好きだった。砂帆船。燃える石。手を触れずに動く装置――動力という。そういうのとかな。色々と、授業をサボってそういうところによく顔を出していたよ」

「……変わり者、だったんですね」

「変人として有名だった」

至極真面目な表情で頷く。

「あれでもツヴァイ宰相閣下の実子だからな。周りの注目は王族並に高いのに、あいつはそんなことまるで気にも留めなかった。大学では各国それぞれ派閥を作って、同じ国の中でも色々と面倒も多かったんだが、そうした類の話にもまるで興味を示そうとしない。そんなことに関わるくらいなら、昼寝するか図書館で本を読んでいるような奴だった」

貴族と呼ばれる種類の人々の間で交わされる様々なしがらみについて、もちろん少女は全く想像のしようもない。しかし、その人物が騒動の脇で一人、本を読んでいる姿は容易に頭に浮かぶ。

少女の口元がほころんだ。それを見守る金髪の女性の表情も柔らかい。

「そういえば、その砂帆船であいつが言っていたことだが――」

雑学というより想い出語りではあるが、少女にとってもむしろそちらの方が好ましかった。彼女がその人物と一緒に旅をしたのはほんの僅かな期間でしかない。自分の知らない彼について聞かされる度に、相手のことを身近に感じられるようだった。

共通の人物について、まるで姉妹のように語る二人の傍らには執事の男が控えている。息休めに葉茶の用意をして二人の前に差し出す。香り高い葉茶の香気とともに、穏やかな時間が流れた。

少女の心は少しずつ癒されていった。

無論、いまだ掴めない男の消息について不安と焦慮はある。しかし、心を空にするのでもなく、逃避に他の何かを持ち出すのでもなく、狂せず彼の安否を待ち続けられたのは、間違いなく当主の女性の心配りの成果だった。

細々とした職務に精励しながら、女性は供に食事を取り、知識を教え、想い出を語り、姉のような態度で少女に接した。サリュの方でもそうした女性の厚意に感謝していた。特殊な家庭環境で過ごした彼女にとって、女性からの温かな扱いはまさしく生まれて始めてのものだった。

少女は剣の鍛錬にも再び顔を出すようになっていた。女性が極力、自分との時間を持とうとしてくれていることに気づいていたから、そのことで少しは昼間にも顔を出そうとしてくれる女性への負担を減らせるのではないかと考えたからである。今度こそ、偽りなく護る為に剣を学びたいという気持ちもあった。彼女達が朝方、鍛錬に励む横では、小さな砂虎が自らの高さほどある草原のなかでやんちゃに駆け巡っている。

そうして、少しばかりの日々が過ぎた。

その晩、サリュは本を胸に廊下を歩いていた。

夕飯後の時間に自室で本を読み、どうしても理解できないくだりがあった。執事の男に聞いたところ、古語の類で書かれてあるらし

く彼にも翻訳は難しいという。それならばと、金髪の女性に訊ねるべくその私室へと向かっているところだった。

廊下を歩いているのは少女一人であり、案内役の人間はいない。この一月ほどの間に、少女は客人というより家族としての扱いを受けるようになっていた。

広大な屋敷で、主人の私室までの廊下は長い。前に訪れたこともあって道に間違いはないはずだが、所々に灯りを焚かれて人気のない廊下には奇妙な雰囲気があった。ふとした不安をおぼえて、彼女は胸の中の本に力を込めた。本当はクアルの方を抱きしめたいところだが、部屋の中でぐっすり眠っていたので起こすのがためらわれた。それに――こうすれば、あの人が守ってくれるような気がする。

最近の少女にとって、本と、主人から聞かされる話が彼の全てだった。短い旅でほとんど知ることなく終わったあの人物についてもっと知りたいと強く思っていた。彼はいったい何故、旅をしていたのか。彼はいったい何故、求めたのか。何故あんなにも飢えていたのか。

それを知るうえで、特に本は有用なものに思えた。金髪の女性が言っていた。あいつは昔から、一人でよく本を読んでいたと。彼の思いを追体験するように、少女は本を読むことを欲した。

腕の中の本は、まだほとんど触りの部分しか読み込めていない。帝国公用語の基礎だけは学んだが、単語や熟語についてはまだまだ知識不足であり、古い言葉で綴られている部分も多かった。難解な解釈が、ますます彼という人物を表している気がして、少女はただそれに没頭していた。

だから、気づかなかった。

何かの音がした。周囲が静まり返っているからこそ聞き取れた程

度の大きさ。風の音かと思ったが、硝子窓の外景は光無く、静かに暗がりの中に落ち込んでいる。
気のせい。いや、確かに聞こえる。少女は廊下の奥へと目をやった。一筋の光が廊下に漏れていた。その室内から、音は聞こえてくるようだった。
足音を忍ばせて少女はその部屋へ近づき。そして、見た。
そこは屋敷の主人の私室だった。落ち着いた装飾で彩られた広さのある空間、その中央に絹髪を背中に流した女性が半ば背中を向けて佇んでいる。その肩が、震えていた。

「――ニクラス」

サリュは呼吸を忘れ、瞳を見開いて動きを止めた。
それほどまでに悲痛さに満ちた、それは声だった。

「どこにいる。なぜ見つからない……」

顔を俯かせ、自らを抱くようにした女性の胸元に何かがあった。小さな四方形の板を大事そうに抱え込んでいる。ちょうど、少女の胸にある本のように。
「頼む。頼むから、生きて――」
押し殺した声が涙に濡れていた。
それ以上その場にいることが出来ず、少女は身を翻して廊下を走った。足音に気をつけることすら忘れ、ただ逃げ出した。
頭に殴られたような衝撃を覚えていた。
――ニクラス。彼の名前。自分の知らない、彼の本当の。
自分のものではない、彼。
一体いつから、自分は彼を自らの所有物のように考えていたのだ。

何故、与えられる為に待つことを当然のように思っていたのだろう。彼のことで嘆き、悲しんでいるのが自分だけだと、いつから思い上がっていた――？

そんなわけが、あるはずがないのに。

金髪の女性は何年も前からの彼の知り合いだと言った。

まだ訪れたことのない都で、ともに学生時代を過ごした友人。ただの友人ではないことは、さきほどの女性の姿を見れば瞭然たる事実だった。

自分が想うように。いや、きっとそれ以上の気持ちで、あの人は彼のことを想っている――

その事実よりもむしろ、今更そんなことに気づいたことが彼女にはショックだった。

自分が情けなく取り乱し、落ち込んでいる間、ずっとあの女性は自分の気持ちを隠していたのだ。それを表に出さず、ただこちらのことを思いやってくれていた。

廊下を駆け、自分の部屋へ戻る。勢いよく扉を閉めたせいで砂虎が眠りから目覚め、首を持ち上げて彼女を見た。気づかず、サリュは棚机へと向かう。そこには男の持ち物が置かれてある。自分が独占していた、彼の物。

腕の中のそれもそうだ。少女は本を置き、その横にある乾いた花に視線を落とした。

これだけは彼女のものだった。ひねくれた魔法使いが少女に残してくれた、たった一つ。水気のなくなったそれをそっと包もうとするが、それだけで花弁はもろくも崩れ散ってしまった。

衝動が胸を衝き、彼女は寝台へと走った。うつぶせに倒れこみ、声を殺して息を吐く。寝室に上がってきたクアルが耳元で鳴いている。それに応えず、少女はただ全身を震わせた。

涙が出たのは、悲しさでも過ちへの悔しさでもなかった。女性の優しさとそれに気づきもせずに甘えきっていた自分。あるいはそれ以外にも、少女の心をあれほどまでに強く揺れ動かした理由はあったにせよ――自らの心の機微に疎い彼女がそのことに気づくはずもなかった。ただ女性への申し訳なさを思って、サリュは夜を過ごした。

――ここにはいられない。

一晩を明かし、少女はそう想いを決めた。

泣き腫らした顔を洗い、服を着替え短刀を取って、クアルを抱いて外へ出る。

中庭の奥には既に女性の姿があった。こちらを見て、穏やかに微笑んでくる。

「おはよう。サリュ」

その表情に昨夜の名残はなかった。だからこそ、少女はさらに決心を固めた。

「……具合でも悪いのか？」

挨拶もなく黙り込む少女に女性が訊ねる。

ただひたすらに自分を思いやってくれるその相手に向けて、サリュは言った。

「私、ここを出ます」

女性が驚いたように瞬きした。それから、微笑で返す。
「いきなりどうした。何かあったのか？」
少女は首を振った。
「では、なぜそんなことを言う。黙っていてもわからん、理由を話してみろ」
やや視線が厳しくなる。顔を伏せ、少女はもう一度首を振った。
理由など、話せるはずがない。この女性は、懸命にそうであろうと演じてくれているのだ。その本心を盗み見たからですなどと、本人に告げられるはずがなかった。
「お前まで、私を置いていくのか……？」
感情の失せた声。思わず少女は顔を上げ、息を呑んだ。
女性が顔を歪めていた。怒るのではなく、泣くのを必死に我慢しているような幼い表情だった。脳裏に昨夜の光景が蘇った。
そうじゃありません、と言いかけて、サリュは唇を噛み締めた。目の前の女性の名誉を守りつつ、どう弁明すればよいか彼女にはわからなかった。あいまいな言葉ではきっと伝わらず、それで逆に自分が説得されてしまうわけにはいかない。決心を貫く為に今、最も有効なのは、沈黙だった。
拳を握り、少女は耐えた。誤解を受け、恩知らずと罵られても仕方がないと覚悟を決める。
長い沈黙の後、
「わかった。好きにすればいい」
吐き捨てるように女性が告げた。そのまま日課であるはずの鍛錬の途中で去っていく。
女性の後ろ姿を眺め、少女は黙って頭を下げた。

少女からそのことを告げられた執事の男は、少なくとも表面上には驚きを見せなかった。鉄面皮のような表情で頷いて、
「左様でございますか」
とだけ言った。

「……ごめんなさい」
「いえ、我々どもにサリュ様を縛る権利はございません。ご出立はいつに？」
「すぐにでも。出ようと思います。勝手を言って、これ以上甘えるわけにはいかないので……」
そうですか、と呟き、男はしばし考え込むように顎に手をあてた。
「……よろしければ、ご出立は明日ということでお願いできませんでしょうか。お嬢様も、いきなりのことで驚かれたと思います。せめてあと一晩、ともにお食事を」
言われて、サリュはわずかに顔をしかめた。

「でも、クリスティナさんが。嫌なんじゃ」
「そのようなことはございません」
きっぱりと男は言い切った。
「不器用な方ですので、今はただ急なことに戸惑われているのです。このまま、サリュ様とお別れということになると後できっと後悔なされます。どうかあと一晩、お願いできませんか」

頭を下げられ、慌てて少女はそれを止めた。そんな真似をされるまでもなく、今までにしてもらった厚意に報いる為ならどんなことでもするつもりだった。
サリュは出立を明日に伸ばし、その日は館でお世話になった人々へお礼を言ってまわった。

夜、食卓で館の主人は不機嫌そうな表情のままだった。

何か話さなければならない。お礼、それとも言い訳？　一日中考えたはずのそれらが、女性の険悪な雰囲気の前に霧となって消えていき、唯一つ、どうしても訊ねておきたいことだけが口にのぼった。
「クリスティナさん」
「……なんだ」
「――あの本だけ。持っていかせてもらえませんか」
女性の視線が少女を見た。はじめて向けられるような厳しい眼差しに身をすくめかけ、それでもこれだけは我を通したいと思って目をそらさず、
「好きにしろ」
女性が言った。それきり口を閉じ、黙々と食事を続ける。
「……ありがとうございます」
頭を下げ、少女も食事に戻った。
それ以上はどちらも口を開かないまま、最後の晩餐は終わった。

次の日、朝早くに起きてすぐにサリュは出立の用意を終えた。
とはいえ用意というほどのものもない。本と、砂虎と、大外套。ほとんどそれだけが彼女の私物だった。一月近くの間、寝床にした部屋を見渡す。感傷はあったが、それ以上の期待と不安が胸に満ちていた。
清掃中の女中達の間を抜け、外へ出る。
砂の濁りなく、空は青く澄み渡っていた。前庭を歩き、少女は正門の前の人影に気づいた。
執事の男が立っていた。手綱を持っている。それに繋がれているのは見覚えのあるこぶつき馬で、背中には荷物がくくられていた。
男がもう片方に持った布袋を渡され、困惑した表情でサリュは男を見上げた。
「中をご覧ください」

袋の中を覗く。幾つかの道具と、小さくたたんだ羊皮紙、さらに布袋などが入っている。
「現時点での水陸図と、方位磁器。それに量傾器です。使い方は、以前にお話したのを覚えていますか？」
目の前の物の意味がわからず、ただ聞かれた通りに少女は頷いた。
「では、少し地図を。――ここが、トマスです。四方の水路。この水陸の全てとも言っていい、大水脈です。北に帝都。はるか南東がボノクス。お話を聞いた限り、サリュ様がやってきたのはこちらですね。ボノクスとの境は最近、大規模な干ばつで航路が干上がっています。水路の在り方だけ、決してお忘れのないようご注意ください。当然、塩と水もです。袋には帝国通貨をいくらか用意しておきましたが、地域によっては大きく価値が異なりますし、辺境ではそもそも砂粒と同じに扱われることもあります。くれぐれもお気をつけください」

口早に説明を受け、ようやくこれが自分に与えられようとしているものだと少女は気づいた。あわてて男に押し付ける。
「こんなもの、いただけませんっ」
「では、三日ともたずに死ぬおつもりですか？」
冷ややかな声に、言葉を失う。
「水も塩も、馬も連れずに生きられるほど砂海は優しくございません。知恵も知識も、この短な時間で教えられたものはわずかです。サリュ様が彼の方を探すためにはまず生きる必要があり、生きる為には道具が必要なのです。おわかりいただけますね？」

諭されるように言われ、少女は反駁の言葉を持たずに唇を噛んだ。
「我が主からの手向けの品です。どうぞ、お受け取りください」
「……クリスティナさんが？」
にこりと男が微笑んだ。
「一通り、必要な一式は整っているかと思います。昨日、大慌てで

旅に必要なものを整えろとのご命令を受けましたので、不備があるかもしれませんが――」

「余計なことを言うな」

不機嫌そうな声がした。口を閉ざした男が一歩下がって沈黙する。

後ろを振り向くと、金髪の女性が歩いてきていた。

「それらはあいつのものではない。……馬は違うが。それなら、持っていけるだろう？」

素っ気ない口調で女性は言った。わざわざ彼の物ではないものを用意してくれた彼女の意図を理解して、サリュは頭を下げた。

「っ……ありがとう、ございます」

「……うん」

女性の声にはまだしこりのようなものが残っていたが、顔をあげた少女を見つめ、ため息とともにそれを吹き払った。

「それから、これもだ」

少女が渡されたのは二本の短剣だった。どちらにも見覚えがある。一本は剣の鍛錬で少女自身が使っていた物。短い刀身と大きな鍔つきのそれで、もう一本は、形状は知っているが布の外された状態を見るのは初めてだった。鍔がなく、短剣というには刀身が長く伸びたその剣は、目の前の女性が鍛錬に用いていたものだった。

温かな声で、女性が言った。

「剣は必要だろう？」

胸に詰まるものを覚えながら、サリュは頷いた。声を出せば瞳にたまったものが落ちてしまいそうで、懸命に我慢する。その様子を見た金髪の女性が笑った。

伸ばされた手が少女の目じりを拭う。幼い頃から剣を振るってき

て傷つき、皮膚が硬くなっているはずなのに、とても柔らかな指先だった。
「必ず戻って来い。あの馬鹿と一緒に。――必ずだぞ」
一瞬、女性の瞳が潤んだように思えた。はい、と頷いて、ほとんど声にならず、慟哭を押さえつけてサリュは言った。
「……はい。必ず」

――貴女のもとに、あの人を連れて帰ります。
後半の誓いは胸の裡にだけ。

「南の門番に話をつけてありますので、そこまでは私がお見送りします」
男に頷き、少女は最後にもう一度振り返る。
自分を優しく包み込んでくれた女性と、その屋敷。生まれて始めて感じた温かなその両者を視界に収め、そしてサリュはそれから顔を背けた。

白磁の建物群の中にあって、空は青く、砂は止み、風は落ち着いて沈んでいる。
だが、自らに囁く声を彼女はその身に聞いていた。

――生きる。そして、必ず戻ってくる。
呼ぶ声に応えるように、少女は自らを砂の海へと投じる一歩を踏み出した。

魔女の旅立ち　完

1（前書き）

妖精の輪舞曲以前のお話になります。

1

その広間には水陸中の贅が尽くされていた。
極彩色の華美というわけではない。内装にはあくまで機能美が重視されており、そこかしこの装飾にも見せるだけの目的ではなく、使用する者への利便性が追求されている。しかし、遠方の石切り場から運びこまれ、職工の手によって丁寧に磨き上げられた白理石の輝きだけでその場が特別なものであることは瞭然だった。

講堂である。両脇に立ち並ぶ円柱が特徴的なその建物には、当代の建築技師ケリタウ・オーラムの下、最先端の技術の粋が凝らされている。広大な敷地の中央、その講堂内に大勢が集まっていた。
あるいはそこに在る人々の群れこそが、その場においてもっとも価値ある貴重さを有していた。年若い者々中心に見られるその顔ぶれはいずれも各国の支配者層の子女ばかりである。男女を問わず、十代半ばの彼らはいずれも次代のバーミリア水陸国家の明日を担う人材達だった。
講堂には椅子類はなく、立席で幾つかの円卓が置かれている。座の指定を失くしてあるのにはそれなりの理由があった。誰が上座にあるか、などという問題を防ぐことができる。くだらないことではあるが、それぞれが各国の代表者としての立場で集まっている為、そうした些細を表面化させないことは重要だった。

ただ一人、その講堂において一段高いところからその場を眺めている壮年の男がいる。この状況を作り出した張本人ともいえる人物だが、発想の提案から呼びかけ、国内外への折衝に至ってここまで来るのに少なからず労力と費用が用いられたというのにさしたる感慨もなく、ただ少しばかりのおかしみを抱いて前途有望な目の前の顔ぶれを見下ろしていた。

集団は幾つかに分かれている。
国の主流と反主流。また思想、信条の類に。つまりは今ここに広がる光景こそが、水陸の現在でもある。一歩、上から見ればこそここまではっきりと明確ではあるが、それを実際にその場にいながら考えることのできる者がどれほどいるか。それぞれの表情を浮かべて見上げる意気高い若者達の顔を順に撫で、その一角で男の視線が止まった。

講堂の奥、集団から一歩引くようにして、まだ少年といってもいいその人物は立っていた。
男はわずかに問いかける色を含めて視線を送った。気づかぬはずもないだろう相手からの反応はない。ただいつものように、醒めた瞳が男を見返してきた。視線が絡み、相手のほうからほどかれた。
バーミリア水陸で勢力を誇るツヴァイ帝国で宰相を務めるナイル・クライストフは、胸の裡で嘆息を吐いた。彼は一国の政治中枢を司る人間としてふさわしい器量と経験を持ち、また一風変わった人柄でも知られていた。権謀術数や打ち手読み手の探りあいなど日々の呼吸と等しくこなしてきていた彼ではあるが、しかしその彼を以って最大級の難物と言わしめる相手が自身の家中にいるというのは、なかなかに皮肉なものと思えたのだった。

父親の想いに気づく素振りも見せず、若者は変わらず達観した眼差しを向けている。その瞳には確かに周囲の人間を不安にさせる奇妙な雰囲気があった。その根本にあるものがいったいなんであるか、肉親さえ計りきれずにいる。
ニクラス・クライストフというのが若者の名前である。

達観した表情で、実際にはその人物がなにを考えていたのかとい

えば、特段、何も考えていなかった。
日頃から誤解を受けるのだが、自分はどうも周囲から異質に感じられるらしい。自身そうであるという自覚はあっても、それを周囲に撒き散らす趣味はなかったが、だからといって意識のないようなものを必要以上に意識するというのも面倒なことだった。

集団から離れているのも、ことさら意図があるわけではない。
ぎらぎらと野心に満ちた集団の只中にいるよりは、遠くから眺めている方が気が楽でいい。そう思っただけのことである。それが周囲からどのような反応を受けるかまで考えはしても、それを慮って気の乗らないことはしたくないというのが彼の性格だった。一言でいえばひねくれている。
その彼にしても、この「大学」という試みについて決して否定的な考えを持っているわけではなかった。水陸各国の社交と、若者達の教育（その為の、優秀な教師陣の保護）を目的としたもので、特に後者は充分に彼の興味をそそった。人並以上の知識欲というのは、彼という人物をかたどる重要な部位の一つでもある。

この時代、貴族子弟の教育は高名な学者を家庭教師として招いて行われるのが一般的である。学者の数には限りがあるし、水陸の右と左で同一人物から知識を授かることも出来ない。それらを解決する集合教育という実父の考えには、さすがと思うところがあった。
もちろんそこに父なりの思惑があることも理解している。当然、趣味や道楽ではありえなかった。だからこそ多少の不自由さはあっても、それに文句をつけようとも思わない。ただ、出来うることなら巻き込まれたくないというのが本音だった。それが許される立場かどうか、というのもわかってはいるつもりではある。
講堂の前では彼の父親が祝辞を述べている。決して大きくない声だが、広大な講堂にあってしっかりと端まで行き届くその言葉を茫洋とした意識で聞いていると、隣から声が囁かれた。

「暇そうだな」
顔の向きはそのまま目線だけを向け、ニクラスは小さく目を見開いた。

そこにいたのはアンヘリタ・スキラシュタ皇女だった。皇位継承権の上位に名を列ねる、正真正銘の直系皇族の一人である。歳は十七で、確かに大学に加わっていておかしくはない。事前にそのことについて耳にしてもいたが、彼が驚いたのは別のことだった。
「愛い表情をするではないか。王宮ではつまらなそうな澄まし顔しか見たことがなかった」
端正な美貌で目線だけで微笑を見せる。生まれついて特別な階級にある者だけが出来る、嫌味なく上から見下ろす典雅な表情だった。
「……まさかこのような後ろにおられるとは思いませんでした」
「このような機会だからこそよ。後々では、そなたと言葉をかわすことも容易くあるまい」
かけられた言葉の意味をニクラスは正確に把握した。
集められた子女達で、大雑把にわけて中央には男子が集い、女子はその周囲を囲むようにして立っている。男性優位の在り方を端的に示した光景ではあったが、堂々と中央に身を置く女性も皆無ではなかった。
皇族の身分で、しかも大学を主催するツヴァイ帝国皇女ともあればむしろ中央にこそ囲まれるべきだろう。それをせずに二人の供を連れて後方にいることの、それが目的だという。その行為の真意について思索する少しの感情の動きも洩らさないよう、慎重にニクラスは頭を下げた。
「もったいないお言葉です」

眉が寄り、歳相応らしい稚気が覗いた。
「これから机を並べようという学友に対して、そのような言葉遣いが必要か？」

答えに詰まるニクラスを見てくすりと皇女は微笑んだ。
「なにも呼び捨てにせよと言うのではない。らしくせよ、と言っておる。退屈な籠鳥が少しは気分を味わえそうなのだ。その程度、気を遣ってくれても罰はあたるまい」
「……努力します」
「うむ。せよ」
機嫌よく微笑み、すぐに皇女は口元の名残を消した。彼らに向かって周囲から幾つかの視線が向けられている。ツヴァイの皇族と宰相の息子が二人して後ろに並べば当然の注目だが、わかってはいてもうっとうしさはある。それはニクラスが幼い頃から感じ続けてきたものではあったが、皇族の重圧はまた全く別種なものだろう。相手に対して抱きかけた穿った見方を改め、ニクラスもまたそ知らぬ表情で壇上へと視線を戻した。
その一部始終を見ていた彼の父親は、まるで意を向けた様子も見せずに言葉を続けている。好嫌いりまじった眼差しを向ける子息子女の中には、明らかな敵意の気配を漂わせた者もいる。
誰も彼もが大変なことだ。早くも不穏な気配を漂わせる場の全てを他人事のように、ニクラスはせめてあくびだけはすまいと程度の低い覚悟を固めた。

幾人かの名の知られた教師が挨拶に立ち、その後は学生と教師を交えた会食へと続いた。さっそくとばかりに社交と歓談に花を咲かせる一団をしばらく遠くの意識で眺めたあと、ニクラスは早々にその場から退席し、講堂の横に設けられた中庭へと向かった。
心地よい天気に、空には砂の翳りもなく透き通って高い。良い気候だった。
芝の敷き詰められた木蔭に寝転がり、ニクラスはくすねてきた食事皿へと手を伸ばした。
会場から姿を消した彼の行方はすぐに人の目につくことになった。

そのことを知った彼の父親は小さく頭を振り、大勢に取り囲まれた中でその話を聞いた皇女はさもおかしそうに笑った。
大学初日にして、ニクラス・クライストフは大層な変人であるという噂が学内に流れることになったのは、そうした経緯からのものだった。

大学では多くの講座が開かれるが、多くは座学を中心として男女ともに同じ卓につく。全ての講座を全ての生徒が受けるわけではなく、自らの志向と嗜好にあった教室を自由に選ぶことができた。剣術、軍術といった講座を選ぶ女子が少ないのと、裁縫、手芸を選ぶ男子が少ないのはそれぞれ同じ理由である。
講座の内容は担当する教師によって異なるが、座学では事前に学生達へ知識の予習を前提とした討論形式が主流である。歴史上の事柄を題材として教師が始めに問答し、それらについて学生達のあいだで是非の討論がなされる。講座の終わりに教師が意見をまとめ、次回への課題を告げる。集合教育という利点を生かした授業であり、それが人気でもあった。
一方、教師から学生へ向けて一方的に知識を教示するといった形式は敬遠された。集合教育の短所とも言える。学生達が、「より優劣の差がわかりやすい」形式を好んだということもあった。まさに大学は社交政治の場であるからだった。
武芸の誉れや論述の巧みさは名を成し、国内だけでなく国外へも自己の存在を主張する機会となる。将来の栄達を望む者は活気ある講座で論客に立ち、その盛り上がりがさらなる受講生を呼び込む道理だった。

用意されたどの教室にも入りきらないほど学生が集まる講座があるなら、その逆も当然ありえる。今、ニクラスが座っているのもそうした講座の一つだった。

大学には各国上級子弟に加え、その護衛も務める子飼いの者も多く在籍することになる為、総勢でその数は五百を超える。二百の学生が収容できる大教室にあってなお収まりきらない盛況振りを誇る政治学講座が行われる同刻、ニクラスのいる教室――と呼ぶのも怪しいその場にいたのはたった一人だった。いつもはもう二人、三人いることもある。

教室というのに首を捻るのは、まず部屋の在り方に問題があった。部屋の大きさ自体に問題はないのだが、小部屋は工房近くにあって、そのまま区別なく続いているとしか思えないほどに煩雑としている。何より、そこの主に講座を開くつもりがないことが致命的である。白髪の老人はたった一人の学生へ向けて顔すらあげず、黙々と目の前の作業に集中していた。

それを気にする様子もなく、ニクラスは男の手元に注目している。目の前の行為を理解しているわけではない。男がなにをしているのか、彼には検討もつかなかった。だからこそ面白くもある。筋張って無骨な老人の手と、そこに握られた槌。刃。鑢。それらがもう一方の手にある材木をどのように変化させていくのか。またその使用意図は何か。説明がない以上、頭の中で勝手に想像を働かせるしかなかった。

黙々と作業に没頭する男と、それを眺めるだけの空気が流れる中、教室の扉を引いて誰かが姿を現した。講座の人間が遅れて来たかと顔をあげたニクラスの予想は外れた。

どこかで見た覚えがあるが、ここではじめて見かける。相手は女性だった。繊細なつくりの面立ちに意志の強い眼差し。ああ、とニクラスは脳裏の中で名前を思い出した。

目礼に目礼が返る。そのまま彼女はまっすぐに彼の元へとやってきて、隣に腰を下ろした。

ニクラスは好奇心を覚えた。この講座はおよそ女性の興味をひく

ようなものではない。確かにこの時間、他に女性が率先して受けたがる講座はなかったかもしれない。しかし、そう言った場合には、ほとんどの者は女子同士で茶会を設けるか、そうでなければ政治学講座で熱くなる男どもの様子を冷やかしにいくのが大半の過ごし方のはずだった。

不思議に思って横顔を眺めるニクラスへちらりと視線をよこし、その令嬢は言った。そっけない口調だった。

「クリスティナ・アルスタと申します」

「ニクラス・クライストフです」

短い挨拶を交わし、それ以上会話が続かないことを確認してからニクラスは視線を戻した。老人は新たな受講生の存在などまるで関せずとばかり、手にした板のようなものを薄く削り落としている。

「何を作られているのでしょうか」

発せられた素朴な疑問に、ニクラスも率直に答えた。

「わかりません」

「わからない……？」

不思議そうに瞬きする。老人がうるさげに咳をついたのを見たニクラスは立ち上がった。

「外に出ましょうか」

令嬢が首を振った。

「いえ。失礼しました。失言をお許しください」

老人に向かって頭を下げ、姿勢を正して真っ直ぐな視線を男の手元へと向ける。

椅子に座りなおしながら、先ほどより少し強い興味を含めてニクラスは整った横顔を見た。講師として招かれているとはいえ、老人のような職工という立場は社会的に決して強くない。そうした人間に向けて素直に頭を下げる態度は貴族には珍しかった。令嬢が視線を向けられているのに気づいたことを察して、さりげなく視線を外す。

それから半刻ほど老人の作業は続いた。ニクラスも令嬢も喋らず、やがて作業に納得のいったらしい男が息をつき、手に持った薄板を置いた。赤子か割れ物を扱うような慎重な動作だった。
「お昼ですか？」
問いかけに黙ったまま頷く。それから隣の彼女へ目を向けて、
「嵌め板だ」
短く告げたそれが自分への回答だと気づき、令嬢は再び頭を下げた。
「ありがとうございます」一拍の後に続ける。「次までに勉強してきます」
おかしなものを見るような視線で老人が令嬢を見た。鼻息を吹き、そのまま教室から去っていく。
「……変わった方ですね」
「まあ、教師というより職人気質の方ですから」
おそらくあの老人も同じ感想を抱いたことだろう、という言葉は胸の中に秘めて、ニクラスは立ち上がった。
そうしてあらためて正対すれば、令嬢は背が高かった。姿勢のよさもあるのだろうが、それだけではない。視線のせいだろうかと彼は思いついた。身に包んでいるのは軽装で、ドレスというにはややさっぱりとしすぎている。どちらかといえば男性が着そうな活発的な衣装だった。
「ずいぶん動きやすそうな格好ですね」
「はい。剣を振っておりますので」
ああ、とニクラスは納得する。剣術の講座を受ける女性は多くはないが、決してないでもない。武家の名門と呼ばれるアルスタの人間がそうしない理由がなかった。
「前にお会いしたことがありますね。ご挨拶が遅れ、申し訳ありません」

ニクラスが言うと、意外そうに彼女は瞳を瞬かせた。
「覚えておいでとは思いませんでした」
「父と一緒に参内した折に、確か。お話させていただくのははじめてだと思いますが」
「はい。その節は父ともどもお世話になりました。ぜひ直接お礼をと思っておりました」
頭を下げられ、ニクラスは首を振った。
「父がやったことです。それに、当然のことだと私も思います」
彼が言ったのは謙遜ではなかった。
古くから名のあるアルスタ家だが、社交政治の場にあっては決して恵まれた立場にいなかった。戦場の勇士が謀略の得手であることは稀だが、アルスタはその模範的な一族と言えた。
「いえ、私どもが受けた御恩には変わりません」
堅苦しい物言いに、ニクラスは気づかれないよう苦笑をもらした。アルスタ家の人間には代々、愚直の二文字が魂に刻み込まれているというが、どうやら本当のことらしい。話題を変えた。
「これからどちらへ？」
「いえ。特には」

沈黙する。押すでも引くでもなく、真っ直ぐにこちらを見る女性の意図を読めず、さしあたって場を流す言葉を探した。
「これから昼食にしようかと」
「はい」
「午後すぐには、あまり出たいと思える講座もないので。職人という人種は皆、食休みが長いのですよ」
「なるほど」
ニクラスは笑った。ここまで明け透けな態度にでられては対処の仕様がない。降参の台詞を口に出す。
「よろしければ、ご一緒に如何ですか」
「お付き合い致します」

にこりともせず、ただ実直そのものの態度で見目麗しい令嬢は答えた。

2

帝都ヴァルガードは帝国の中心の一つであり、バーミリア水陸を形成する基水源の最有力とも目される水源の在り処でもある。
純水量ではトマス水源以上といわれる豊富な水量がその何よりの証拠とされていたが、その是非はともかく、流れる砂の惑星にあって、人が腰を落ち着かせて生を満喫することの出来る稀少な存在であることは疑いようがない。

帝都には多くの臣民が住み、大貴族と呼ばれる上流階級の邸宅が立ち並んでいる。彼らはそれぞれ下流に土地――より厳密にいうなら、治水権を持っていたが、そうした領地の運用は配下に任せ、自身はヴァルガードに居を構える者も多かった。より上流に住まいを持つことが、社会的地位の在り方でもあるからだった。

帝国の興りから続くアルスタ家もそうした貴族の一つである。つい先日までは過去の傍流と蔑まれていた一族であるが、帝都の一画にはそれなりの邸宅を構えていた。
「お帰りなさいませ」
「ただいま」
住み慣れたその屋敷に戻り、アルスタ家令嬢は幼くも凛とした表情で家の者の礼を受けた。頭を下げた家令がわずかに眉を動かしたのは、その声に不機嫌さがしのんでいたからである。当然、仕える身にあってそれを訊ねるような非礼はせず、代わって別のことを訊ねた。
「葉茶をお持ちいたしますか」
「お願い」
心持ち憤然と廊下を去っていく背中を見送りながら、男は葉茶を持っていかせる人物について考えた。

声を掛けられたのは、ファビオラという中年の女性である。古くからアルスタ家に仕える女中で、しばらく屋敷から離れており、最近になって再び屋敷仕えに戻ってきていた。
「お嬢様が？」
「ええ。あちらでなにかあったのかと」
言外に共通された認識で、二人は含みのある視線をかわした。

アルスタ家が中央政治、その社交の場に戻ったのはごく最近のことである。それまでは名こそあれど日陰者でしかなかったのに、とある有力貴族の計らいからそれが許されたのだが、そうした行いは当然、他からの妬み嫉みをかうことにもなった。
ほとんどの貴族はアルスタ家を相手にしないことでその鬱憤を晴らしたが、中にはアルスタ家を指して剣しか触れぬ愚か者、と声に出して卑下する輩もおり、そうした連中が存在するのは令嬢の通いだした大学でも同じであろうと思われた。そこで何か因縁をつけられたのかもしれない。
「うちのお嬢様が、そんな連中に負かされるなんて思えないけどねえ。まあ少し、お話を聞いてみるとしようかね」
「ええ。よろしくお願いします」
乳母として仕えていたこともあるファビオラなら、その役に適任といえた。

葉茶道具の一式を受け取り、ファビオラは廊下を歩いて主人の私室へ向かった。扉をノックすると、中からどうぞ、と声が応える。なるほど、いつもよりやや声に硬さがあるかとフォビオラは思った。
「おかえりなさいませ、お嬢様」
さっぱりとした装いの室内で、彼女の仕える主人は窓際で外を眺めていた。
「ただいま」

答えながら、表情には笑みもなく振り向くこともない。他家の深窓の姫君と異なり、無駄に愛想を振りまく人物でないことは知っているが、それだけでない様子でもあった。
「なにかございましたか」
葉茶の用意を整いながら、ファビオラは単刀直入に切り出した。言葉の小細工もまた、この若い主人は好まない。

ふと、それではじめて自分の行いに気づいたように、主人が瞳を瞬かせた。
「おかしな顔をしていたか？」
口から出たのは貴族の令嬢にはふさわしからぬ言葉遣いだったが、それを聞かせる相手が自分だけであることを承知しているファビオラは、おおらかに笑って首を振った。
「いつもどおり、大変お可愛らしくございますが。どこぞのドラ息子と悶着でもありましたか」
「いや、そういうわけではないんだが……」
眉をたわめて口ごもる。そうした仕草は、主人の清々しい性格を知るファビオラにも意外な表情だった。戸惑うような様子で主人が言った。
「今日な。クライストフ家のご子息と、会った」
「おや、まあ。それはそれは」
クライストフ家といえば宰相を務める帝国の重臣、そしてアルスタ家にとっては大恩ある相手である。アルスタ家が社交の場に戻るきっかけとなったのが、なにあろう彼家の計らいであった。
そこの次男が今年から発足した大学に通うことは広く知れ渡っていた。それと連想して彼女は市井の噂を思い出している。
「宰相様のご次男といえば、相当に変わった方だと評判でございますね」
主人が渋面になるのを見て、ああ、と彼女は得心した。

「やはり、お変わりで」
「ああ」
少しばかり自分の好奇心も併せて、ファビオラは問いを重ねた。
「どういったところがです？」
問われて天井を仰ぎ、主人は諦めるように息を漏らした。
「……よくわからん。とにかく、変だ。変人だ」
「はあ」
「挨拶に行って、そのまま一緒に昼食という話になったんだが。あの男、どこかの食堂ではなく、中庭に寝っ転がって食べるのが好みらしい。パンに肉やらを挟んだものを用意させて、そのまま布敷きもないまま、芝の上に座りこんでだぞ」
ファビオラもしばし言葉を失った。
「それは、また。職人のような振る舞いをなさるのですね」
職工は貴賤の身のものとされている。地べたに座っての飲食など、およそ貴族がするような行為ではなかった。
「そうだろう。戦場ならともかく。あのような真似、生まれて始めてだ」
「……お嬢様もそれを？」
やや半眼になって問うと、彼女の姫君はたじろぐように顎を引いた。
「仕方ないだろう。恩ある相手からの誘いだったのだ、断るわけにはいかないじゃないか」
「はいはい、おっしゃるとおりでございます。それで？」
む、と主人は眉をひそめた。
「それで、とはなんだ」
「それ以外にもお変わりなところが？」
侍女の言葉に、苦々しい顔つきになって首肯する。
「……たった三日で、大学は既に各国入り乱れての派閥争いだ。徒党を組み、『団』などと名前をつけて闊歩する連中までいるという

のに、そのどれにも加わっていない。一人でふらふら出歩いて、講座も好き勝手に受けているだけだ。しかも活気のある討論などはわざと避けているような節がある。仮にもツヴァイ宰相の子息がだぞ」
「お人嫌いということでしょうか」
苦悩するように振られる主人の頭の動きに、絹糸の髪が追従した。
「そうでもない。幾らか顔見知りはいるようだった。しかしそれも皆、相手は他国や職工の者ばかりだ。別に名のある相手というわけでもない。そういう連中が向こうから話しかけてきた時には、つまらなそうにしていた」
「よく見ていらっしゃいますね」
「今日の午後、ずっと傍についていたからな」
「はあ。ずっと」
女中の言葉に含められたものに気づかず、主人は重苦しい嘆息とともに言葉を吐いた。
「なんなのだ、あれは」
「なんなのでしょうねえ」

つまりは相性の問題かとファビオラは総括した。真面目で堅物、そこがよいところでもあると思っているお嬢様とでは、話を聞く限りクライストフ家の子息とのあいだに友誼を結ぶことは難しそうに思える。腐っても宰相家、という思いもないではなかったが、一家人としてと同時に幼少から彼女を見知るファビオラは、乳母の行うべき忠言を迷わなかった。
「お嬢様、お気をつけくださいませ。アルスタ家を快く思わない連中はこの帝都に無数にございましょう。かかる火の粉をふりはらうは当然として、自ら好き好んで火元に近寄る必要もありません。そこにいるのが火の扱いも知らぬ阿呆ならなおのことです」
名指しを避けた言葉の意味するものについて即座に理解の色を浮かべ、しかし彼女の主人は頷くのをためらったようだった。苦笑を浮かべる。

「わかっている。家名を汚す真似はしない」
老婆の心配深い眼差しに、しかしな、と武門の令嬢は言葉を継いだ。
「それが阿呆なら見限るだけですむ。今はまだ、掴みきれていない気がするのだ」
「……くれぐれもお気をつけを」
ファビオラは追言を控えた。目の前で腰かける主人がすでに自分を仰ぎ見るほど幼くないことを思い返したからであったが、もう一つの理由もある。微妙に歪められた顔色の中央、輝く清冽な眼差しに決して不快でない感情が踊っているのを見て取ったからだった。そこに潜むものについて詮索したい気持ちはあったが、恐らく本人にも自覚はないだろう。ならばこれ以上はまた後日にすべきだった。

会話をしながら止まることのなかった手つきが、主人の好みから寸分違わぬ淹れどきを計って葉茶を注いだ。陶磁の器からほのかに漂う香りに表情を和らげる主人へ一礼して部屋を辞し、屋敷の長い廊下を歩きながら老齢の女中は考える。
頭にあるのは家令への報告と、今後のことへの思索だった。

ニクラス・クライストフ。彼の人物の人柄について少し風聞を拾い集めてみるべきかもしれない。貴族の身でありながらたまに下街に見かけることもあるという程の変わり者と聞くから、少なからず話を入れることはできるだろう。情報を集めてどうするか。それはまだわからない。しかし必要になってから動いたのでは遅すぎる。主人が動こうという時には既に仕度を整えておくというのが家人の在り様というものだった。
アルスタ家に仕える者達にとっては、その意識はさらに強い。彼らは自分達の主を愛していたし、かといって決して盲目的なわけでもなかった。血脈として引き継がれる、拭いがたい短所が内包されていることも重々承知している。だからこそ、それを補うべきが我

らであるという自負をも抱いていた。
　それにしても、とファビオラは脳裏に浮かぶ主人の姿に皺を刻んで口元を緩めた。去り際に主人の顔に見た表情は、葉茶を楽しむだけのものではなかった。誰かを思い浮かべていた。その誰かが何者であるかはこの際、考えるまでもない。眉間に眉を寄せながら口には笑みを保ち、瞳にあった輝きは、まるで得がたい友人を前にしたかのようなものだった。いや、会って初日で友人というのは少し趣が異なるだろうか。それならば。いや、あるいは――

　自らの思考が飛躍しかけていることに気づき、彼女は思いついたその断片までかき消すように強く頭を振った。市井の者が囀るように、彼女達のような家人達のなかでこそ広まる類の話もある。件の人物についてのとある噂を耳にしていたからこそ、彼女の如き立場ではめったなことを夢想するわけにはいかなかった。
　あの小さな嬢様がそうしたお年頃になられたか。ふとした感慨に、年老いた女中は笑った。いかほど背が伸びようが、彼女にとって主人はいつまでも子どものころの印象が強い。剣の修行の辛さに泣くのを必死に堪えていた在りし日を思い浮かべ、それから艶聞を心配するようにまでなった時の流れを喜び、同時に少しばかりの寂しさを思いながら、何をはやとちりをしているのかと最後に自分のことを呆れた。これだから年をとるのは嫌なのだ。
　まあいいさね、と鼻息を吹かして顔を上げる。周りの思惑がどうあれ、主人こそは彼女が乳飲み子の時分から育て上げた自慢の嬢様であった。そんじょそこらの深窓の姫様とは格が違うし、ドラ息子が相手ならほだされることもあるまいて。

　後日、これが予感というものだったのかと彼女はしみじみと思い返すことになるのだが、しかしもちろん、それはすでに成就のあとに明かされる予言と同じく、後から言ったところでなんの意味も失われてしまっているのだった。

帝都ヴァルガードに設けられた大学が開講して一週間が過ぎた。
各国の思惑と警戒、不安が錯綜したその開幕であったが、特に大きな混乱もなく、数日を経て関係者はひとまず緊張の糸を緩めている頃合である。その筆頭として挙げられるのはツヴァイ国宰相ナイル・クライストフだが、彼は個人の問題から周囲とは異なる心配もしていたから、その心中の複雑さは容易に他者がうかがい知ることは出来なかった。

その物思いの種である当の人物は、父親の想いなど意も介さぬような振る舞いを続けている。気ままに講義を渡り歩き、水陸一の貯蔵を誇る図書館で好きに読書へと読みふける態度は、学生の本分としてまっとうな姿に見えるが、この大学の成立の経緯とその裏側にある事情を鑑みれば、そうとばかりはいえなかった。

大学では、日を増すごとに人々が徒党を組んで歩く様子が見られるようになっていた。
大勢の人間をある環境の中に押し込めれば、彼らがはじめにとる行動は集団を作ることである。人間行動学というのはこの時代、哲学の一部として研究の題目にとりあげられることもあったが、そこでいわれているとおりの現象ではあった。
講師の立場であれば理論と実証の興味深い実例として見る事も出来るが、当の学生達にしてみれば他人事ではない。学内にどのような集団があるか。自分はその集団のどこに属するかということは、比喩でなく彼らの将来に強い影響を与えるからであった。

集団は幾つかにわけることができる。例えば外的要因と内的要因に。一つの切り方で見られる切断面は一つでしかないように、概して全体を一種の分け方で捉えられるものではなかったが、やはり最

もわかりやすく大きな派閥となったのは、それぞれの出身国である。
ホストでもあり今現在、水陸に覇権を唱えるツヴァイ。その友好国や属国、敵対国に至るまで水陸の主だった国家の子息達が大学には参加していた。
彼らの中で若く、血気のはやった一部の者達は、自らの国名を冠した集団を組んで他国の人間を牽制した。彼らが名乗ったのは例えばツヴァイであればツヴァイ団、などという無粋な名称ではあったが、名を飾ればどうなるものでもなかった。
わかりやすい見方をすれば、それらは各国の持つ軍事的在り様の象徴であった。武力とは自らを主張する――主張のために自衛する、その根源である。品のない野蛮さ、と眉をひそめる者もいたが、しかしその暴力こそが各国の背景にあるのは事実だった。
もちろんそればかりではない。各国の上級子弟は大学を構成する主要な人種ではあったが、名のある商家や見込みのある職工も大学には参加しているからだった。大学では水陸中の優秀な学者や技師を招いていた。同じ国を生まれにもっても、職や立場が違えば考え方も大きく異なる。個人的な嗜好というものもあった。

さらに重要な属性がある。女性である。
この時代、水陸での女性の立場は国によって多少の差はあっても、決して強くない。しかし、どのような勇者も全て女性の腹から生まれ落ちるという事実は覆りようがなかった。
良家の子女として生まれた彼女達は貴族としての品を嗜み、その多くが社交場で浮名を流しつつ婚姻の機を待つことになる。そこに介在するのは当人の意思ではなく、親同士が決めた縁談であることがほとんそ全てではあったが、だからこそ彼女達は社交場での振舞いに己の全てを費やしていた。
結婚の後にもその必要性は劣ることはない。敵があれば戦場に立つ男達と違い、一部の例外をのぞいて剣を持たない彼女達は、夫の不在にも家を預かり、社交の場に立つ必要があるからだった。

そうした意味でいえば、まさしく社交とは彼女達にとっての戦に他ならない。
その複雑怪奇さは世の男の想像をはるかに越える。剣をもった戦働きを誇りにするような性分の者であればなおさらだった。例えばあのアルスタ家などが社交の主流から外れていたのも、悪いのは周囲だけとはいえない。ある意味で、そうした社交の蛇道を行きぬく為に必要な能力が彼の家に不足していたことは確かであるからだった。それは個人的な好き嫌いとは全く異なる話であった。
ニクラスがそういったあれこれを頭に思い浮かべたのは、目の前にそのアルスタ家の令嬢が立ったからだった。
貴族の娘にしては化粧気の薄い顔にまっすぐな視線をのせて、無言で彼を見下ろしている。怒っているようにも見えたが、それを聞いたところで素直に答えてくれそうにない気配があった。
「ああ。えと、それじゃあ、僕はこれで……」
それまで話をしていた彼の知人が、居心地悪そうに席を立った。ありがたい心配りではあるが、なにか勘違いをされている気がしないでもなかった。
とりあえず、ニクラスは口を開いた。
「こんにちは、クリスティナ様。ご機嫌が悪いようですね」

「――こんなところで何をしているのですか」
低く押し殺した声で令嬢は言った。
「何、とは？」
二人が相対しているのは中庭だった。先ほどまで一緒にいたのは職工あがりの若者で、一緒に昼食をとっていたところである。
「ああ、お昼はもうとられましたか。よければご一緒に――」
「いりません」
怒気の孕んだ声で遮って、令嬢は深い嘆息を漏らした。
「……あまりこのようなことは申したくないのですが。私には貴方

のなさりようが理解できません。ニクラス様、今日がどういう日かおわかりでしょう」
「何かありましたか」
驚いた表情で目を瞬かせる。
「まさか、ご存じないのですか？　……ボノクスのベディクトゥという男が、あなたを午後の水陸史講座で、次の論客に名指しで指名しているのです」

東の大国ボノクスは、長らくツヴァイと水陸の覇を競う間柄にあった。ここ数年、その戦端は収まってはいるが、いずれ再び必ず剣を交えることはほとんど確定している相手である。
そのボノクスの将来を支える、有望な若手貴族達がツヴァイのひらいた大学に参加したのは意外ではあったが、むしろ当然と見る趣もあった。水陸中の国が集う場に、自称でも盟主を標榜する国の人間が参画しないのでは沽券に関わる。周辺国への根回しを欠かさなかった宰相ナイルの外交的手腕、その勝利といえた。
「ああ。いえ、その話なら聞いています」
「それなら、――いえ、では既に準備は終えられているのですね」
ほっと安堵の表情を見せる令嬢に、ニクラスは心の底から不思議そうに首を傾げた。
「準備。いったいなんの準備が必要なのです」
困惑したように令嬢は眉をたわめた。
「……するまでもない、ということですか？」
「いえ、そうではなく」
ニクラスは苦笑して言った。
「講座に出るつもりはありません」

「出ない……？　何故です」
「初回の講座は拝聴しましたが。既に読んだことのある著書をそのままなぞるだけの内容だったので、目新しいことはないのかなと思

いました」
「そうではありません！　講座の内容ではなく、ボノクスからの指名のことを言っているのです！」
　見るからに櫛通りのよさそうな金色の長髪を揺らしながら、令嬢は声をはりあげた。
「直接、自分が言われたわけではないですし」
「しかし、大学に通う全ての者が知っています！　先だっての議論を見ましたが、あの男、ベディクトゥは確かに弁が立ちます。我が国の者も既に三人、言いくるめられているのですよ。あの男がそのことについてなんと言っているかご存知ですか」
「知りませんが、まあ何を言っているかは想像できますね」
　この程度の人材しかいないのなら、ツヴァイなど恐れるにたらず――そういうところだろう。実際、連日の主役舞台に気をよくしたボノクスの論客の放言は似たようなものだった。そして、彼はそのあとに続けたのである。次回は、噂に聞く宰相ご子息の意見をお聞かせいただければありがたいですな。それとも、この時間頃は庭で寝転んでお休みのところでしょうか、と。
　風変わりな行動で有名な相手国の一人をひきあいに、ボノクス団の一同は大いに勝ち誇ってみせたという。それを聞いたツヴァイの貴族達は皆、歯を食いしばって屈辱に耐えたのだった。

　アルスタ家の若き令嬢はその場に居合わせておらず、後から事の顛末を聞いただけだったが、まるで目の前でその恥辱を受けてきた一人のように頬を高潮させて彼女は言った。
「それならば、なぜお受けにならないなどとおっしゃるのですか。勝てる見込みがないから逃げたのかと、そう声高に喧伝されてしまいます！」
「好きにさせればいいのでは」
　熱のない口調でニクラスは答えた。
「その相手に、我が国の者が敗北したということは事実なのですし。

ならば好きに言わせておいて、悔しく思う者が屈辱を晴らすべきでしょう」
もっともらしいことを言っているが、本音では何故、自分がそんな面倒くさいことをしなければならないのかと思っている。
「できるのなら、そうしています……！」
抑えきれない感情の迸りが語尾に散っていた。強く握り締められた令嬢の拳を見たニクラスは、自身の失言を悟った。
女性の立場ではいくら想いがあっても、論客の立場には立ち得ない。くだらないことではあるが、そうした風習がこの短期間のあいだに大学では成立してしまっているのだった。ツヴァイ一国の慣習の問題というよりは、多くの習いと考えがある各国の全てに配慮した結果だった。ツヴァイも決して女性の政治的立場を遇してはいないが、ボノクスなどではその傾向はさらに顕著にあった。
「……すみません。言葉が過ぎました」
彼とて国の誇りを思う気持ちを決して軽んじているわけではない。個人としての嗜好はどうあれ、それが必要なものであるという認識は持っていた。特に国の大事を担う人間がその国に誇りを持てないことは致命的だろう。他ならぬ彼だからこそ、その想いは確信として強かった。
「いえ。――お恥ずかしいところをお見せしました。非礼をお詫びいたします」
気を鎮めようと目を閉じた令嬢は、平静を装った声で訊ねた。
「では、講座には、参加されないのですね」
「ええ。その時間に訪ねようと考えていたところもありますので」
内心はともかく、ニクラスは口にする答えを迷わなかった。
「――わかりました」
沈んだ響きで呟き、瞼を開いた令嬢の目にその名残は残っていない。大した自制心だが、自分を見る眼差しにそれまでになかった感

情がまざっていることをニクラスは感じ取った。
まあ、仕方ないなと冷静に考える。勝手な期待は迷惑だが、勝手に失望するのは相手の自由だった。ニクラスとしては彼女個人を決して嫌いではなかったから、残念ではある。話をするのもこれが最後かもしれない。
恐らくこの場で別れれば、彼が思ったとおりに二度と両者の道は交わることはなかっただろう。その別離が訪れる前に、声がかかった。
「ああ、これは」

中庭に面した外廊下に数人の男達が姿を現している。
ツヴァイの様式とは違う、帯を巻いたようなゆるやかな服装の一団だった。見かけにも違いがある。先頭に立っているのは中でも長身で、やや線の細さのある若者だった。
令嬢が顔をしかめた。それを見たニクラスもその相手が誰であるか気づいていた。
集団は、廊下から中庭へと降りて二人へ近づいてきた。その足取りに隠そうともしない傲岸さが表れている。肩で風を切る態度は、連日の議論で勝ち続けていることで気を大きくしているのか、それとも生来のものと思われた。
「ニクラス様でいらっしゃいますね。はじめてお目にかかります、ベディクトゥ・ラグゼ・アシアセレと申します」
「ニクラス・クライストフです」
アシアセレ。表情を動かさず、ニクラスは相手の名乗った家名を頭の中に書き留めた。それはボノクスをまとめあげる四氏族の一つの名前だった。一個の国というよりは部族連合としての色合いが強いボノクスにおいて、その家には次代の王とも目される若き才人がいるという話は彼の耳まで届いている。
その次代の王との噂がある家名を名乗った人物は、ボノクス人に

しては掘りが浅い風貌を微笑ませて口を開いた。
「ニクラス様、本日は楽しみにしております」
「そういわれても、講座に出るなどと誰に言ったつもりもないのですが」
ニクラスは苦笑して言う。ベディクトゥは大仰に頭を振った。
「それはまた如何故のこと。お父上譲りのご見識を、ぜひお聞かせ頂ければと思っておりますのに」
優雅な仕草だが、嫌味さが鼻につく。声も不必要なまでに大きかった。周囲に聞かせようというのが見え透いていた。
「それともやはり、これから午睡のご予定でも？　ツヴァイ人の穏やかな気性は噂に聞いておりましたが、貴族の方々にまでそうした風習が根付いているとは実に素晴らしい。平和とは誠に貴ぶべきものですね」
「そう思います」
後ろのお付き連中が小馬鹿にした笑い声を上げるのを意に介さず、ニクラスは淡々と答えた。挑発をいなされた男が眉間をしかめて睨みつけるのを、涼しい顔で受け流す。

侮辱の言葉を吐かれたニクラスの隣で、むしろもう一人のほうが怒りを抑えた気配を漂わせていた。それに気づいた男が、口元に笑みを戻して話を向ける。
「失礼。お邪魔をするつもりはなかったのですが――」
後ろに立つ男がベディクトゥに耳打ちする。小さく目を見開いた男は、次の瞬間に表情を一変させていた。
「これはこれは。アルスタ家のご令嬢様でいらっしゃいましたか」
「……クリスティナと申します。お見知りおきを」
「こちらこそ。武名の誉れ高きアルスタ家のお方とお会いできて光栄です」
男は粘着質の笑みを浮かべていた。それまでは体面を被っていた悪意が表にせり出し、聞くものの不快感を催すほどになっている。

顔つきが変わったかのような男の変化を興味深く、ニクラスはことの推移を見守った。
「アルスタ家の方々には、戦場で幾度となく煮え湯を飲まされておりますのでね。次あらばと雪辱の機会を待ち望んでいる者も大勢います。いわば目標のようなものでしょうか。私の後ろにいる者の中にも、そうした者はいるのですよ」

令嬢は黙って頭を下げた。
アルスタ家は戦場働きを功としてきた一族である。ツヴァイと争ってきた国であれば、その剣にかかってきた者やその身内がいても不思議ではなかった。
「……しかし、女だてらに剣を振るとの噂は聞いておりましたが――ツヴァイではよほど武人にお困りの様子。他国ながら心配になってしまいますね」
令嬢の柳眉が逆立った。わずかに彼女の前に身体を移して、ニクラスはその激発を抑えた。
相手への痛撃を見てとったベディクトゥは満面の笑みをつくった。
「ああ、失礼いたしました。いえ、振るのは剣だけではなく、尻尾を振るのも心得ているご様子。安心いたしました。それではニクラス様、私達はこれで失礼いたします」
言いたいことだけを言って去っていく。機動力を生かして相手へ一撃を加え、反撃を受ける前に離脱という、ボノクスの得意とする軍法を体現したかのような話術だった。

ニクラスは背後を振り返った。全身を紅潮させて怒りに打ち震える令嬢に声をかけようとするが、その前に相手が口を開いていた。
「失礼しました」
「……いえ」
実直。いや、愚直というべきだろうか。
素直さは賞賛されるべき気質だが、これでは確かに社交場では生

きにくいことだろう。社交とは砂海の如く、迷う者も多ければ中には人の足をとって奈落へと引き込む底なしの悪意が潜む。どう贔屓目に見ても、目の前の令嬢がそれに向いた性格とは思えなかった。いや、恐らくは本人もそれをわかっていて、剣を握っているのだろうが。

ひどく冷徹な思考でニクラスはそう目の前の相手を判断した。客観的に相手を観察する以上、個人的な好き嫌いは全く別の話だった。

息を吐き、ニクラスは声をかけた。令嬢ではなく傍らの物陰に向かって告げる。

「ヨウ？」

「……は」

彼らから死角になった、建物の奥から静かな声が応えた。

「イシク先生に伝言を。工房をお邪魔するのが遅れますと」

「かしこまりました」

気配が遠ざかる。

問いかける表情で見る令嬢の視線と自然に目があわないよう、ニクラスは肩をすくめて言った。

「これから昼寝をするたびにあの不快な笑い声を聞かされるのは、ちょっと嫌ですから」

ボノクスの男達が連れ立って向かった建物に歩き始めるニクラスの後を、あわてて令嬢も追いかけた。

3

その日の水陸史の講座で議題として取り上げられたのは、過去にバーミリア水陸で広大な版図を築いたガヘルゼン王国の凋落を決定付けたとされる事柄についてであった。

この惑星においては、争いの多くが水の奪い合いに端を発する。国が成立する以前から、そしてその後もそれは変わらなかった。水陸という生息可能圏内で気まぐれに沸き、枯れる数多の水場を巡り、過去に流されてきた血の総量はあるいはそこに湧出する水と量、そのものであるかもしれなかった。

記録にはっきりと残る中で、最も古くバーミリア水陸における国家的な在り方の始まりとされるのは、ハペウス集合郡と呼ばれる。これは水場を転々としながら生きる、いわゆる部族的な人々が集まって成立した組織体であり、ツヴァイ帝国で国教として信仰されるのを中心に、水陸各地で強い影響力を持つ水天教が生まれたのもこの時代の頃だった。

その後、ハペウス集合郡は拡大と内乱、やがて衰退して各地に有力者が台頭する。その中で中央大水源を征した者の名をガヘルといい、その者が興した国をガヘルゼンという。彼は古に伝わる伝説から自らの国をガヘルゼン王国とし、自らをその王と自称した。バーミリア史において、王という呼称が正式なものとして用いられたのはこれが始めてである。物語として伝わるものならば、これ以前にも東征伝説で名高いガナ王の名などがあった。つまり神話に倣って王権を認めさせたのだった。

中央大水源の豊富で安定した水量を背景にしたガヘルゼンは、その一事をもって他を圧倒した。

後にツヴァイやその他の国で見られることになる、確かな水源を

確保してそこに留まり、他に遠征して勢力を広げるという支配姿勢はガヘルゼンに通じる。人が水場を点々として砂に逐われることを克服したかのような、それは大きな転換であった。

その後、バーミリア水陸の西方に全く異なる水陸文化があることが判明し、両者は結局のところ戦火をまじえることになる。ガヘルゼンはその主導的な立場にたったが、戦争は互いの水陸の経路にあった中陸の枯渇、そこにあった街の消滅という悲惨な形で幕を閉じ、関わった全ての国あるいはそれに準ずる組織に疲弊と痛みだけを残した。この戦争で、国家としての水や物、人といった成果はほとんど皆無だった。

特にガヘルゼンへ与えた負担は深刻だったが、さらにそこに東方からの侵略が続いた。

遊牧騎馬民族バハム。ガヘルゼンを襲った集団が、疲弊していたとはいえ精強なガヘルゼンを打ち破った理由はその騎馬の運用にある。ガヘルゼンにも騎馬はあったが、あくまで補助的な役回りに徹していた。彼らにとっては、あくまで歩兵による戦列前進が戦術の根幹にあった。隊列を組み号令一下、正面から剣をあわせて押し勝つことが戦であると信じていた。

一方のバハムは軽装で、騎馬と弓を用いる戦術をとった。

密集している為に速やかな陣形の変更に遅れをとり、騎馬戦力も歩兵にあわせて鈍重な装備だったガヘルゼンは、軽妙な遊牧兵の動きに思うままに翻弄された。相手には槍と槍を突き合わせるつもりさえなかった。距離をとり、弓矢で射掛ける。後方に回り込み、戸惑う陣形の横を撫で切るように走りぬけることを繰り返した。

彼らとの戦いにおいて、ガヘルゼンは常に守勢に回らざるを得なかった。やがて業を煮やし、突出した騎馬兵が全滅した段階になって、ついに士気が崩壊した。崩れる砂山の如く、ガヘルゼン兵は散

り散りに逃げ惑った。

遊牧民族ババムはそのままガヘルゼンの勢力内を荒らしまわり、財や人を略奪して去った。大いに味をしめた彼らは以後、度々ガヘルゼンへの襲撃と収奪を繰り返すことになる。

やがてガヘルゼンが衰退し、滅んだ一因は確実に彼らの存在にあった。その騎馬を用いた機動戦術が与えた影響も計り知れない。再び戦乱の時代に突入した水陸において、長き戦いの後に中央水源を手にしたある勢力にもそれは見て取れた。

彼らは東方の騎馬と自分達の騎馬の違い（運用方法以前に、品種として大きな違いがあった）を研究し、独自の戦術としてそれを昇華させた。ガヘルゼンから続く戦列前進戦術に、機動力を加えた装甲騎兵を主軸として水陸に覇を唱えたその勢力こそが現在のツヴァイ帝国である。

一方、東の騎馬遊牧民族達も、自分達の根城近くにあるその他の集団との争いを経て集合と分裂を繰り返し、やがて一大勢力となった。各地の有力者が協力して国家の体を成す国の名をボノクスという。両者の因縁は、直接の血が続くものではないにせよ、生き方や価値観の異なる者同士が古くから連綿として織り成すものでもあるのだった。

その両国に属する二人が論客に立ち、ガヘルゼン王国を襲撃して以降の衰退のきっかけを作った騎馬民族ババムの襲来について論を戦わせる。普段は軍事や討論に興味のないものでも心惹かれずにはいられない、これは催しだった。しかも論客の一人は最近の活躍で弁舌の巧みさを周囲に知らしめているボノクスのベディクトゥ・ラグゼ・アシアセレ、相手に立つのはあのニクラス・クライストフである。

講座の開かれる大教室には開始前から多くの人が溢れ、立ち見の者まで出る始末だった。普段は同じ時間に茶会を開いているような

子女達の一団も陣取っている。中には勝負を賭け事の種にしている連中もいるらしく、あたりには異様な雰囲気があった。

騎馬遊牧民族バハムのガヘルゼン襲撃についての討論。学生達の出自と感情を考えれば、たかが講座とはいえあまりに思慮の浅い選択だが、仕掛けた講師はそ知らぬ顔で場に高まる熱気を眺めていた。もちろん、このような事態が予想できずにいるはずがない。講座の人気の為か、他に意図があるのか。いずれにせよ客寄せに使われた形のニクラスには迷惑でしかなかった。

講師が立つ教壇を中心に半円に囲んで作られた室内で、階段状に長机が並んだ教室の中ほどに座ったニクラスの隣では、心配げな表情でアルスタ家令嬢が横顔を見つめている。自分が強く勧めたことではあったが、あまりの盛り上がりぶりに少なからず動揺を隠せないでいた。

午後の開始を告げる鐘楼の音が打ち鳴らされた。

注目の講座で、先陣を切ったのはベディクトゥである。騎馬民族バハムのガヘルゼン襲撃において、最も注目すべき点はどこにあるかという講師の問いかけに、彼は格調高い弁舌で答えた。

「それはやはりバハム勢の、騎馬兵を縦横無尽に駆け巡らせた戦術ではないかと。ガヘルゼン王国兵の精強は間違いなくその時代において水陸一でしたが、いかに鍛えた槍の穂先も体に届かなければ意味を成さず。馬と弓を用いた用兵術には、いかなガヘルゼンの剛兵といえど辛酸をなめずにいられませんでした」

出自からすれば当然のことではあるが、ベディクトゥのとった立場はバハムの優秀性を褒め称えるものだった。それと同時、ガヘルゼンを決して貶めようともしていない。何もガヘルゼンの後継を標榜するわけでもないが、ツヴァイにとってはそちらのほうがより近しい存在であった。ガヘルゼンを避難されれば当然、その心証は悪

くなる。相手への嘲弄が自らの論の優越を支えるものではないことを男は理解していた。
響き渡る声は低く深く、爽やかさがある。天性のものと、そうあろうと努力して得たものをどちらも兼ねそろえた語り手に対さなければならないニクラスは、その論調を聞いて普段の表情のまま変わらない。離れた位置に座った彼を得意げに見返し、ベディクトゥが続けた。

「新しい戦術。まさにこれに尽きます。当時のガヘルゼンにも騎兵はありました。しかしそれはあくまで歩兵に随伴する存在であり、単体で運用するものではなかった。東と中央で用いられていた馬種の違いももちろんあるでしょうが、それ以前にそうした意識がなかったことが問題でしょう。事実、自分達の地域にある馬の特性を生かし、精強な騎馬兵をもってこの水陸に覇を唱えていらっしゃるのが、ツヴァイ帝国騎士兵の勇猛な歴々なのですから」
またしても敵国を相手に持ち上げてみせるような台詞だが、耳にしたツヴァイ出身者の反応は微妙だった。ベディクトゥの言い分は、つまりツヴァイの誇る用兵術も、所詮は遊牧騎馬民族――その正当な後継であるボノクスの模倣に過ぎないのだともとれるからであった。
わかる者にだけわかる毒をまぜたベディクトゥからの挑発を受け、なおニクラスは沈黙を保っている。反論しようとする気がないのか、あるいは目を開けたまま眠ってでもいるのか。他国の者ばかりか自国の者までもが侮蔑と失望の視線を向ける中、堪えかねたように別の者が挙手をして立った。
ツヴァイの貴族某と名乗ったその若者は、遊牧騎馬民族の機動迂回を卑怯な行いであると糾弾した。彼の思考は遥かガヘルゼンの時代から全く進化していないようだった。
ベディクトゥは薄く笑った。

「これは驚く。自らの得意な手法をとることのどこが卑劣になるのでしょう。戦術とはつまり、自らを易く勝利させるものであるはず。まさか相手に自分のやり方につきあえというのが、ツヴァイの教えですか。自らを相手にあわすならともかく、相手に自らの立場を強要するというのは、少々、考え違いをしておられるのではありませんか」

痛烈な返しだった。駁論して語る振る舞いには、戦場で一騎討ちするかのような堂々とした華がある。反問者は抗論の一句もなく立ち尽くした。

ベディクトゥがぐるりと教室の座をみまわした。議論の一方を務めようとする者はない。このあたりが限界か、とニクラスは見切りをつけた。できればもう一人、二人つっかかってくれる誰かがほしかったが、白けきった空気ではそれは望めそうになかった。

静かな挙手に周囲が波立った。

上方の席でつまらなそうに片手を挙げるニクラスの姿を眺め、ベディクトゥが意を得たりと口元が歪めた。教壇の講師を見る。講師は厳かな面持ちでニクラスに頷いた。

講師からの指名を受けたニクラスは立ちあがり、淡々とした口調で告げた。

「騎馬兵の優秀さについてはお言葉のとおり。しかしバハムのガヘルゼン襲撃について最も注目すべき点、というのが今日の論点であるなら、一個の戦術を語るのは枝葉ではないでしょうか」

「ほう。それでは、ニクラス殿は本題をなんとお心得に？」

おもしろがるようなベディクトゥの問いに、ニクラスは言った。

「馬です」

それを聞いたベディクトゥとその取り巻きの周辺から失笑が起こった。

「なるほど。しかし、私もそれをお話していたつもりなのですが……」
「馬とは戦争の道具だけの存在ではありません」
揶揄の言葉をかわす。
「それは生活そのものです。軍事が先に立つ勢力など古今東西にありえない。人がいて、生活があり、そこから派生するものが軍であるのなら、注目すべきはその根幹にあるはず」
ニクラスはベディクトゥを見た。相手に口を挟もうとする様子は見てとれなかった。余裕のある微笑を浮かべたまま、眼差しの輝きがやや鋭い。
「彼らの特徴である大きく柔軟な騎馬運用、その為に彼らは軽装騎兵だったが、当然それは大きな問題を内包します。水と糧秣なくして人馬は生きることはできない。彼らはそれを後ろではなく、前方――敵に求めた。彼らの長大な行軍は実は、そうしなければ彼らが生きることができなかったということでもある」
一拍をとり、ニクラスは周囲に語りかける気配に切り替えた。
「だから、彼らは集落を襲って収奪した。武器や財宝もだが、それ以上に彼らは水や食料を求めていた。収奪するために、収奪していた」
唇をなめて水気で潤わせる。ニクラスは言った。
「それが彼らの限界でした」

聴衆がどよめいた。ニクラスの放ったのは、ガヘルゼンを打ち破った遊牧民を否定する台詞とも取れたから当然の反応と言えた。
「……これはまた大きく出られたものだ。その深慮についてぜひともお聞かせくださいますか？」
不快げに眉をしかめるベディクトゥと正対に立ち、ニクラスは続ける。
「歴史的な事実として、バハム遊牧兵がガヘルゼン歩兵を打ち倒した。これは確か。しかしもう一つ、忘れてはならないことがありま

す。それは、打ち破った彼らが、ここ、中央大水源を征服しなかったこと」
ベディクトゥの表情から笑みが消えた。
「なぜ征服できなかったのか。彼らが少数であったからというのもあるが、それ以上に問題だったのが、輸送という概念や中継拠点というものを持たなかった彼らの拠点と大水源との間の距離です。そこには中継拠点が存在しなかった。いくら豊富な水源を占領したところで、東から人が移ってこれなければ意味がない。彼らには、襲うことしかできなかったのです。しなかったのではなく」
「征服する能力がなかったと？」
相手の舌鋒、その矛先を正確に見定める口調でベディクトゥが訊ねる。
「彼らは略奪者であって征服者ではなかった。だからこそ、今日の水陸の状況があるのでしょう」
押し黙るベディクトゥから再び周囲へと意識を戻して、ニクラスはさらに言葉を重ねた。
「つまり彼らはどこまでも点だった。目標を定め、襲い、次へと向かう。そこには中間というものがない。彼らの前には敵が、彼らの後ろには収奪された集落だけが残る。彼らが去ったあと、そこにはまた人が戻り、物が集まる。その繰り返しに過ぎません」

ニクラスが口を閉じると、室内に打ったような静けさが降りた。
誰もが彼の能弁さに驚きを隠せないでいた。式典も途中で抜け出して中庭で横になっていたあのニクラス・クライストフが、まさか口を開けばこうまで口が達者であったとは。その驚きは、彼の隣に座るアルスタ家の令嬢とて同様だった。
「――なるほど。素晴らしいご見識だ」
ベディクトゥが頷いた。やや苦味のある表情になっていた。
討論の担い手である以上、彼が沈黙することはつまり相手の正当性を認めたことになる。先日の講座で目の前の相手を指名したのは

彼だったから、早々ひくことができるはずがなかった。
「人と生活、そして馬。一個の戦場の勝敗ではなく、その背景を見よということですね。バハムの遊牧民が中央大水源を占拠しなかった理由も、大変興味深い。しかしながら――」
息を吐き、続ける。
「いささか見方に偏りがあるようにも思えます。バハムに中央大水源の占拠が可能であったか否かは、彼らの拠点とする周辺状況に要因があったと考えます。もし彼らにその意思があったらなら。あるいは、それが可能な状況であったなら、拠点ごと移動することもありえたのでは？　それを考えず、ただ能力の有無へと結論を急ぐのは、少しばかり論理が飛躍しているのではありませんか」

「その通り。遊牧民とは、確たる拠点をもたずに移動することが本来。それはそのまま、この惑星での人の生き方でもありました」
あっさりとニクラスは同意してみせた。
「一個の水源にこもる、ということがまずありえなかった。基水源を手にしたごく少数の勢力だけがそれを成しえた」
「しかし、その結果が鈍重な歩兵運用。そして遊牧民との戦での大敗に繋がったのなら、それはむしろ悪しき習性では？　ニクラス様は先ほどおっしゃられました。生活の延長に軍があるのだと」
ベディクトゥがやりかえす。議論の焦点が二つにわかれていることに気づいていないのか、あるいは気づかない振りをしているだけなのか、ニクラスには判断がつかなかった。しかし、どちらでもいいことだった。相手は、釣り餌にひっかかってくれたのだから。
「そう、軍とは人と生活の延長にあります。遊牧民は攻め、勝ち、しかし征服できなかった。ガヘルゼンは守り、負け、しかし征服させなかった」
「まさか、負けても在り続けることができればそれでよいと、そうおっしゃるのではないでしょうね」
「いけませんか？　……この場合は少し違いますが。負けて学ぶこ

とは多い、というべきですね」
「騎馬兵の有用性をですか」
「それもあります。しかしそれ以上に、水源を手にしている者が勝つということを」
ベディクトゥが奇妙に顔を歪めた。そんなことは、今さら語るまでもない常識以前のことでしかない。
ニクラスは続けた。

「ガヘルゼン衰退の後、覇権を争った各勢力はそれぞれ遊牧民の騎兵運用を取り入れましたが、しかし歩兵を捨てたわけではない。大水源を得て、さらにそれを独自のものへと進化させていった。一つが装甲騎兵。そしてもう一つが、補給」
「補給？」
「彼らは後方の備えを重視しました。それが点であったバハムとの大きな違いです。つまり、補給線」
「それはおかしい。砂海にあって安定した水場というものは存在しえない。いかに基水源と噂される大水源であろうと、それがどこにでもあるわけでは」
そこではっと言葉を切ったベディクトゥに、ニクラスは言った。
「水源はありません。しかし、伸ばすことはできる。恐らくここにおられる方も多くがそれを利用してヴァルガードにいらっしゃったでしょう。南方のトマスを通り、そこから水陸各地の水源へと伸びた――河川。そして、水路です」
歯軋りするように睨む相手を平然と見返し、
「点ではなく線。軍を進行させるのに確かな後方をつくる。補給線、領水線という線の在り方が、ツヴァイの特色です。そして、それをもたらした大きな要因にバハム遊牧民の存在があったのは疑いようがありません。点として動く彼らに対抗するために、今までの歩兵を生かし、さらに騎兵を活用する。そうしたものを背景に生まれたのが河川であるならば、バハム遊牧民のガヘルゼン襲撃でもっとも

注目するべきなのは、その分岐点にあるのではないかと思います」
おお、とツヴァイ出自の者達が顔色を輝かせた。論説の細部まで理解しているかはともかく、バハムの真似事ではない、ツヴァイ独自のものであるというところが彼らの琴線を振るわせていた。
一方、ボノクスの一団は不快そうに顔をしかめている。沈黙するベディクトゥの取り巻きがなにか言いかけるのを、ベディクトゥが制止した。
「……戦術ではなく、戦略、さらに生活まで見る。ニクラス様、大変勉強になりました」
着席する。

室内のあちこちからため息をつく音が漏れた。
討論の終了を告げる台詞に、ニクラスは視線を教師に向ける。面白がっている眼差しを冷ややかに見返してから、自分も着席した。
「両者、異議ある意見をありがとう。いくつか面白い論点があった、それらについて一つずつ話していくことにしよう。まずはじめに――」
生徒達のやりとりを黙って聞いていた教師が解説を始める。

しばらく室内は騒然として落ち着かなかった。その中に埋もれがちな教師の言葉にニクラスは耳を傾ける。四方から自分に向けられる様々な視線には当然、彼は気づいていた。

講義の時間が終わると、ニクラスはすぐに席を立って教室の外に出た。
「どちらへ行かれるのですか？」
廊下に出たところで声がかかる。アルスタ家令嬢の声だった。ニクラスは足を止めないまま答えた。
「先約がありましたので。工房地区まで」

「……お邪魔でなければ、私もご一緒してよろしいでしょうか」
少し思案してからニクラスは頷く。貴族の令嬢が見て楽しめるものではないだろうと思ったが、そうとも言えないかもしれない。
「ありがとうございます」
「少し急ぎます」
「はい」

足を早めながら、隣に立った令嬢が言った。
「ありがとうございました」
「何か？」
「講座に参加してくださったことです。卑しい性分のようで恥ずかしくありますが、ニクラス様が勝たれて気が晴れました」
「別に、勝ってなんかいません」
ニクラスは苦笑した。
「討論は相手と論を交わすことで、勝敗云々ではありません。さっきのは相手が自分で自分の首を絞めただけですよ。侮ってくれていたのでしょうね。それに、とても優秀な人物だと思いました。引き際がよかった」
劣勢を知ると、すぐにそれ以上無駄な言葉を続けなかった。そうした行いは誰にでも出来るものではない。
そもそもが解釈の幅のある教師の問いかけに対して、戦術という小さな型にはめて論じたのがベディクトゥの失態だった。それに論点の異なる説を返してみせたのがニクラスであり、バディクトゥはその内容を非難することで優位に立とうとしたのが間違いであり、騎馬運用の優位性に拘って罠にかかったのが致命的だった。しかし、そこでさらに頭に血をのぼらせず、自らを抑えてみせたのだから、十分に冷静で優秀だと言える。
「しかし、少なくとも劣ってはいらっしゃらなかった」
苦笑のままニクラスは答えない。しばらくの沈黙の後、令嬢が言

った。
「――優秀だと見られるのがお嫌なのですか」
「別にそういうわけではないのですが」
ニクラスは肩をすくめた。
「厄介事には、あまり関わりたくないと思っています」
「では。それでも先の講座に出られたのは、ご自身が快適に昼寝をする為に？」
「そうです」
それ以上の答えが彼の口から出ることはないとわかった表情で、令嬢が微笑んだ。
「貴方は変わった方だ」
「よく言われます。失礼を承知の上で申し上げれば、貴女もそう思えます。クリスティナ様」
「クリスとお呼びください。親しい者からは、そう呼ばれています」

歩きながら、ニクラスは探るような視線で相手を見る。
「わたしが厄介事を嫌うのは、どうしても厄介事がついてまわるからです。ご迷惑をかけることも多くありますが」
「かまいません。私には恩義があります。ご迷惑ですか？」
「迷惑ですね」
はっきりとニクラスは言った。
「父がやったことは父のことです。わたしには関係ありません。さっきの講座は昼寝のためにしか出ていません。そんなもので迷惑をかけてしまっては、それこそ気楽に昼寝が楽しめない」
クリスが足を止めた。
「でしたら言い換えます。私は、貴方に興味があります。ニクラス・クライストフ様。それでもご迷惑か」
ニクラスは足を止めた。クリスを見返す。真っ直ぐな眼差しが彼を見つめていた。
たっぷりと砂が流れるほどの時間が経ち、ニクラスは息を吐いた。

どのような言葉を用いても、目の前の相手の意思を変えさせることはできそうになかった。

「――やはり、貴女こそ変わっていらっしゃる。クリスティナ様」

仕方なく答える。令嬢が再び微笑んだ。

彼のような人間から見ても、ひどく魅力的に思える笑みだった。

4

工房は大学地区に隣接して設けられている。その敷地面積は広く、郊外よりにある大学からそのまま帝都の外までが工房地区に指定されていた。

それは大学に招かれた教師が研究や実験を行いやすい為で、一般的な部門のものであれば学生達に開放されていたが、当然、国家の大事に関わる箇所は立ち入り禁止とされていた。

ニクラスはクリスと共にその一画、厳しい面立ちの衛兵が守る場所へと足を向けた。途中、何度も呼び止められる度に身元の確認を受ける。身書にない連れまで通ることが許されたのは、相手が彼の名前に遠慮したのか、それとも危機意識が欠如しているのか微妙だった。駄目だと言われれば、相手に使いをやって迎えに来てもらわなければならないところだったから、いずれにしてもこの場合はありがたくはあった。

工房地区は人と物、双方の熱にあふれていたが、それは部外者の立ち入りを禁じる地区に入っても変わらなかった。さすがに人の数は違うが、至るところで工匠がそれぞれ手がけるものを見る目には、その差を補って余るほどの熱気がこもっている。自らの才とそれを十全に発揮できる環境に魅入られた者の眼差しだった。

職工は貴賤の身の者の仕事とされており、さらにそれが火を扱う工匠となると（宗教観的な問題から）女性がいるだけで非難を受けかねない。周囲には女性の影一つなかったが、クリスは物怖じしなかった。

彼女も戦場で名を挙げた武家の一族である。そうした物への興味はあった。ニクラスが訊ねた。

「帝都の工房をご覧になったことは？」

「ありません。一度、訪れてみたいと思っていました」
彼女の一族が治める地元は鍛冶業を得意としている。
「それはよかった。このあたりはもっぱら武器兵器ですが、一般工房の方もご覧になってみると面白いかと思います。何をやっているかはわからなくても、見ているだけで面白い」

わざわざ工房に出向くような貴族は少ない。アルスタ家のように戦と近しい家柄の者であればその限りではないが、目の前の男はそうした立場でもなかった。隣を歩く男を見やり、クリスは率直な感想を述べた。
「最初にお会いした時にも思いました。変わったご趣味ですね」
ニクラスは笑って答えた。
「そうですね。あまりご婦人の好まれるものでは――失礼。クリスティナ様には、興味をお持ちになられるものかもしれません。わたしもまだ直接は目にしていないのですが」
「お気になさらず。楽しみです。遠いのですか？」
女の身で剣を振ることに彼女は劣等感を抱いていない。ニクラスは小さな目礼で非礼を詫び、青天の一方を指した。
「あそこです」
石造りの建造物の中央を貫いた筒から煤煙が濃く立ち昇っている。

「おお、ニクラス君。遅かったな」
建物に入ると、むっとした熱気が実際に身体を押し返す程の圧力で二人を包み込んだ。小間働きの使いに連絡を頼み、奥から現れた小柄な老人が煤に汚れた顔でにこやかにやってくる。
「イシク先生。来るのが遅くなってすみません」
「時間なぞどうでもいいさ。どうせしばらくはここに住み込みだ」
呵々と笑い、男はニクラスの隣に目を向けた。
「はて。これはまたなんとも麗しいご婦人だが、同伴する場所を間

違えてはおらんか？」
　ニクラスが答える前に、クリスが前に進み出ていた。
「クリスティナ・アルスタと申します」
「大学の生徒かね？　ようこそ、煤と熱の窟へ。この男、見かけはこんなだが存外に手癖が悪い。くれぐれも外面に騙されんようにしたまえよ」
　クリスは返答に困って隣の男を見た。ニクラスがため息をついた。
「先生。彼女はアルスタ家のご息女です。有名な武門の家のお方ですよ」
「ほほう」
　目を細める。元々が薄い眼差しがほとんど線のような鋭さになった。
「それは面白い。グンジンの意見というのも貴重だからな」
　発音に含みがある。クリスは小さく眉を動かすだけでそれを聞き流した。

「それで、炉の調子は如何ですか。外から煙が見えましたが」
　ニクラスが訊ねると、男は相好を崩した。
「とても素晴らしい。今はまだ試しといったところだがね。さ、来たまえ。案内しよう」
　手に入れたばかりの玩具を自慢したくて仕方がないといった様子で、イシクは二人を奥へと案内した。
　奥に進むにつれ息苦しさがさらに増していく。ニクラスが襟元を緩めた。
「……風通りに気をつけているとはいえ、凄い暑さですね」
「不安定な要素はできるだけ潰しておかんとな。急な強風に煽られて火事なぞなっては目もあてられん。なに、人間というのはどうして我慢強い生き物だ。少しばかりの不便など慣れてしまう。それが嫌なら、使う側が工夫すればいいのだよ」
　イシクはほとんど布一枚といった自分の格好を誇示するように示

してみせた。

「お身体を自愛ください。先生に倒れられてしまっては、父が卒倒します」

「それはいいことを聞いたな。一度、あの面の皮がどう様変わりするか見てみたいものだ」

面の皮でいえばどちらも似たようなものだろうと思ったが、ニクラスは沈黙で応じた。思わず体力の消耗を心配してしまう程に暑かった。立っているだけで体力を消耗してしまい、喋っているうちに脱水症状を起こしかねない。隣を歩く人物の様子を確かめた。

「クリスティナ様、お加減は」

「大丈夫です。それから、私のことはクリスと」

平然と答えるクリスの額から汗が流れた。

ニクラスは返事をしない。

クリスが彼を見た。男の口元には困ったような笑みが浮かんでいる。

「さあ、ついたぞ」

振り返ったイシクの後ろにそびえる物を見上げ、二人はしばし言葉を失った。

そこでは巨大な炉が火を噴いていた。

窯といい、炉という。煉瓦を積み上げられたそこにくべられた大釜から火の粉が飛び、下で忙しく作業する男達の姿を赤く染めていた。御伽噺に登場する火の獣、その猛獣の吐く息の如く熱風が吹きつけ、その一息毎に室内の温度が上昇していくようだった。

「鋳炉」

熱風が喉を枯らし、乾いた声でクリスは呟いた。

この惑星に登場した原始的な鍛冶技術は、ハペウス集合郡の時代からすでに記録が残っている。ガヘルゼン隆盛の頃には武具や農具

に至るまで一般家庭へと普及していたが、数質ともに決して高度なものではなかった。
ガヘルゼン王国では青銅がもっぱら用いられていた。純銅ではなく錫を含んだその鉱物は、低温で融点を迎えることに加え、加工後には武器道具に必要な硬度も併せ持っていた。
今現在、ツヴァイでは青銅に加えて鉄器が利用されている。鉄は青銅より高い融点が必要だが、それなりの硬度を持ち、なによりその材料となる鉄鉱石がツヴァイ周辺では豊富に得ることが出来たからであった。ガヘルゼンの頃と違い、青銅が取れなくなっているのだった。

クリスの言葉を聞いたイシクが顎をなでつつ、頬を緩めた。
「ほう。知っているかね」
「生まれの方が土地柄、そういったものを得意としていますので。鍛冶炉。しかし、これほどまでに大きなものは、見たことが……」
「そうだろう。間違いなく、水陸でも一番のものだよ」
自分が褒められたような笑みでイシクは頷く。
「しかしだ、重要なのは大きさではない。大事なのは大きさではなく、熱さだ」
男の言葉に応えるように、大釜から炎が舌を伸ばした。
「確かに――すごい勢いですが。ふいごではないのですか？」
「いや、そうだとも。ただし、人の力ではない」
「人ではない？　では、いったいどうやって」

物を強く燃やすのには空気が必要になる。その為、炉をくべる時には必ずそれを行う人間が必要だった。
「興味があるなら、裏に案内しよう」
嬉しそうにイシクが言った。一人で質問を重ねていた不作法に気づき、クリスはあわてて身を引いた。
「失礼しました。つい、気になってしまって」

イシクは莞爾として笑った。
「なに、知欲は尊ぶべきだよ。それに何を聞いても澄まし顔をされるよりは、君のように素直な反応を見せてくれるほうがよほど聞かせ甲斐がある」
「こういう顔で、そういう性格なんです」
あてつけの言葉に苦笑するニクラスへ、イシクはふんと鼻を鳴らした。
「老人の話には大仰にでも反応してみせるというのが若い者の務めだよ。さあ、クリス君といったかね。こっちにきたまえ」

一旦外にでて建物の裏に回ると、すぐそこに川が流れていた。ヴァルガードの豊富な水源は、街の至るところで泉や井戸に活用されている。確かに火を扱うなら水場の近くであるべきだろう、とクリスが考えたところで、奇妙なものが彼女の視界に入った。
川の水面を大きな車輪が転がっていた。
馬惹きの戦車や、荷車につけるそれとは比べ物にならない。大人に倍するほどの巨大なそれが、ゆっくりとその場で回り続けていた。車輪が先に進まないのは、車の軸が固定されているからだ、と気づき、それからその車輪が建物に隣接して設置されているという事実に目がいった。
「これは、いったい――」
「水車という。水で車輪をまわしておる」
「水車。これが？」
傍に立ち、クリスはその奇怪な代物を凝視した。見れば、車輪は下の部分だけが水面に潜るように調整されている。車輪には間隔をあけて木板が貼られていて、それが水に浸かると、そこに水を受けて押される。押し出された木板が車輪をまわし、水面から上がったところで次の木板が水面に浸かる。その連続した動作がこの大きな車輪を回している。

「車輪をまわす力は、向こうへ繋がっていてな。そこにある大きなふいごを、上下して吹かせているわけだ。それで人が動かすのよりはるかに多くの空気が、安定して送れておる。まあ、水力ふいご、といったところか」
嬉々とした説明を受けながら、クリスは言葉もない。水車という言葉を聞いたことはあったが、実物を見るのははじめてだった。
この時代、動力水車は普及していない。その理由は貴重な水を使って車輪を回すという発想自体が受け入れられなかったからだった。
何故か。そもそもが、水車を回す為の水量が滅多に得られない。この惑星において、水とはそうも手軽に使えるものではなかった。それは貴重で、時に崇められるほどのものでもあった。豊富な水源を持つヴァルガード水源、その膝元ならではだった。

「水の力、水流というのは凄まじい。同じことを人間がやろうとすれば、大人が数人がかりでやらなければならんだろう。しかもそれを絶えずやるとなれば、とても人の手にできることではな。炉には安定した火力が必要だ。それに」
再び建物の中へと向かいながら、イシクは説明を続けた。
「何より温度が違う。空気を送れば送るほど、炉は高温になる。もちろん限界はあるがね」
「つまり、それほどの高温が必要とされるものが、あの炉の中にはあるのですか？」
クリスが告げたのは当然の疑問だった。それを待ち望んでいたようにイシクは唇の両端を吊り上げて、言った。
「いいや。君も知っているものだよ。鉄だ」
「鉄、ですか」
心情が声に乗らないようクリスは気をつけたが、隠し切れなかった。肩透かしをくらった気分でいる。
鉄鍛冶であれば既に一般的な技術である。わざわざ水車を回してまでやらなければならないことではないと思えたのだが、男はその

彼女の反応を見越したように笑みを崩さなかった。
「鉄というのは、魔法の鉱物なのだよ」
「魔法？」
「君は軍人の生まれといったな。では、南の戦争で連中が使っているものが何で出来ているか、知っているかね」
「青銅器です」
クリスは即答した。
「そう、南には青銅が多く流れる。しかも連中、それがやたら質がいい」
クリスは頷いた。東のボノクスと同じく、長く小競り合いが続く南方でツヴァイが優勢に出られないのは、敵方の豊富で優秀な武器防具が要因の一つとされている。
「それでは昔、バーミリア水陸にやってきた西方の者達が使っていた物が何かは？」
クリスは首をふった。
「鉄なのだ。しかも、相当に質のよい鉄器だったとされている」
イシクは答えた。
「青銅よりもですか？」
こと武器に関する限り、青銅と鉄では青銅のほうが優れているとされていた。鉄は錆びやすく、硬度の面でも劣る。ツヴァイで青銅が使われていないのは、それが手に入りにくいからであった。バーミリア中央の青銅はガヘルゼンの時代に取り尽くされたといわれている。
「まあ、実際に試したわけでもないがね。隕鉄というものを知っているかね。空から降ってきた鉄だ。滅多にお目にかかれないが、ひどく硬い。鉄にはそれだけの可能性があるのだよ」
「やはり、元々の質の良さが関係しているのでしょうか」
「それもあるだろうな。しかし、それ以上に面白いものがあるのだ」

イシクは鷹揚に頷き、ふと目を瞬かせた。
「そうだな。少し待っていたまえ」
嬉々とした足取りで奥へと去っていく男を見送り、クリスはニクラスを振り返った。
「でしゃばりすぎ、でしょうか。申し訳ありません」
ニクラスは緩やかに首を振った。彼を見る女性の背景に、赤い火が立ち昇っている。火が似合う人だな、と思ったが口にはしなかった。褒め言葉になるか微妙だった。
「お気にめされたならよかった、イシク先生も嬉しそうですし」
「鍛冶師の方なのですか」
「いえ。先生は学者です。地質の方を専門にされています」
「地質……？」
聞きなれない言葉に、クリスが質問を重ねようとしたところにイシクが戻ってきた。手にいくつもの鉱石を抱えている。男は二人を招き、床にそれらを並べた。

「これは、鉄ですね」
並べられた一つを指してクリスは言った。男は頷いた。
「いかにも。一般的にそう呼ばれるものだ。砕いた鉄石を熱し、出来上がった半生の塊を加工して作られる。しかし、他のものも見てみたまえ。それも鉄だよ。ここにあるものは全てそうだ」
「全て？　これが全てですか」
にわかには信じられない思いでクリスはそれらへと目をやった。
並べられたものには確かに鉄に似通ったものもあるが、色合いから外観、触った心地までまるで異なるものも多く含まれていた。中には、職人の手によって繊細に模様が飾られた刀身のようなものさえある。
「ああ、それがさっき言っていた隕鉄だ。不思議な模様だろう。人の手によるものではないのだ。この状態で見つけ出された」
「これが、このままにですか？」

誰かが丹精を込め、意匠をこらしたとしか思えない直線の模様に驚き、クリスはその表面をなぞった。
「そう。見たとおり、短剣として扱われていたようだがね。お守りのようなものでもあったらしい。まあ気持ちはわかる。とても古い部族に伝わっていたらしいが、それが錆びもしないのだから大したものじゃないか」
「これが鉄。では、こちらも」
クリスが指したのは、隕鉄のそれとはまた風味の違う模様をもったものだった。
「蛮族達の武器に用いられていたものだ。儂の宝物だ」
「これが――」
やはり短剣に用いられていたような刀身だが、やや長さがある。一般的な鉄より白けていることもだが、なにより目立つのはそこに浮かび上がる模様だった。水面のようだ、とクリスは思った。全体にびっしりと波目が続いている。直線を組み合わせたさきほどのものと異なり、曲線を重ねあわせたそれは、何かの禍しさを感じさせる模様だった。
「その二つは特に模様の在り方が際立っているが、色の違いというのも見逃せない。それ以外のものも見てくれたまえ。全て違っているだろう？」
「確かに。違うものにしか見えません」
二つ以外にも黒っぽいものもあり、青みの深いものもあった。手触りまで異なっているのは、研磨次第でどうなるかはわからなかったが。
「ちょうど手にとってくれた二つはまあ例外としよう。他のものはツヴァイの各地で作られた鉄だ。成功もあるし、失敗もある。炉で作られるのがとても一律ではないということは知っているだろう」
クリスは頷いた。炉を利用して得られるものには青銅しかり、鉄しかり、多くの不出来物が含まれている。

「違うものが作られる理由は複数考えられるな。炉の構造が違う。出来が悪い。火が違う。温度が違う。時間が違う。材料が違う。燃料が違う。しかし同時に、それだけ変化を起こし得る存在でもあるということだ、鉄が。鉄をはじめとする、金属の特徴だがね」
クリスにもようやく、男の語る趣旨が理解できはじめていた。
模様のかたどられた二つを指し、クリスは訊ねた。
「つまり、これらを作り出すことが。この炉の目的なのですね」
「いかにも」
満面の笑みで男は首を頷かせた。
「空から降ってくるしかないものには手を伸ばせんが、同じ人間が作って使っているのなら、そう考えるべきだろう。連中、そうした模様のものを誰でも扱っていたようだからな。まさか全て隕鉄のような稀少物が材料というわけじゃないだろう。鉄より、青銅よりも硬い。鋼、と儂は呼んでおる。興味深いと思わんかね」
――鋼。
確かに、クリスは内心で感嘆の声を漏らした。
青銅に乏しいツヴァイでは、豊富な鉄資源を用いるしかない。しかしその強度は他国のものに遅れをとっている。それを強くできるというのなら、その功績は国家の大事に関わる。
「しかし……もしそれが、南の青銅器のように、元々の質の違いによるものであったのなら、どうされるのですか？　空から降るものでなくとも、沸き、流れるものも全く異なるのでは」
クリスは言った。もしそうなら、この炉も試みも全てが徒労になる。
「聞いてほしい質問ばかりしてくれる。嬉しい生徒だな、君は」
イシクがニクラスに確認をとる為の視線を送った。
「ここに連れてくるということは、かまわんのだろう？」
ニクラスは頷いた。
「はい。彼女は信頼できます」
イシクは顔をしかめた。

「そういうことを聞いているのではない。そうやってとぼけてみせるから可愛げがないと言うのだ。まあいい。儂もこのお嬢さんは気にいったからな」

イシクは二人をさらに奥へと誘った。

「クリスティナ君、だったかね。君の疑問はもっともだ。まあ儂も、なんのあてもなくこんな炉を作ってもらったわけではないのだよ。儂はもともとこの水陸の地質、つまり地面の下を研究している人間でな、庭先につくった自前の炉で石やら鉱石の変化を見ていただけだったのだ。それがなかなか面白くて、色々とやっているうちにこんなことに巻き込まれてしまったわけだが」

暗い廊下を抜けさらに奥、暗室に火を灯して男は机の引き出しから何かを取り出した。

「炉で出来るものを色々試しているうちに、奇妙な代物ができた。近くの鍛冶屋に頼んで形にしてもらったものが――これだ」

男は手に抱えていた鉄板の一つを机に置き、それに向かって手にもった短剣を突き立てた。

鈍い音を立てて、そこにあった鉄が割れた。

クリスは短剣を手渡された。刃先をみると、潰れたり零れている様子はない。岩のように厚くはないとはいえ、鉄を穿ってそのようなことができるとは――

「実は切れ味はさほどでもない。しかし、硬い。そしてこれは、なんというか……粘り気があるのだ。弾力。弾性とでも言えばいいのかもしれん。あきらかに今までの鉄とは異なる。模様などは浮き出ていないし、色といい、あの二つのものと同じとはいえんが、同じ系統のものではあると思う」

「これが、――鋼。なのですか？」

イシクはにやりと笑った。

「砂鋼（すなはがね）。そう儂は呼んでおる」

5

「砂の、鋼」
クリスは男から聞かされた単語を舌に転がした。はじめて聞く言葉が、ひどく耳になじむ思いがある。
「そう。いつの間にか出来ていたものなんでな、どうやったら出来るかさっぱりわからん。そのうちに、そういえばその時やたら炉の火力を高くしていたことを思い出した。しかし密閉式の炉で、人力ではそれがなかなか厳しい。水車を使った炉が必要だったのだ」
得心がいったクリスが頷いた。
「それで、今回の大学なのですね」
「そういうことだ」
イシクは渋面だった。
「あまり気は進まんかったがね。好きに研究をやらせてくれると、そこの男の父親がしつこく言ってくるから、講座を開かんでもいい条件で引き受けた。別に儂は誰かに教える為にやっているわけではないのだ。自分の好奇心の為だからな。まあ、自分から来る物好きな連中を追い払うほど狭い性根でもないが」
クリスはくすりと笑った。ここに自分を連れてきた男の知人であるが故に、とでも思えばいいのか。この老人もまた一風変わった人物であるようだった。

「しかしだ、必要だったのは炉と高温ばかりでもない。というより鉄は溶けるほど高温で熱すると、どうも脆くなってしまうようなのだ。それでまた、偶然これが出来たときの状況をうんうん唸りながら思い出してな。燃料と一緒にあったものに思い至った」
「特別なものだったのですか？」
「いやいや、どこにでもあるものだよ。鉄より身近なものだ」
答えを待つクリスに、男はあえて沈黙して相手の様子を楽しんで

いるようだった。
困惑する様子を見かねたニクラスが口を挟んだ。
「……先生。女性を困らせて楽しむというのはあまりいい趣味では」
「なにを言う、教師が生徒に質問したのだ、待つのが当然だろう。それに、儂はとっくに答えを言っておるじゃないか」
そんなはずは、と思いながらクリスは答えた。
「まさか――砂。ですか」
「その通り」
イシクは大きく頷いた。

「砂海のきめ細かい砂を燃料、材料ともに程よく燻してみたところ、非常に近いものができた。今までの鉄よりはるかに硬度のあるものだ。なのだが……」
「製法に、他にも問題が？」
「製法とはまた別なのだ。あらかじめ想定されていたものではある。――ニクラス君、やはりあの炉は馬鹿食いするぞ。今の貯蔵量なぞないにも等しい」
「やはり、そうですか」
ニクラスが頷いた。隣のクリスへ説明を補足する。
「炉を燃やすのには木炭が使われています。あれだけのものをあの火力で用いるのには、途方もない木材が必要になるでしょう」
ああ、とクリスは思い至った。確かにそれは重要な問題になる。
「試運転の段階でこれだからな。一度つけた炉の火はなるべく消したくないのだ。しかし、あれでは五日ともたんだろう」
この惑星で鍛冶技術がいまだ発展しないでいる決定的な理由の一つだった。限られた水源、そこから得られる材木にも限りがある。安定したヴァルガードの水源に木々は育つとはいえ、伐採してすぐに次が生え育つわけではなかった。
「実はそのことで、クリスティナ様にお話があります」
ニクラスが言った。

「私に？　なんでしょうか」
「アルスタ家の土地では、石の炭で暖をとられると聞きましたが、確かですか？」
「ええ、そうですが……」
頷くクリスに、イシクが目を丸めた。
「ほう。石炭が取れるのかね」
石炭とは青銅と同じく、一定の地域に偏在する地下資源だった。
この時代にはまだ判明していないことではあるが、石炭とは化石化した植物である。それが豊富にあるということはつまり、その近くには以前に安定した水源があったことの証といえた。
「その石炭を、この炉に融通してもらうことはできませんか」

髭の薄い顎をなぞったイシクが思案顔をつくった。
「ふむ。石炭を燃料に使ったことは今までなかったかな」
「燃えればいいというわけでもないでしょうが。石炭の火力は相当なものと聞きますので、ひとまず炉の温度は確保できます。それに、流れ着くのだけでもかなりの量になるのでしたよね？」
突然の申し出に戸惑いながら、クリスは答える。
「確かに、石炭なら近くからも上がってきますし、そのあたりの土を掘っても出てはきますが、しかしそうしたことは私の一存では。父に話を聞いてみなければ」
ニクラスは頷いた。
「もちろん、それでかまいません。一度、お話してみてくださいませんか」
工房で使われる燃料として、アルスタ家から石炭を提供する。話を聞くだけでは断る理由がないものに思えた。土地に余るほどある石炭は無償でということにはならないだろうし、この炉を用いた鍛冶技術から得られるかもしれない成果を思えば、それが高値でなくとも一向にかまわない。しかし、だからこそという不思議はあった。
クリスはニクラスを見る。自然と落ち着いた眼差しには、なんの

裏もないように思える。
透き通っているのに底が見えない、深い黒色をした相手の瞳に吸い込まれそうになっている自分に気づき、クリスはさりげなく視線を伏せた。自分一人での判断は避けるべきだ、と考える。
「わかりました。帰ったら父に話してみます。結果については、お約束できませんが――」
「本日の主役が、こんなところで悪巧みの相談か？」
楽しげな声が響いた。
振り返った三人はそれぞれの反応を見せた。ニクラスは片方の眉をあげて驚きを示し、クリスはあわてて礼の姿勢をとった。イシクは両手を広げ、大きく笑み崩れた。
「これはまた、今日は変わったお客が大勢くる日だな」
二人の供を連れた引き連れた女性が、壮美なドレス姿を軽く持ち上げて室内へと足を踏み入れた。
「ここまで辿り来るのに息が詰まりそうになった。鍛冶場というのは、どこもこのような暑さなのか」
「大抵がそうであるかと存じますな、皇女殿下。汗をかいて運動がわりになるかと思いますので、麗しい方々に大勢きてもらえると嬉しいのですが」
大仰に腰を折って臣下の礼をとりながらの軽口に、それだけで相手の性格を把握したアンヘリタ皇女が苦笑を浮かべた。
「アンヘリタでよい。老師のお名前も聞かせてもらえるか」
「イシクと申します、姫」
「ふむ。そなたは？」
「クリスティナ・アルスタと申します」
顔を伏せたまま、クリスは緊張した態で答える。
「そなたがか。一度話してみたいと思っていた。女だてらに並み居

る男よりも華麗に剣を振ると、噂になっておった」
「恐れ入ります」
アンヘリタは眉をたわめた。
「今のわらわは同じ大学で学ぶ学友だ。そうかしこまらんでくれ」
「……はっ」
答える声がやはり硬い。アンヘリタの視線を受けたニクラスがとりなした。
「突然、皇女殿下にお声がけをされれば誰でも驚きます」
「そういう自分はもう平然としているようだな」
「この男はそういう性格ですからな。まったく不敬の極みですて」
自分のことを棚にあげてイシクが茶化した。アンヘリタは苦笑を浮かべた。
「まあよい。ニクラスの驚き顔なら先に見たしな。しかし毎度毎度、話しかける度に目を丸まれては悲しい。少しずつ慣れていってもらえると嬉しいな。これでも、そうそうひどい外面でもないと思っているのだ」
これも軽口だった。ひどいどころか、彼女の容姿は飛びぬけている。彼女を例えて下々が言う煙るような美貌、とは水源豊富にして霧靄のかかるヴァルガードならではの表現だが、水天教を信仰する者にとってその意味するところはさらに重かった。そう冠されるだけの魅力を目の前の相手は持ち合わせていた。
顔を持ち上げて間近に彼女を見たクリスは、納得と同時に別の感情を胸中に抱いた。毛先まで櫛の通った髪、決め細やかな肌艶。柔らかさのある肢体と物腰。あまりにも違いすぎる、と悲嘆する自分に驚いた。いったい自分はなんと大それたことを考えている。
「それで、わざわざこんなところまで如何されたのですか」
ニクラスを見上げた皇女が呆れたように言う。
「戯け。どこかの誰かが、講座が終わってすぐにいなくなるのが悪い。お前を囲んで雄弁を讃えたいとしておった者がどれほどいたと

思っている」
「だからすぐ出たんですよ」
興味深そうにイシクが問いただした。
「そういえば、儂のところに来るのが遅れたと言っていたな。いったい何をしでかしたね、君」
「別にたいしたことは――ああ、クリスティナ様。これから御用があるのでしたね。どうぞお気になさらず」
声をかけられたクリスには用事などなかった。男へ口にしたおぼえもないが、明らかにほっとした心情でクリスは頷いた。
「はい、申し訳ありません。それでは私はこちらで失礼致します。イシク先生、アンヘリタ姫」
「うん。また来てくれたまえ。いつでも歓迎するよ」
「今度、庭先の茶会にでも誘わせてもらってよいかな」
「ありがたく存じます。――ニクラス様、先ほどの件は後日にて」
「よろしくお願いします」

深く一礼して部屋を去っていく。部屋の出入り口で待機する二人の侍女の間を通った彼女の姿が消えたのを見届けて、アンヘリタが露骨な表情でニクラスを覗き込んだ。目が意地悪く笑っている。
「そう慌てて隠そうとせずともよいだろう」
ニクラスは首を振って否定した。
「違います。あの方を工房にお招きしたのはわたしですから」
「君が女性を連れてくるというのにまず驚いたな。石炭の件があったからかい？」
イシクの台詞には、最初から隠そうという気すらなかった。ニクラスは苦笑するしかない。
「あるいはとは思いましたが、最初からそう思っていたわけではありません」
「石炭？　それはなんだ」
イシクから説明を受けたアンヘリタは、切れ長の瞳を細めた。

「あの火の鍋を燃やすのに、アルスタ家の石炭とやらをな」
相手の視線を自然とかわすよう、ニクラスは肩をすくめた。
「いくら立派な炉を作っても、利用できないのでは意味がないですから」
「色々と考えてはみたが、燃料だけは悩みどころでしたからな。儂には嬉しいことですが」
「それはなにより。老師の研究で帝国の民が豊かになるというのなら、文句もない」
しかし、と皇女は続けた。
「ニクラス。石炭をアルスタ家から賄うというのは、そちの考えか」
ニクラスは表情を変えなかった。
「ええ、そうですが」
「宰相殿は知らない話なのだな？」
一瞬の間も置かずに答える。
「はい。もし先方からいい返事をいただけそうなら、その時点で話そうと思っています」
「ふむ」
アンヘリタが面白がるように間を打った。汗を嫌ったのか、背に流れる長髪をすくう。音まで響きそうななめらかさで波打った。

「老師。炉というのは金属を溶かすものらしいな。石と金属は、つまりそこが違いか」
「いかにも。溶けて雑じる。石と違い、伸ばして曲げることができます。その変容こそが金属の真骨頂と言えましょうな」
「なるほど、そしてそれを可能にするのが、火。業火か」
アンヘリタがニクラスを見た。
「業（わざ）といい、業（ごう）という。そこに何をくべるのか、何が生まれるのか。興味深い」
口元には微笑のまま、眼差しだけが笑っていない。
「火も然り。あまりに強すぎる火は災いを招く。水天の教えでも、

全ての水を干上がらせたのは狂火と言われておるよな」
　その解釈は一般的なものだったが、ニクラスの考えは異なっている。しかしそれは本題ではなかった。
「そなたがしていることで、起こることは当然予想しておるのか。遠く水陸の未来をとはいわん、近くにいる人々のことを。そなたまさか、あの家を贄にするつもりではあるまいな？」
　ニクラスは答えた。
「そんなつもりはありません。彼女は友人です」
「約せ。ならばここで見聞きしたものは秘めおく。巻き込むつもりではないのだな」
「まずわたしが巻き込まれたくありませんから。わたしはこの炉が動いているところを見たいだけです。いえ、影響についても、それなりに考えてはいますが。少なくともクライストフ家が動くよりはましでしょう」
「その分、風当たりはアルスタに向く」
　アンヘリタは言った。ニクラスは首を振る。
「それで父が知らぬ顔をするというなら、この話は終わりです。結局は父と向こうのお父上での話になるでしょう」
「――そうして、アルスタをクライストフの剣とするか」

　皇女が重ねた言葉には、その日ニクラスが他者から受けたものでもっとも切っ先の鋭さがあった。
　帝国の重臣にあって、クライストフ家は貴族同士の政争から遠く高みにある。それはひとえに当主ナイル・クライストフの政治的手腕のなせるものではあったが、貴族でありながら騎士以上の爵位を持たない異色の存在、その孤高さ故に許されてきた部分もあった。帝国にある全ての貴族が、クライストフ家と懇意になることを望み、一方で他家がそうすることを恐れてもいた。
「その剣はただ国家に捧げられているはずです。そうでなければならない」

ニクラスは言い切った。
「アルスタの剣とはまさにツヴァイの剣です。そうではないですか、姫」
言葉を交わすうちに場に冷えた気配が漂っていた。気温によらず体感するその雰囲気を、皇女の軽やかな笑いが振り払った。
「ならば問われるのは持ち手の技量になるか。そなたはそなたのやるべきことを、わらわはわらわのやるべきことを。つまりはそういうことだな。なるほど、たいした話術だ」
美味を堪能する表情で言う。
「うむ、楽しかった。こうした論舌を大勢の前で闘わせることができないというのは、女の身が歯がゆく思うな」
皇女は本気でそう思っているような口振りだった。
「社交の場で日夜繰り広げられるものを思えば、比較にならないのでは」
ニクラスの言葉に再び笑う。
「それもそうだが。しかしあちらは種類が異なるからな。まあいい。わらわの手元ではどの剣も粗末に扱わせはせんよ。それと、楽しませたもらった礼に忠告しておこうか。ニクラス、そなたは今日、二人の敵を作ったぞ」
ニクラスは眉をひそめた。一人は思い当たりがあるが、もう一人は誰のことかわからない。
「マヒート・メイジャン。ナトリアの中堅貴族だが、さすがに覚えはあるまい。そなたの前に論客に立って、さんざに叩き伏せられた男だ」
「……なるほど」
「怨み嫉みは理屈ではないな。わざと自分が負けてから壇上にあがった卑怯者――そういう見方をする者もおるというわけだ。他にも様々な者が、様々な物思いをしているだろう」
途端に嫌な顔になったニクラスの様子を笑い、アンヘリタは続け

た。
「それが不満なら、講座に出るべきではなかったな。知人の受けた無礼を注ぐために出向いたなどと解釈してくれる者は滅多におらんし、したらしたでその人物はそなたの普段の行いを擬態と見る。警戒される」
中庭での一件を皇女が知っていることにニクラスは驚かなかった。
皇族としての生を受けた彼女は、間違いなく大学にいるどの人間よりも社交に長けている。様々な人から見聞きする情報の質も量もあるし、さらにお付きの者達がいた。目に見えている二人以外にも、彼女を護衛する役目の人間は配置されているはずだった。そうした者達から報告が入っていて不思議はない。
「目立ちたくないのなら、一粒の砂になって砂海の大流にまぎれておればよかった。それともうつけを演じるなら、最後まで貫かなければな」
言葉を返しかけ、相手の自分を見る眼差しに深みがあることに気づいて、ニクラスは小さく頭を振った。
「……普段から、意図があって行動しているわけではありません」
アンヘリタには逃げを打った男を逃すつもりはないようだった。
「ならばいっそう、そなたは警戒されよう。演じもせずにうつけをやってみせるなど、うつけ以外にはできん。普通はな」
自分の台詞の含みに自身で気づいた様子で口の端を歪める。苦笑した。
「まあよい。一言、言っておこうと思っただけだ」
不思議に思い、ニクラスは訊ねた。
「わざわざその為にいらしてくださったのですか」
「使い手が問われるのは、何も剣だけではあるまい」
答えるアンヘリタは当然といった顔だった。
「盾も筆も、ツヴァイのものであれば全て等しく相応の輝きをさせてやらねばならんだろう」
そうあるべしと生まれながらに決められ、それを自ら受け入れて

いる口振り。間違いなく帝国を支配する者の態度だった。
ニクラスは頭を下げた。当然としてそうするべきと思えたからだった。

ニクラスがその場を辞去し、皇女はまだ鍛冶場の見学がしたいと言ってその場に留まった。
イシクから様々な説明を受けながら、アンヘリタは素直に興味深い表情でそれらを見回った。工場で働く者達にも気さくに声をかけて慰労する姿に、声をかけられた職工達は一様に感激した表情だった。
やがて一通りの説明を終え、イシクは質問の有無を訊ねた。
「聞きたいことがある、老師」
「なんなりと。皇女殿下」
さきほどは是正された言葉遣いが今度は流された。今からされる質問がどのような立場からのものであるか、お互いに理解しているのだった。聞かれる内容についても見当がついている。
「あの男をどう思う」
予想していた通りの皇女の言葉に、イシクは即答した。
「面白い男であると思います」
「面白いか」
「左様。あれほど性根の曲がった者はそうはおりますまい」
「褒めている言葉に聞こえんが」
アンヘリタは笑みを漏らしたが、イシクは笑わない。冗談を言ったのではなかった。
「褒めも貶しも致しません。あれは面白い。同時に、不思議でもあります。不気味といってもいいでしょうな」
「どういったところがだ」
アンヘリタが訊ねた。

「一般的な貴族とまるで異なる見方をしているからです。そもそも、戦にも出ない貴族が、工房に来たりはせんでしょう。なんといいますか、あれの立ち位置は、むしろ我々に近いのではないでしょうか。よほど捻くれた教育を受けたせいかどうかはわかりませんが」
「教育。環境、あるいは血か」
「さすがはあの宰相殿の子、と思うところではありますな」
イシクは鼻を鳴らした。ツヴァイ帝国宰相ナイル・クライストフの奇矯さは他国も知るところである。
「変人か。確かにあの者は異色だ。……そうか、職工や学者に近い、か」
考え込んだ表情になるアンヘリタに、イシクは言った。
「的な、などという言葉は好きではありませんが。貴族的、という言葉を考えればもっともあの者には違和感が強く思えます」

「出世欲や名誉欲ではない。ならば、知識欲、探求欲あたりかな？」
男はゆっくりと頭を振る。
「そのあたりはどうにも。いずれにしても、信用はできても信頼はできない。信頼できても信用したくない。そういう男です」
「ほう、手厳しいな」
意外なようにアンヘリタが言う。イシクはちらりと向けた顔中に皺をつくり、言った。
「儂が性根が曲がっていると申しているのはですな、姫。それが、あやつ自身そう思われるように仕向けているように思えてならんからです。父親以上に年の離れた相手に向かって、まったく可愛げがないことこの上ない」
「なるほどな」
アンヘリタは笑った。そう考えれば、イシクの評はいかにも的確なものであるように思えた。
「すまぬ。もう一つだけ質問させてくれ」
「どうぞ、この老体にお答えできることでしたなら」

「もしもの話だ。そなたがそなた自身のまま、自侭に振舞える立場にあったら。このツヴァイを裁量できる立場にあったなら、何を望む？」

しばしの沈黙の後、男は答えた。

「――そうですな。水陸中の岩と土と砂を集め、炉を作り、資源を漁り、この水陸の地下にあるものを暴こうでもしますかな。どれほどの財貨を費やしてでも。学者というのはそうした生き物です。ひどく業が深く、自らの欲を満たすことだけを考えている」

「業欲か」

つまりはそこが肝要になるのだとアンヘリタは思った。

あの男がいったい何を求めているのか。そしてそれは、この国が与えることのできるものなのか。

それができるのなら、ツヴァイにとってあの男は益となる。この上ない人財であろう。それができなかったら――その場合には、そうした場合への対処があるだけだ。善悪ではなく、国家を在り続けさせる為にそれは必要なものだった。

皇家の者として当然の意識を彼女は持っていた。一個人に特別な感情を抱くことはない。それが上に立つ者の在り様だと躾けられてきたからだった。

「どのような首輪を用意するか、よくお考えになるべきでしょう」

イシクが言った。世間ずれした学者らしからぬ洞察に、アンヘリタは微苦笑で応える。

「首輪というもの自体に反発を覚える者もいよう。とくに男に多いと聞くが」

「なに、皇女殿下。男に犬や狼の違いがあるわけではございません。犬や狼にそれぞれ雄がいるだけです。当たり前ですがな。そして、何もかもから自由な者などこの世に存在しません」

彼女は続きの言葉を待ったが、男の言葉はそれで全てのようだった。意味深な言葉の意味を考えながら、イシクが年長者と教師を兼

ねた表情でいることに気づき、微笑んだ。

そう、何もかもから自由など者などありえない。それを求めるのは傲慢だ。

誰も彼もが、一人で生きているわけではないのだから。

「ありがたいお言葉だ。老師、また遊びにこさせてもらってよいか」

「歓迎いたします。もう少し薄着の方がお体にはよいかもしれませんぞ。工場の連中も喜びます」

最後の言葉は、アンヘリタはあえて聞こえないふりをした。どう取り繕ったところで、不敬にあたるのは免れないものであるからだった。

6

その日の夜、クリスは晩餐の卓で昼間に依頼された話の内容を語った。

「――クライストフ家の子息が、か」

彼女の正対に座って食事をとるその人物は娘の話す一言一句に静かに耳を傾けた後、皺枯れた声で呟いた。手の銀食器を置く。娘を見る視線は自然と厳しく、威風ある雰囲気が息吐くようにその全身に漂っている。

バルガ・アルスタ。十五の歳に初陣を飾って以降、半生の多くを戦場で過ごしてきたアルスタ家今代当主であった。その武勇は他国にまで轟き、将才は古の名将に例えられることもある。

それほどまでの名声の主でありながらツヴァイ国内で決して相応の評価を得ていなかったのは、アルスタ家が先の時代、皇帝後継のいざこざに巻き込まれて中央を追いやられたことが理由である。ツヴァイ国内よりむしろ他国の敵方において彼を認める声は大きい。

その彼が地方での軍務からヴァルガードに帰参したのは昨年のことである。同時にそれは中央政治、その社交の場に戻ったことを意味していた。それに関わったのは帝国宰相ナイル・クライストフであった。

祖先と等しく、自らもまたいずれ戦場で骨朽ちるのみと達観していたバルガは、突然のその声掛かりに困惑を隠せなかった。そして警戒した。いくら功を挙げても賞されぬことを当然としてきた男にとって、それは何かしらの謀であるとしか思えなかったのだった。

「クリス」

バルガは呼びかけた。長い戦場働きで枯れ果てた男の喉には、いくら濯ごうとも抜けきれない砂色が染み付いている。

「はい」
「大学はどうだ」
クリスは瞳を瞬かせた。唐突な話題に、少し遅れてから答えを返す。
「……興味深いことばかりです。面白い人物とも出会えました」
相手の詳細を問わずに、父親は続けた。
「クライストフ家のご子息の名は、なんと言った」
「ニクラスといいます」
「ニクラス。ニクラス・クライストフ、か」
バルガは瞼を閉じた。脳裏に参内の折、宰相の後ろに控えていた相手を思い出している。その時は挨拶を受けるだけで人となりまでを知ることはできなかったが、一瞬視線を絡ませたその眼差しだけは覚えていた。

奇妙な視線だった。不快ではない。今まで全く見たことがないような――と思い、ふとバルガはそれに近しいものに覚えがあることを思い出した。男がそれを見たのは戦場だった。
男は小さく息を吐いた。不快でなくとも、不安はある。アルスタ家、そして娘のこととなれば当然だった。宰相の次息がいったい何を企んでいるのか。じっと自分を見つめて答えを待つ眼差しを受けながら、男は胸中で思いを巡らした。

工房で図られているという新素材。鉄に変わる可能性のあるそれの製造に必要な為の燃料として、アルスタ家の収める地方で得られる石炭を供給してほしいという。
バルガもツヴァイに仕える軍人貴族である。その素材に関心は当然あった。鉄板を半ばからへし折ってみせたというその素材を用いれば、戦場で散る命の幾ばくかを少なくすることができるだろう。多くの味方を失ってきた彼にとっては、それだけでも充分な恩恵である。

しかし、だからこそ解せない。
石炭は確かに他の鉱物資源と同じく地下に偏って存在するが、それがとれるのは何もアルスタ家領だけではない。暖をとる為に用いられているそれらは、クライストフ家の人脈を使えばいくらでも他から取り寄せることはできるはずだった。別にその為に砂鋼とやらのことまで説明する必要もない。金を払うだけで、その素材研究の功績は全てクライストフ家のものになる。
そこに何故、アルスタ家を仲介しようとするのか。それは独占できるはずの功績を、あえて分け与えようというものに他ならなかった。
そして、それを言ってきたのが宰相ではなく、その子息である。あくまで正式な申し出となることを避けたのか。そこには宰相である父親が糸をひいているのか、あるいは個人の独断か――。

「どういう男だ？」
問いに、彼の娘は一瞬迷うような素振りを見せた。
「……変わった男です」
「そうか」
父の短い返事に何かを感じ取ったのか、弁解するように口調を早める。
「決して、不愉快な男ではありませんでした。むしろ逆に――」
そこで口を閉じた。
自分が何を言いたいのかわからずに苦しんでいる表情の娘を眺めるようにしばらく見た後、バルガは告げた。
「ご子息に返事を。次頃の末、ご挨拶に伺わせていただきたい。その旨、宰相閣下にお伝えいただけますか、とな」
「はい」
「クリス。お前もその時には同行してもらおう」
「私も、ですか？」

驚いたような声の後に、クリスは頷いた。
「――わかりました」
感情を抑えた返事のその端に隠しきれない喜色が見て取れる。
気づかないふりをして食事を再開しながら、バルガは先ほど脳裏に閃いたものを浮かべていた。再び息が漏れる。頭に思い浮かべるそれと、卓の向こうで嬉しそうにしている娘とを等分に、バルガは考えた。
不快ではなくとも、不安はある。自分がそう思う心情が、ツヴァイに仕える武人としてのものか、あるいはそれとも娘を思う父親としてのものなのか。そう考えたのだった。

「わかりました。では、わたしから父に伝えておきます。詳しい日取りはまた追ってご連絡を」
翌日、クリスからそれを聞いたニクラスは、安堵した様子も見せずに頷いた。
「はい。私と父でお伺いします」
彼らの目の前では、気難しい顔をした老人が手先に持った板片に細かな手を加えている。
二人が出ているのは先週、はじめて両者が顔をあわせた講座である。小さな教室には老人と、彼ら以外の存在はなかった。
「クリスティナ様が？」
少し意外なようにニクラスが言った。
「ええ。父からそのようにと。ご迷惑ですか？」
「いえ。失礼しました、迷惑などとんでもありません。クリスティナ様、ご伝言ありがとうございました」
ニクラスは答えた。その態度を見透かそうとして叶わないことを悟り、クリスは男から老人へと視線を移した。

その老人が何をしているのか、クリスにはまだ理解できていない。嵌め板を作っている、と言われてから自分なりに調べてみたが、それが何に嵌めて使うものかは全く見当がつかなかった。

老人はいつものように二人を無視して作業に没頭している。二人の話し声が不快そうな気配はなかった。邪魔をしてはいけない、と教室の外でニクラスを待つ彼女に気づき、早く入れとしかめ面で手まねきしたのはこの年老いた工匠だった。

クリスはちらりと横の男を盗み見た。退屈そうにも見える表情で目の前の仕業を見るその横顔は、何かの思案に暮れているように見えなくもない。少なくとも、本人が言っていたように面白がっている風には見えなかった。

――変な男だ。胸の裡で呟き、ふと思いつく。

クライストフ家を訪れるということは当然、その家の当主にも見えることになる。ナイル・クライストフ宰相。ツヴァイ帝国の重臣にして、多くの内政事業を推し進める才の持ち主。水陸各国の子息子女を集めた大学の提唱者であり、高位にありながら爵位を持とうとしない変人としても名が通っている。

間違いなくツヴァイの国政の中心にあるその人物と近しい距離で面会することに、不意な緊張がクリスを襲った。無礼のないようにしなければ、と思い、そういえば何を着ていけばいいのかと次に考えた。

彼女は身動きのとりづらい正装の類を嫌っている。可能な限り、今もしているような平装に近いものを好んでいた。剣が振れないというのがその理由だが、それが他の子女達から失笑を買う原因にもなっている。

しかし、さすがにそんななりで宰相閣下の目の前にでることが出来るはずがなかった。

今からでは新しい服の仕立ても間に合うまい。帰ったらすぐにファビオラに相談しなければ――とまで考えがいったところで、何を

自分は舞い上がっているのかと赤面した。

「そういえば」

彼女の内心など知りようもないニクラスが口を開いた。

「今朝、アンヘリタ様とお会いした時、クリスティナ様をお茶会に誘いたいとおっしゃっていました。お会いになりませんでしたか」

「ああ、いえ。お誘いは受けたのですが……」

言葉を濁しかけ、クリスは正直に答えた。

「あまり、ああいった場は得意ではないので、お断りしたのです」

「なるほど」

ニクラスは悪意のない表情で笑った。

「せっかくの皇女殿下からのお誘いで、申し訳なく思ったのですが」

「いえ、わかります。社交や宴会というのは、わたしも苦手です」

男からの同意を嬉しく思い、ふと思い出してクリスは訊ねた。

「宴会といえば。明日は学生同士の歓宴会がありますね」

「ですね」

一転、ニクラスの表情が苦々しくなる。

「アンヘリタ様からきつく釘をさされました。必ず出るように、と」

「ああ。確か今回の催しは、アンヘリタ様が――」

主催たるツヴァイの皇族である彼女が取り仕切るのは当然といえた。学生による晩餐会。それはこれから幾度も行われることになる伏魔の社交、その先駆けとなる。

「怠けようとするなら直接、迎えにいくぞ。と。あの方が言うと冗談に聞こえないのが怖いところです」

不思議に思ってクリスは訊ねた。

「皇女様のお隣がお嫌なのですか？　大変に名誉なことだと思いますが」

「中座どころか、満足に物を食べることもできないでしょうから」

ニクラスは肩をすくめた。ただの冗談だったが、物を食べる暇も

ないというのは恐らく正しかった。
問題はもちろんそればかりではない。
皇女の同伴にその国の宰相の息子がつく。学生の社交事とはいえあまりに刺激が強すぎる。アンヘリタ皇女は冗談めかしていたが、その台詞にどれほどの本音が隠れているかニクラスは慎重な思いだった。彼女は生粋の皇族と言えた。
「クリスティナ様はどうされるご予定ですか」
憂鬱な話題から一時でも気分を逃すよう、ニクラスは訊ねた。クリスは答えた。
「私は、特に決まっておりませんので」
「決まっていない？」
ニクラスは眉をひそめる。
「はい。あまりそうしたお付き合いも、アルスタにはまだ。父も、こちらには戻ってきたばかりですので」

彼女は一人で晩餐会に出るつもりでいた。
社交とは家の繋がりによって成り立っている。晩餐会などの宴会にはそうした縁から同伴の相手を選ぶのがはじまりだった。そうして出た社交の場でさらに知己を得て、あるいは人を頼りに交流を広げる。
アルスタ家にはそのとっかかりとなる相手がいない。戦場の勇者は社交の場では所詮、田舎者でしかなかった。そうであれと祖先がしてきた道でもある。彼女の父親はそのことを気遣い、乏しい人脈を辿ってみる旨を言ったが、娘は問題ないとそれを断った。例え周囲がそれぞれ知己と連れ合って参加しているところに自分が一人でも、何一つ恥じるところはないと彼女は思っていた。
「それでしたら、わたしがお誘いします」
思案顔になっていたニクラスが言った。クリスは笑って首を振ってみせる。
「大丈夫です。お気遣いなく」

「わたしがお嫌なら、他の誰かに頼みます。貴族の者か、あるいはそうでなくとも同伴の相手を務められるものなら心当たりがあります」
ニクラスがちらりと視線を向けた。つられて彼女も見るが、ニクラスの見た教室の扉には誰の姿もなかった。
「わたしのお誘いではご迷惑ですか、クリスティナ様」
慌てて首を振る。
「いえ。しかし、皇女殿下からのお誘いが――」
「問題ありません。その方がわたしにとっても嬉しい。アンヘリタ様の隣というのは、いささか以上に気が滅入ります」

そういうものか、と考えたクリスはふと自分の心中をいぶかった。一瞬、何かがざわめいたような気がしたのだが、意識した時には既にその声は落ち着いて聞こえなかった。
クリスは自分よりやや高いニクラスを見上げ、確かめるように訊ねた。
「……私などで。本当によろしいのですか」
「もちろんです、クリスティナ様」
ニクラスは言った。クリスは急な事の運びに気が急くばかりだった。
週末の訪問どころか、着古した支度で気楽に出向こうと思っていた晩餐会までが大事になってしまっている。
大変なことになった。家に戻り次第、ファビオラに相談しなくてはならない。

これから剣術の講座があると出向いていったクリスと別れ、ニクラスは中庭へ向かった。
大学の中座に拓いたその一画に彼が昼寝に訪れる木蔭がある。ニクラスは周囲から遠巻きに自分を見る視線を無視して、ごろりと身

体を横たえた。
「ヨウ」
「――はい」
声が応える。
「父上に連絡を。イシク先生の工房で使う燃料の件、目処がつきそうだと。そのことでアルスタ家のバルガ様が令嬢と一緒に来られるので、日取りの候補を」
「そのままのご報告ですと、驚かれるのでは」
気遣うような気配にニクラスは肩をすくめた。
「かまわない。それから、明日の夜会にアルスタ家のご令嬢と出ることも一緒に頼む」
声が沈黙した。ややあって、訊ねる。
「……怒っていらっしゃるのですか？」

「そうじゃない」
ニクラスは言った。
「ただ、先に手は打っておく。それに、アンヘリタ皇女からのお誘いを断ることもできる」
「あちらの当主様のご訪問前ですが」
「アルスタ家を中央に連れ戻したのはクライストフ家だ。それが社交の誘いをして、おかしがる相手はいない」
それについて何の配慮もしていない方がよほど見え透いている。内心で続けた。
「その後のことを考えれば、誰か別の者にお相手いただくほうが両家の為によろしいのでは」
「謀を先に持ってこられるのは、気分が悪い」
翻意を促すような響きに向かって、ニクラスは言った。わずかな不機嫌が口ぶりにあらわれている。
「――かしこまりました」
かすかな嘆息と共に気配が消えた。

ニクラスは目を閉じ、しばらく木の葉の囀りに意識を委ねた。木漏れ日からの陽が瞼を赤くちらつかせるのが気に触り、横向けに移って草の香りを嗅いだ。

聴講を予定していた講座が全て終わり、クリスは急いで自宅へ戻った。

立ち止まって頭を下げる家人達への返事もそこそこに、ファビオラの姿を探す。

「ドレスでしたら、既に用意して届いておりますが」

明日の晩餐、そして週末の訪問をどうすればよいだろうと訴えた彼女に、中年の侍女は落ち着き払った口調で答えた。

「……あるのか？」

「ありますとも」

当然と言った態度で頷く。

「お嬢様の晴れの舞台ではありませんか。お母様と私とで既に仕立てさせております」

「そう、か」

ほっと安堵の息を漏らす主人を興味深げに見やり、ファビオラは訊ねた。

「それで、その羨ましいお相手はどこのご子息です？」

「――クライストフ家の、ご子息だ」

おやまあ、とファビオラは丸っこい瞳を瞬かせた。

「いつの間にお仲良くなられたので」

「仲良くなどは、いや。まあ、悪い人物ではない」

答える様子がますますそれらしいことに、内心でファビオラは複雑な思いを抱いた。まさかとは思ったが、これはもしかすると本当にそうかもしれない。

彼女は先日、主人から話を聞いてからクライストフ家の次男につ

いての噂を集めていた。その中には、今の主人には聞かせられない類のものもあった。
所詮は市井の噂である。確たる証拠があるものでもないが、それが事実であった場合、主人は傷つくだろう。明日のことを思ってか、見るからに嬉しそうに表情をなごませている主人を見て、彼女は前もってそのことを話しておくべきか迷った。
忠実な侍女がその決断を果たす前に、扉がノックされた。姿を見せた家人から、旦那様がお呼びですと主人に伝えられる。
「すぐに向かいます。ありがとう。――ファビオラ、助かった」
去っていく主人の背中を、ファビオラは複雑な表情で見送った。

同じ頃、ニクラスも自宅の屋敷で父親からの呼び出しを受けている。
公務から戻ってきたばかりの宰相ナイルは、玄関口で彼の帰りを待っていた執事に息子を呼ぶよう言いつけ、自室に戻った。
「報告を聞いた」
すぐに現れた息子に向けて、ナイルは単刀直入に言った。
「工房の件。アルスタ家を仲介するのか」
「そうしようと思います」
ニクラスは答えた。
「もっともしがらみのない相手が、アルスタ家でしょう」
「そして、明日の歓宴会にもアルスタ家の令嬢を伴うか」
「はい」
ナイルはため息を吐いた。

「見え透いているな」
「関心も疑念も向くでしょう」
「それもわかった上か」
「そうでなければいいことです」

ニクラスは平然としていた。
「アルスタ家の忠誠は国に捧げられています。惑うことはありません」
「剣にするつもりはない」
「盾にされるおつもりでもないはず」
親子が視線を合わせた。
ナイルが瞼を閉じる。組んだ手のひらの向こうから厳かな声を押し出した。
「――まあいい。週末、アルスタ家当主を招く。オルフレットと、お前も同席するのだ。ニクラス」
「はい」
「手紙はこちらから出しておく。さがっていい」
「失礼します」
ニクラスが部屋を去る際、父親の声がその背中にかかった。
「クライストフは戚にはならん」
「わかっています、父上」

7

大学開講から十日目の夜、学内の大講堂において催された歓宴会は壮大なものだった。

主催はツヴァイ帝国アンヘリタ・スキラシュタ皇女。あくまで学生達の為の催しであったが、皇族の名を冠したものである以上、そこにはホストたるツヴァイの面目がかかっていた。

講堂全体がきらびやかな飾りを施され、無数に並ぶ食膳の料理は皇族専属の調理人をはじめ熟練の技を振るった。腕利きの職人が組み上げた中央の噴水にはヴァルガードの豊富な水源がひかれており、天然の冷蔵に万彩の果実が山と積み上げられている。

アンヘリタ皇女が短い挨拶に立った舞台上、その裏側では劇団が各国それぞれの音容を奏で、いたる所に活けられた花木の香りが室内に芳しかった。こもりがちな熱気は天蓋に開かれた窓から吸い出され、かわって吹き抜けから新鮮な空気が給されている。ゆるやかな風を受けた灯火が揺れ彷徨い、それが一層、幻想的な雰囲気の演出となっていた。

常人が垣間見ようものなら目も眩む程に輝かしいその場の只中で、参加者の一人であるクリスは息が詰まる思いを覚えていた。心証の問題ではなく、実際に彼女の胸部にはきつく強制具が巻かれて深い呼吸を阻害していた。

「……お加減は大丈夫ですか」

隣を歩く彼女の様子を窺い、ニクラスは声をかけた。

「平気です。申し訳ありません」

クリスは微笑んだ。内心で、ファビオラめ、気合を入れすぎだと悪態をついておく。強制具の縛り紐は、あきらかに普段以上のところで留められていた。

ニクラスがアルスタ家を訪れたのは夜会の開催時間に間に合うぎりぎりの頃合だった。晩餐前の社交も夜会の重要な一部だから、礼儀としては余裕をもっておくべきだろう。男が遅れた理由を急用かなにかかとクリスは思ったが、そうではないことを会場について理解した。

案内役の者に連れられ、講堂に足を踏み入れた瞬間、二人は多くの者にとり囲まれた。

それぞれ一級品の仕立てに着飾った子息令嬢が我先にと声をかけてくる。某国の誰それ、何々家の云々と挨拶を受け、クリスはそれに応えるだけで精一杯だった。

「ニクラス様、先日の講座を拝見いたしました。素晴らしかったですね」

「ありがとうございます」

彼女の隣に立つ男は、悠然として不足ない受け答えを返している。いつもの容易に奥底まで見通せない表情に、今は口元へ微笑を浮かべていた。

いかにも手馴れた様子の男の隣で、クリスは自分の相手に辟易した。

もはや名前も覚えていない子女の一人から矢継ぎ早に話題が繰り出される。一気呵成と畳み掛ける勢いを捌ききれずに閉口するばかりだった。これが剣術ならクリスにも腕に覚えがある。突き、引き、叩く、どのような剣筋にも対応できる自信があった。しかし社交場での会話となればそれはまったく異なる。つまりは経験不足に尽きた。

二人を囲む人の輪は開宴の口上が始まるまで途切れることがなかった。壇上でアンヘリタ皇女が挨拶をする間、ようやく一息つける気分でクリスは細長い嘆息を吐いた。深く吐くことは強制具のせい

でできずにいる。

ニクラスの手がクリスをひいた。見上げる彼女に透明な視線を向け、男はそのまま壇上の挨拶に見入る集団から抜け出した。囲みを抜け、壁際にまで辿ってから声をかける。

「ここならしばらくは大丈夫でしょう」

言って、近くにある長椅子を目で指した。

「お座りになりますか？」

「いえ、大丈夫です」

クリスは断った。まだ開演前から早々と腰を下ろしてしまっては、周囲の嘲笑の的となる。自分の無様はともかく、それで連れに恥をかかせるわけにはいかなかった。

「申し訳ありません。母と夜会に出向いたことは何度かあるのですが、急にあのような勢いに飲み込まれてしまうとは……」

わかります、とニクラスは頷いた。

「開宴直前に来れば大丈夫かとも思ったのですが。さすがにあれ以上遅れては角が立つかと――事前にお伝えしておくべきでした。すみません」

男はこれあることを予想していたのだった。

「……それで、遅く到着されたのですね」

「もう一つ。時間がある時にアンヘリタ様に捕まれば、壇上での挨拶を強制されてしまいそうな気がして。これは、ただの予感ですが」

「なるほど」

クリスは嘆息した。相手への感心と、いかに自分がこうしたものに不慣れであるか改めて痛感したのだった。

「やはり、わたし以外の者に同伴を頼むべきでした。申し訳ありません」

謝意を示した男の表情を見やって、クリスは決意を固めた眼差し

で答えた。
「いえ。私もこれから、アルスタの者として幾度も立たねばならぬ場ですから。よい経験をさせて頂き、感謝しています。不肖の身ではありますが、どうかお付き合いさせてください」
社交に出かけるというよりは、戦場に赴く武人の表情だった。いや、恐らくその通りなのだとニクラスは思い出す。迎えに行った際、彼女の見送りに出たアルスタ家人は頭をさげた。その残した台詞が脳裏に残っている。――ご武運をお祈りしております、お嬢様。実にらしい言葉だった。
「……やや厳しい戦場かもしれませんが」
問う言葉に応える瞳には不屈の輝きがあった。
「望むところです。初めてから埒外の勝利をなど大それたことは思っておりません」
「生きて帰れ、再起あり。ですか」
ニクラスが言った。クリスは微笑んだ。
「誤った言葉が広まってしまっていると、父は顔をしかめていました。生きて帰せと。そう訓示したつもりなのだがと聞いています」

名将バルガ・アルスタの武勇談として伝わる言葉だった。後背を突かれ、危機に陥ったツヴァイ軍を叱咤し、殿軍を引き受けて撤退を成功させた際に残した言葉として知られる。
「お会いできるのが楽しみです」
「父もそのようなことを申しておりました」
ニクラスは一瞬、微妙な表情になった後、クリスの何の含みもない顔色を見て笑った。
「何か？」
「いいえ。それでは、参りましょうか。ひとまずアンヘリタ様へのご挨拶に伺おうと思います。周辺、様々と人はおりますが、さっきのような事態にはならないでしょう」
大学に参加する大勢の中で、特に上流貴族と呼ばれる人々の集団

に出向くということだった。緊張の面持ちでクリスは頷いた。
「――わかりました」
「全て聞こうとする必要はありません。相手は棒藁か何かだと思ってください。会話の最初と最後、その時の相手の視線に気をつけていれば大体、相手の言い分は把握できるものです。専門的な話についてはわたしか、アンヘリタ様が手助けしてくださるはずです」
「はい」
会場に拍手が生まれた。皇女の挨拶が終わり、その手に透明な器を掲げている。近くを通りかかった給仕からそれぞれ杯を受け取ると、高らかな乾杯の唱和が講内に響いた。

壇上から降りたアンヘリタは、既に幾人かの輪に囲まれている。壁際に沿って二人がそちらに向かう途中、その姿を見つけた皇女から茶目のある微笑が送られてきた。
「おお、待っていたぞ」
周囲の視線が二人を捉え、居並ぶ顔ぶれにクリスは内心で息を呑んだ。
そこにいるのはまさに特別な人々だった。ツヴァイとその友好国の上級子弟、将来に国を治め、国を動かすことになることが確実であるとされ、社交に疎い彼女でも名を見知る者ばかりである。
「直接に話すのは初めてという者もいるだろうから、改めて紹介しよう。我が国一の変な家と、我が国の誇る剣の家の二人だ」
悪意のない笑いが生まれた。
「ニクラス・クライストフです。皆様、よろしくお願いします」
苦笑のニクラスが挨拶する。クリスも緊張の心中を覆い隠し、礼儀に則ってドレスの裾を持ち、腰を落とした。
「クリスティナ・アルスタです」
「どちらにいらっしゃるのかと、ここにいる皆様でお話をしていた

ところでしたよ、ニクラス様。クリスティナ様」
黒髪を後ろに撫でつけた若者が爽やかな笑みで言った。男女からともに好まれる笑顔の若者はブライ・アソカットといい、帝国北方に位置するサシュナ地方の有力貴族である。
「この男、今日の会にも来るかどうか怪しくてな。もし現われなんだら、クライストフ家の屋敷に乗り込むつもりでいた」
アンヘリタの軽口に、ブライが乗った。
「それはさすがの宰相閣下も驚かれることでしょうね。そのお顔を見るためにも、ぜひお供してみたかった」
ニクラスがやんわりといなす。
「ここに居並ぶ皆様を急にもてなさなければならないと言われたら、父以上に、まず家の者達が倒れてしまいますね」
「確かに……それは考えただけでも恐ろしい。うちの者なら皆、逃げ出してしまうでしょう」
「ええ。ですからわたしと父で不慣れなお茶をお入れすることになりますが」
「なるほど。いや、それでしたら逆に一杯の価値がありませんか」

たちまち歓談の華が咲き、クリスはその輪に入れず取り残された。口元に微笑をたもちながら、同伴の男の滑らかな口調に呆れるような思いでいる。講座での一幕でもそうだったが、直前まであれだけ嫌がっておいて、一旦喋りだせば実に堂にいった態度をする男だった。
「――クリスティナ様」
横合いからかけられた声に視線を向けたクリスは慌てた。
「ナトリアの……クーヴァリイン・ナトリア公女殿下」
「クーヴァリインと、どうぞ」
たおやかな微笑を揺らし、相手は応えた。
ツヴァイ西方の広大な地帯を治めるナトリア領は、元はツヴァイと並び立つほどの水陸の大国だった。それが内乱介入の形でツヴァ

イに属し、公国と名を変えてから既に日が長い。ナトリアの属国をもって、ツヴァイは水陸一の版図を築くに至ったのだった。
クーヴァリイン・ナトリア、ナトリア公爵長女である。公爵の地位が示す通り、家格からいえばツヴァイでも最高位にあった。帝国で今現在、廃嫡せずに残る公爵家はベラウスギ公爵家など数少ない。
その公爵家長女は予てより絶世の美貌を噂され、口に出すことは憚られつつもアンヘリタ皇女に比するとまで言われている。確かにそれほどのことはある、と同性ながら見惚れる思いでクリスは目の前の相手を見た。
西方よりむしろ東方の民族色に近い濃い肌に、漆黒の髪艶が流れるように脇に落ち、深い知性を感じさせる双眸が柔らかい。見るものに華やかな気色を与えて止まないアンヘリタ皇女と異なり、思わず深いため息をつかせてしまう雰囲気の主だった。目も眩む美貌、という巷の噂は言い得て妙であり、面白い対比でもあった。一方では光に煙り、一方で闇に眩む。奇妙なようで腑に落ちる言い回しに思える。

「失礼いたしました。クリスティナ・アルスタと申します」
慌てて挨拶を返すクリスに柔和な所作で、クーヴァリインは小首を傾げて言った。
「お噂はかねがね。クリスティナ様は、お酒を嗜まれますか？」
「は？　いえ。申し訳ありません、私はあまり……」
ほっと安堵の笑みを見せる。
「ああ、よかった。それでしたら」
クリスが手渡されたのは半透明に透いた果汁の満ちた杯である。
「こちらで取れるヴィケの果汁なのですが、今年はとくによいものが出来て。誰彼かまわずお薦めしているところなのです。よろしければ、是非に」
「ありがとうございます。いただきます」
押し抱くようにして受け取り、クリスは杯を口元に運んだ。よく

冷やされた口に含んだ果汁が、鼻腔まで爽やかな香りで抜ける。自然と声が出た。
「――美味しいです。とても」
「よかった。お酒にまですると、どうも不評なようで。皆様、よく酔われるものが好まれるようなので寂しく思っていました」
素直な喜びが溢れた表情に、クリスも心からの笑みになる。公女の笑顔には相手の緊張を蕩かす魅力があった。
「本当に、美味しいです。やはりナトリアの食べ物は風味が違うのですね」
「そうですね……こちらに参る際に、食べ物のことは少し心配でした。そのことで父や、皇女殿下にもお心配り頂いて。今日の宴会にも、故郷の料理まで」
「主催として当然のことだ」
場を移してきたアンヘリタが会話に参加した。

「今回の企みだけは、好きにしてよいと言われていたからな。半年前から色々と練りに練ったのだ。あの中央の大細工など、渋い顔の宰相から許可をとりつけるのには苦労したが」
宰相ナイルを真正面にやりあう皇女の姿を脳裏に想像し、クリスは思わず笑みがこぼれる。同時に、ニクラスが目の前の相手へ一目置く理由もわかるような気がしていた。
「毎日がそうであれとは思わんが、必要な派手もある。威を見せることも催主の務めよ」
「他国の皆様も満足されているご様子です。こうまで故郷の味を楽しめるとお考えではいなかったでしょう」
クーヴァリインの言葉に、アンヘリタは首を振って笑った。
「故郷の味そのもの、とはさすがに言えないがな。食材を運べば質は落ちる。料理人も可能な限り腕利きを揃えはしたが、やはり故郷の味は故郷で食べてこそだろう。そうではないか、クーヴァリイン」
「確かに――家庭の味、というのは、材や腕とは異なるレシピとな

るかもしれませんね」
「心ばかりはどうにもならんよ。それを履き違えてはな」
二人の美姫はやんわりとした視線を絡ませた。
どうにも場違いな思いで、クリスは手に持った杯に口づけた。
「それぞれ秘伝の仕込みというものもあろう。クーヴァリイン、次の催しの仕切りはそなただったな。期待しているぞ」
「はい、アンヘリタ様。私も、父に困り顔をさせているところです」
にこやかに笑いあう場は会場にあって一段の華やかさだった。それぞれの卓から遠目にすがめ、眩しそうに仰ぐ視線も数多い。

近くで談笑しながら、ニクラスはやや戸惑いつつやりとりを交わすクリスの様子を横目に見守った。この二人の側なら大丈夫だろうと当てをつける。
アンヘリタ皇女とクーヴァリイン公女。社交の相手としてはいずれも一筋縄どころではない相手だが、まさか初回から散らす火花でもないだろう。話が鞘当て程度に終わるうちに慣れておくべきでもあった。二人ともが、これからの大学社交において主役を務める人物である。
ふとニクラスの隣に立つブライが、意味ありげな視線を投じた。そちらを振り向いた先に、数人の供をつれて立つのはベディクトゥ・ラグゼ・アシアセレだった。
「これは、ベディクトゥ様」
「ご挨拶に伺いしました。先日は、すぐに教室からいなくなってしまわれていたので」
「申し訳ありません。少し予定がありましたもので、失礼しました」
「ああ、なるほど」
ベディクトゥの背後に並ぶ一同、好意的な表情をしていない。恐らくはラグゼの名を持つ氏族であろう彼らの視線とは別に、アンヘリタとクリスが注意を向けている気配もニクラスの背中にある。

「改めて先日の御礼を申し上げます。宜しければまた、機会に論じあわせて頂けますか」
社交的な表情を浮かべた誘いの言葉に、ニクラスは即答した。
「お断りします」
ベディクトゥは平静な態度を崩さず、その背後の何人かが眉を吊り上げるのを見ながら続ける。
「ただし、中庭で横になりながらということでしたら、いつでも」
ベディクトゥが眉をひそめた。
「中庭で。ですか」
「はい。大勢の前でというのは、どうにも慣れていないのです」
白々しいといえばそれ以上ない。平然と言うニクラスの態度がどういった思索を図った上でのものか、周囲からは容易にわかりづらかった。
妖精が沈黙の粉を撒き、程なくしてベディクトゥが笑みを漏らした。嫌味のない表情だった。
「――なるほど」
苦笑するような吐息と共に、右手を差し出す。
「でしたら、昼食と共に伺わせて頂きましょう」
「その時は後ろの方々も是非」
握手に応じながらニクラスは言った。反応に困った様子の一同に、ベディクトゥが笑った。
「後でこちらの卓にもおいでください。他の氏族の者もおりますので、ぜひご紹介したい」
「できればそれも、中庭の昼食でお願いしたいところなのですが」
困ったようにニクラスが言った。それを見たベディクトゥの背後の者達が、ようやく表情の硬さを解く。互いに顔を見合わせて肩をすくめて笑いあい、それを見たニクラスも笑みを浮かべて応えた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8672p/

砂の星、響く声 外伝

2011年11月21日02時10分発行